アイツの秘密

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイツの秘密

【Ｎコード】
Ｎ０６４２Ｋ

【作者名】
ｓｈｉｒａｈａ

【あらすじ】
少女漫画オタク舞原華をけなしながらも、ひかれていく吉井幹也。しかし、サッカー部のエースでファンクラブまである杉岡圭斗がライバルになったり、妹に幼なじみの光が言いよったり心配で夜も眠れない。そんな時舞原の少女漫画が実は…。

個性的な僕たち（前書き）

少女漫画の読みすぎと後輩に言われてから思いついた話です。実際今少年漫画にハマってたりしますが、どうか登場人物を可愛がって下さい。

個性的な僕たち

昼休みの教室

「で，このセリフがいーの！かっこいい！！」

「はい。うるさいよー。みんなに迷惑だかんねー。」

夢見る少女な女、舞原　華は少女漫画オタク。

「また騒いでんなー。黙ってりゃ隣に歩かせてーくらいたのに。」

杉岡　圭斗は俺にぼやいた。

「お前それ何度目だよ。キモオタクをよくそんな目でみれんなー。」

舞原に聞こえるような声で俺は言う。本人は騒いでて気付いてないけど。

放課後

部活で忘れ物をした俺は走って教室に向かった。

ガラッ

教室には窓際で舞原がせつなげに読書をしていた。

「うぅ。」

俺が教室に入ったのも気付かず涙を流していて、巻き込まれたくない俺は見なかった様にバックを持った。その時ガタッと机が動いた。

「あれ？吉井いたんだ。」

涙垂れ流しのまま舞原は俺を見て言った。

「ねぇ！ちょっとこのシーン見てよ！」

来た。少女漫画なんて興味ねーし。けど、うるうるとした目で上目使いされっと断れねー！！

「あー？」

表紙はムダに目がデカくてキラキラした女と男が背中をあわせていて、いかにもむずがゆい。早くこの本から逃れたい俺は、ペラっと一ページ目を…。

何？何だコレ。

「ねっ？面白いでしょ？」

舞原の声より漫画から目が離せない。いや、エロい！！俺が持って

るエロ漫画よりはるかにエロッ。

「で、このシーンがね。」

ズイッと舞原が体を近づけて来た。

「は！？オマッ　おまえっ泣いてたのこのシーンかよっ。」

そのシーンとは女が男のピーをピーしてるところ。

「だってやっと、やっと舐めれたんだよっ。」

つ…ついていけない。ひそかにいいなと思っていた俺がバカだった。

「わりー。俺部活戻るわ。」

俺はフラフラと教室を出た。

「作戦1成功。」

舞原がそんな事を呟いたなんて気づきもしなかった。

次の日の通学路

「はよー！」

バシンッと悪友の荒城　清（きよ）に背中を叩かれ、俺は前によろけた。

「うっす…。」

「あんれー？いつもは百倍にして返すミッキーがどったの。アレのやり過ぎかぁ？」

「ミッキー言うな。幹也だ。つか朝から下ネタマジ勘弁。」

自分が意外と純粋だと知った１５の夜。夕べ一睡もできなかった。

「あれ？舞原じゃねー？」

ギクッ。朝から会いたくねーヤツと…。

「スーツの男といるぜ。オタクのくせにやるナー。」

俺はキヨの目線の先を見た。そこには昨日見た少女漫画もといエロ漫画に出てきそうな　いかにも紳士的な男と腕をくむ舞原がいた。

「ってあれ現国の有野じゃん。」

「マジかよー。噂流しちゃいますか？」

キヨの悪ノリ来た。

「つまんねー。」

「オイ。今日ノリわるいぞ。幹也の目の下クマできててキメエし。」

「うっせ。キヨの前髪のがキメエ！」
なぜかいつも前髪をカールしているキヨ。
「これが俺のポリシーだ！」そんなやりとりをしていると靴箱についた。
「おはよ吉井。ついでに荒城。」
まばゆい笑顔の舞原サン。
「おっす。」
「ついでかよ！それより舞原チャンさぁ。いでっ。」
「行くぞ。おまえ数学見せろって言ってただろ。」
「ミッキーだいすきー。いってー何で殴るんだよ！」
二度キヨを小突いて教室に向かう。ふと振り向けば舞原はいなかった。
「何だよつまんねー。」
俺はぼそりとつぶやいていた。

夕べ頭の中に雑念が浮かびまくった。舞原にエロさを負けた。男としてなんか…。うん。男らの年なら女の子のが精神年齢は成長してんだろうけど、悔しい。やっぱ実践が一番か？いや、さすがに俺のキャラ的にキスまでだろ。
「吉井君。机早くひいて。」
いつの間にか掃除の時間だった。
「はぁ。」

無意識に出ていたため息。

「よっしーどうしたの？」

クラスのマドンナ　桜　未来が話しかけて来た。いつ見ても目の保養になる。

「桜には関係ねぇし。」

「あはっ。何よソレー。そーだ。最近モテるらしいね？」

「嫌味かよ。モテねーし。」

桜の言う事はちょっと当たってる。舞原の事で忘れていたけどなぜかよく告られれる。モテ期なのか、からかわれてんのか分かんねぇけど。

「こらっ。何話してんだよー。」

「キヨ、トイレ掃除だろ。」

「未来に着やすく話しかけないでくれるー？」

こわっ。チャラいヤツが真顔になると迫力があるのはナゼだろう。キヨは女絡みになると容赦ない。

「もぅ。キヨってば。」

「ダメだぞー。男はオオカミだからな。ガオー。」

「きゃーっ。」

はいはい。やっとけやっとけ。とか言いつつ二人みたいなバカップル正直うらやましいと思う自分がいる。

「あ。そだ、幹也また呼ばれてたぞ。なんか…場所忘れた。みく～俺ケガしたんだよ。保健室行こうぜ～。」

「もう。違うことが目的でしょ～。」

「当たり～。」

そのまま二人は教室を出た。

おい。俺どこに呼ばれたんだよ。今日部活休みだし。教室で宿題でも終わらすか。

「吉井っ。」

やべ。俺寝ちゃったか。パチッと目をあけるとそこにはドアップの舞原がいた。

「ぐわぁっ！」

ガタンッ

俺はイスからおちてしりもちをついた。

「いって～。何してんだよ！大人しくエロ漫画読んどけボケッ。」

「ぷっ。顔真っ赤ぁ。カワイー。」パシャッ。いや、パシャッて何

で写メってんだよこの女。頭おかしいだろ。

「それかせっ。」

「ちょっ　やめてっ。」

もちろん携帯を取り上げようとしてるだけです。

ガタタンッ。

「よし。消すから…な。」

「…。」

俺何で舞原の上に乗ってんだ？ヤバい。

「それよりさ。昨日の続きしよ？」

「いやいやいや。昨日何もしてねーじゃん。」

「間違えた。さっきの続きだね。」

動けない。意味分かんねぇ事言われてんのに。動きたくない。漫画オタク女なのに。

俺はゆっくり舞原の小さな唇に自分の唇を重ねた。フレンチキス。

「じゃ。俺帰るから。」

「分かった。」

引き止められると思った。舞原の唇の感触は初めてじゃない。
―さっきの続きしよ―
そうか。舞原は俺が寝てる時　キスしたんだ。

「俺さまだ分かんねーけど、舞原の事女子の中では一番気になるから。」

ハズいから舞原に背を向けていた。

「うん。私はどうだろうね？」

「おまえ覚えとけよ。」
振り向いた時、舞原の顔は林檎みたいに赤くてうつむいていた。

ここで俺の胸はドクンと跳ね上がった。抱きしめてーけど今日はやめといた。

ふと外を見た。

「もう暗いし送る。」
「あっでも。うーん。ちょっと待って。」

舞原は電話をかけた。
「もしもし？はる兄あのね…うん。違うの…」
誰だ？ヤバい俺今何か黒い。

（ピッ）

「あ、おねがいします。」

「ん。」

気になるけど相手が誰か聞けなかった。かっこつけたいから聞かなかった。

このままさらいたい

なんて舞原が聞けば喜ぶのか？俺は本の中の男のまねはしない。

「吉井？どうしたの？」

「舞原ってさ、好きな人いる？」

「どうして？」

そこへ車が近づいて来た。ウィンドウがゆっくりおりる。

「華　　やっぱ送る。」

「はる兄…。」

はる兄って現国の有野か。これで話が繋がったな。

「良かったな。俺失礼します。」

俺は無我夢中に走った。

イラつく。こんな自分嫌になる。

何だよ。期待させんなよ。

俺もうこんなに舞原のこと好きなのに。

家に入る前に二階の窓から隣に渡るヤツを見た。

俺は自分の家に入る前に、お隣の水田サンちの呼び鈴を連打した。

バタバタと家の中から足音が近づいて来た。玄関のドアが開くとそこには、近所でも評判の光くんが爽やかな笑顔で立っていた。

「おかえりお兄さん。」

「誰がお兄さんだぁ？テメェまた人の妹の部屋に忍び込みやがって、何が“何でもできる光くん”だ。ただの泥棒猫だろうが！」

後半ちょっとひがみ入りました（笑）。

「はぁ。僕は大好きな可愛い雪ちゃんに呼ばれたらいつでも窓から入るだけだよ。幹也くんも分かんないかなぁ。何があっても駆け付けたい気持ち。」

俺はドキッとした。分からなくもない。光は中3で俺より年下のクセに。まだボケッとしてると思ったのに、本気で人を好きになるってこんなに人を成長させるんだ。

「って、光窓からじゃなくて玄関から入れって言ってるよな！」

「えーめんどー。」

「おら、ウチでメシ食うんだろ。」

光は一人っこで、両親は仕事で遅くいつも一人だ。本当は弟みたいにかわいかったりする。本人は口がさけてもいわねーけど。

「何かあった？」

「やっぱバレたか。」

「部屋上がったら？」

「や、母さんに何も言ってねぇし。」

「メシ8時だろ。まだ7時前じゃん。」

光はいつもは、ぼーっとしていて時々鋭い。たまに俺のが年下な気分になるくらいだ。てか有無を言わせねー。

「んじゃお邪魔しまーす。」

いつも思うけどこんな広い家で一人は寂しいよな。

「相変わらず殺風景な部屋だな。」

「必要なモノ以外いらない。それよりどした。ひょっとしてフラれた？」

「うぜー。まだフラれてねぇよ。」

俺ははっと自分の口をふさいだ。光ひっかけやがった。ニヤニヤ光が笑っている。とりあえず舞原の話をしてみた。

「ふーん。落ち込むところないよな。ってか幹也くんって、純ってか女々しくないか？」
「はぁ？殴るぞマジで。」
俺のヘロヘロパンチを光は楽々避けた。
「でもそんな女やめといたら？俺が可愛い娘紹介するからさ。」
「だっ。誰も付き合うとか言ってねーよ！」
コンコンと窓から音がした。窓の外で妹の雪が手をふっていた。
「ゆきー！」
「おいっ。雪おまえもんな事してんのか？」
窓から男の部屋に入る妹なんて見たくなかった。雪を抱き止める光。何で俺の周りはラブラブばっかナンだよっ。
「お兄ちゃんやっぱここにいたんだ。」
「雪まさか夜中とか来てねぇだろうな？」
「お兄さんゆきちゃんは僕がちゃんと受け止めてますから。任せて下さい！」
「今雪としゃべってるから。光ダマレ。」

はっきり言って二人をまだ認めてない。いや認めたくない。

「夜中はさすがに光ちゃんちに渡る事はないよ。」

「『夜中は』な。つーことは夜はあるってことな。」

「あ　ご飯だって言いに来たんだ。お兄ちゃん行こ。」

信じてない訳じゃねーけど、女と男が二人きりで何もないとか無いだろ。他のヤツから見たらシスコンかもしんねぇけど、雪が傷つかずにすむならそんなの関係無いだろ。

「雪は先行っとけ。光ちょっと話がある。」

雪は光をちらっと見て部屋を出た。

「もうしゃべっていい？」

「あぁ。」

「幹也くん。僕が雪を傷つけると思ってるだろ？傷つけないよ。あの時みたいに子供じゃないから。」

「雪は許しても俺は一生許さねぇから。雪に関しては信用できねぇ。」

「ふぅん。お腹すいたなぁ。早くいかないとタイセツな家族待たせるよ？」

悔しい。俺しか知らない光の悪魔の部分。誰にも言えないんだ。ふと舞原が頭によぎった。前を歩く光は、いつの間にか俺より高くなっていた。

家に入ると母さんから子機を渡された。

「誰？」

「男の人みたいよ。」

なんじゃそりゃ。母さんらしいけど。

「電話代わりました。」

《もしもし。有野です。》

「こんばんは。何か用ですか有野センセ？」

《伝え忘れていたから電話したんだが、作文出してないのは吉井だけだ。単位落とすぞ。》

「は？脅しっスか。」

《明日までに書け。以上だ。》

「ちょっと待って下さい。そんな事の為にわざわざ電話しねぇだろ？」

《クスッ。舞原　華のこと知りたいか？》

「…。」

《明日の放課後準備室で待ってる。ブチッ…ツーツーツー》

舞原か。知りたければ本人に聞く。…ムカつく。何より有野に聞いて近道しようと少しでも考える俺自身に腹立つ。

有野の挑戦状受けて立つ。売られたケンカ買ってやろうじゃねぇか。

気合い入りすぎて朝5時に目ぇ覚めた。二度寝してもだりぃから、久しぶりに走ることにした。玄関を出ると朝の匂いがした。鼻にツンとくる寒さが心地よい。

しばらく走ると後ろから声がした。

「吉井？」

「おー、杉岡。」

サッカー部のエース杉岡は、一つも息を切らさずに走って来た。流石毎日走ってるだけある。

「また走り始めたのか？それとも、モヤモヤするから走ってるだけ？」

「どーせ後者だよ。」

「オレ今日告ろうと思ってんだ。」

いきなりの話の展開についていけない。

「杉岡まさか」

「そ。吉井の言うキモオタクに。」

俺の心をみすかすように笑う杉岡から、何を言っても揺るがない意思を感じた。

「じゃ学校でな。」

「待てよ。」

俺は杉岡の肩をつかんだ。

「どうした?」

「今まで散々言ってたけど、俺もアイツのこと好きなんだ。」

それを聞いて杉岡はニッと笑った。

「あぁ。知ってたぜ。じゃーな。」

走り去るライバルを見て俺は固まっていた。あの自信は何処からくるんだよ。確かにファンクラブあるらしいけど。

それよりいつからバレてた?まぁ、ライバルは多い方が燃えるけど。

そして、学校に着くなり舞原と杉岡とすれ違った。杉岡の表情を見ると今から告るトコロをだ。気になる。めちゃくちゃ気になる。後をつけたい衝動を抑え、教室へ向かった。

席につくと、何かがガサついた。引き出しの中を見るとピンクの紙袋が入っていた。紙袋には…舞原のエロッ漫画が。俺は隠す場所がなかったので慌てて自分のカバンに突っ込んだ。ふと、机に女の子らしい文字の落書きを発見。

【興味ありそうだったから貸してあげるね】

「はぁ！？」

「さっきから何ゴソゴソしてーんの？」

「出た。口軽星人！」

キヨに見つかれば1日で全校に広がると言われている。

「みっきー　まさかっ。」

「なっ何だよ！！」

「教室でオ」

「バカか。おまえの愛しの桜が来たぜー。」

「今ケンカ中なのー。別れよっかなぁ。」

キヨから別れるなんて初めて聞いた。

「縛られたくないし。」

「キヨがしばってんじゃん。」

「んー。そーいう意味じゃねぇんだよ。ま、お子ちゃまの幹也くんには分かんねぇかもな。」

「分かりたくもねーし。早く席につけよ。」

「はいはい。すぐ拗ねない。」

キヨが席につき、ふと外を見ると雨が降っていた。

―アイツらまだかな―

いつもは好きな雨も今日ばかりは、俺の心を重くする。

杉岡が戻って来た。

「舞原は？」

「あ―。今その話やめてくれ。」

その言葉に俺の胸はざわついた。杉岡からほのかに香るアイツの匂い。無意識に教室を飛び出していた。学校で一番の告白スポットといえば…階段裏。

「舞原！」

一足遅かった。舞原は有野に抱きしめられて泣いていた。

ストーカーと思われても後をつければ良かった。ヒーローがタイミングが良いのは絶対そのせいだろ。

「舞原！」

もう一度呼んだ。いや、叫んだ。俺はもう退かない。

「今はちょっとそっとしてくれないかな。」

有野がイラついていた。いつもは冷静で眉一つ変えないあの有野先生をここまで変える舞原。心がチクチクジクジクする。

「放課後とかまどろっこしいのナシにして、今話してくんねーかな。」

「華を保健室連れてってからね。」

舞原は泣き疲れて眠っていた。有野の胸で安心して眠る彼女なんて見たくなかった。

「華をこんなに泣かせた男を許さない。」

有野は舞原を抱き上げて歩き出した。俺は黙って後をついていくしかなかった。

俺は何も言えない。杉岡みたいに舞原の全てを奪いたいっていつも思ってるから。

「作文は？みたトコロ書いてないみたいだな。」

「あ、教室です。」

ガラッ

俺は保健室の扉をあけた。先生は不在らしい。

舞原をベッドに下ろして、有野は俺を見た。

「華がいやらしい漫画読んでるのは知ってるかい？」

「はい。」

有野は眠る舞原の頭を愛しそうに撫でながらゆっくり話だした。

舞原と有野はただの生徒と教師だということ。俺にはそうは見えないけど。

エロ漫画を読んでる事は俺と先生にしか言ってないらしく、友達には普通の少女漫画を見せてること。何かを試すために。

「どういうことですか？」

「さぁね。あとは君たちの問題だろ。」

「それより先生がサボっても怒らないことに驚きました。」
「はぁ。華は君のどこがいいんだろうね。」
「うっ。それより舞原はケガとかしたんスか？」
「どこも怪我はないよ。あぁ見えて華は…。教えない。自分で考えなさい。」
「なんスか。何もなかったなら良かった。じゃ俺教室戻ります。」
「男として、女の子のそばにいるプライドはないのか。ここにいなさい。オレは次授業だから。」
有野先生はいつもの無表情で保健室をあとにした。

「……。」
舞原は寝たまま泣いていた。触りたい。だから君の側にいれない。
俺は指で彼女の涙を拭った。そして小さなピンクの唇に目を奪われた。キスしたい。

俺は欲望を抑えるため、カーテンをひき隣のベッドに寝た。目を閉じてもなかなか眠れない。

「んー。」
カーテン越しに舞原の声が聞こえた。
「はる兄いるんでしょ？このまま聞いてくれる？」

ヤベッ。俺有野だと思われてる。早いトコ言わねーと。

「人を好きになるって苦しいね。」

ズキッと心が痛んだ。グスッと泣く声が聞こえる。俺はカーテンを思い切ってあけた。

「ごめんっ。俺盗み聞きするつもりなかったんだけど…。」

ドンッ

「いってー。」

その音と共に後頭部に痛みが走った。そして舞原が俺に抱きついていて、ベッドからダイブされたんだと分かった。

「おいおい。普通ベッドに飛び込むだろ？全くなんなんだよ。」

とか言いつつ抱きしめる俺。

「もう作戦とかどうでもいい。私吉井が好きなの。」

「顔見て言えよ。」

「ハズいからムリ。」

しがみつく舞原。何なんだこのカワイー動物は。作戦とかよく分かんねぇけど、ゆっくり舞原を抱き起こした。

「俺はもっと好き。」うつ向く彼女の耳元で呟いた。

「えっ？」

「やっと目ぇ見たな華。」

3度目のキスは、スゲー熱かった。
心臓の音が伝わるくらい深い深いキスをした。

「ちょっ…ここ学校！」

「今さら？で俺たち付き合う？」

「いじわる。決まってるじゃん！」

そして彼女は俺にキスをした。不意打ちはヤバい。

「あはは！まっかー。」

「うるせぇ。教室戻るぞ。」

手を繋いできた華。めちゃくちゃ嬉しい幸せな時間。

単純な俺は、この時すっかり忘れてた。恋愛は人の犠牲からも成り立つ事。そして、やっと彼女になってくれた舞原　華が泣いていた本当の理由を。

個性的な僕たち（後書き）

まだ続編を書きたいと思ってます。華ちゃんや光くんの過去。そして、主人公のヒミツを書きたいです。

カスミソウ

必要なモノ以外いらない。幹也くんがいればそれでいい。どうして僕は幹也くんの弟じゃないんだろう。

雪がうらやましい。小1から僕は幹也くんの後をべったりくっついていた。雪をキライと思ったことはない。もちろん幹也くんを恋愛感情で好きなわけでもない。

でも幹也くんの一番近くにいる人間が僕でないと気にいらなくて。色んな人を傷つけた。たとえ雪でも僕の中で邪魔だったんだ。

「光ちゃーん。」

道端で僕に抱きつく雪。いつものことだから何とも思わない。

「一緒に帰ろうか。」

「うん。光ちゃん大スキ。今日もお勉強教えてね。」

「幹也くんの方が頭いいじゃん。」

「だってお兄ちゃん『歴史は暗記だろ。自分でやれ。』とかめんどくさがるんだもーん。」

幹也くんらしいな。ってか幼なじみのお兄さんに執着する僕自身にいい加減吐き気がする。時々、僕って同性愛者かって思うくらい幹也くんのこと考えてる。

「おいおい。おまえら近所迷惑。目の毒だ。」

白の学ランに少し長い髪をワックスで遊ばせて、切れ長の目に高い鼻の幹也くんが近づいて来た。本人は気づいてないが、町を歩けば誰もが振り返り、写メを撮られたりしている。

「げぇ。お兄ちゃん邪魔しないでよー。」

そんな彼の妹の雪は正反対のくりくりの目で年齢より下に見られる。こんな妹を溺愛するのも分かる。ポニーテールが揺れて可愛い。よく兄妹でカップルに間違えられるらしい。

「お兄さんこんにちは。雪がいつもお世話になってます。」

「だから何キャラだよ光。雪は後で俺の部屋来い。」

雪が僕の後ろに隠れた。

「やーだよ。私光ちゃんとお勉強するの。お兄ちゃんと違って受験生は忙しーんですー。」

「じゃあ。僕が代わりに幹也くんの部屋行こうかな。」

「えー。私の部屋来てよう。」

いつの間にか幹也くんは前を歩いていた。よく見るとメール不精の彼がメールしてる。まさか。

「幹也くん彼女できた？」

「…まぁ。ってか光に関係なくね？」
「相談乗ってあげたのになぁ。」
「お兄ちゃんサイテー。」
幹也くんは走って行った。口が達者じゃないから、二人にせめられ耐えられなかったらしい。
ギュッと雪が僕の腕にしがみついた。
「どうして光ちゃんはいつもお兄ちゃんをみてるの？」
「何のこと？僕はいつも雪のこと考えてるよ。」
「とぼけないで。」
「しょうがないよ。側にいたいって思うんだ。」
「それって…ホ」
「ホモじゃないから。雪にもいるだろそんな友達。」
僕は雪の頭にゆっくり手を置いた。
ホモとかレズとかバイとか気持ち悪いとは思わない。
あなたを思う気持ちは恋に似ているんだ。
「光ちゃんやっぱホモだね。」

「だから違うって。…たぶん。」

また一つ想いが深まった。

付き合って初日のメール。もちろん嬉しいけどめちゃくちゃめんどい。華のメール可愛いんだけどごちゃごちゃしてる。

俺電話のが好きなんだけどな。まぁしゃべんないけど声聞きたい。

マナーモードにしていた携帯が震えた。

「…はい。」

《あっ…舞原です。今話せる?》

「今声聞きたいって思ったんだ。全然大丈夫。」

《私も幹也君の声聞きたくて。》

今心臓鷲掴みされた。携帯から俺のドキドキが伝わりそうだ。

《幹也君?》

「どうしよう。俺、華のことめっちゃ好きだ。今から会いてえ。」

《いつから好き?》

「はい？」

《私はね。最初幹也君はただのかっこつけだと思ってた。》

まぁ。俺も舞原をキモオタクだと思ってた。

《…やっぱり電話じゃやーめた。私も大好きだよ。おやすみ。》

ツーツーとむなしい音が携帯から響く。何かよく分かんねぇな。ま、嬉しかったけど。

ガチャ

「お兄ちゃん。…何にやにやしてんの？変態！」

バタンと部屋から出ていく妹。しまった。エロ漫画ベッドの上に開きっぱなしだった。

「幹也くーん！」

今度は窓からドンドン音がした。ベランダをつたって光がきた。

仕方なくガラガラと窓をあける。

「おまえ一歩間違えれば真っ逆さまだぞ。」

「僕にもエロ本見せてよ。」

ヒョイっと侵入する光は…クソ身長無駄に伸びやがって。雪いわく水田光はアイドル級の人気者らしい。なんじゃそりゃ。

「光くんはアイドルらしいからヨリドリミドリだろ？それに中坊に

はまだ早い。」

俺は光が漫画を掴む前に取り上げた。

「幹也くんって相当欲求不満だね。」

「何だよその余裕。」

「僕がいいサイト教えてあげよう。」

「マジ？どんなのだよ。」

「もちろん無修正。」

俺はパソコンをつけた。すぐに光がネットで検索している。光の横顔はあまりにも真剣で俺は吹き出しそうになった。

「すごいだろ？」

「金髪じゃねぇか！俺黒髪が好きなんだよなぁ。」

「この待ち受けみたいな？」

携帯を勝手に開く光。

「って　俺待ち受けにしてねーよ！華のヤツいつの間に。」

「なんかこの女、幹也くんの元カノに似てるね。」

それには触れて欲しく無かった。

「全然似てねーよ。」
「あーそういえば、元カノさんこの間駅で見たよ。」
ダメだ。もう終わったんだから。
「関係ねぇだろ。もう光には邪魔はさせねぇよ。」
本当に関係無いのか？
オレは現代国語の教師、有野春吉（２７）。やっと授業が全て終わった。ネクタイを緩めて準備室に向かう。
今日は見回りか。ふとあの日を思い出した。
あれは半年前。放課後見回りしていたら、１―５の灯りがついていた。消し忘れかよ。勿体無いな。そう思い、反対校舎まで向かった。
教室のドアを引くと、艶やかな黒髪のロングストレートが目に入った。こんな髪が綺麗な生徒は一人しかいない。
「舞原、下校時刻過ぎてるぞ。」
「あっ。すいま」
「はい。漫画没収な。」
それが君とのきっかけだった。オレは取り上げた漫画をめくりながら話した。

「へぇ。今の女子高生ってコンナの見んだ。結構過激ー。」
「有野先生まだ二十代じゃん。」
「文学小説を読め。文学を。オレ二十七だからな。ひょっとしてモテてるか？」
「先生ってそんな性格だったの？カタブツかと思った。一部にはモテるかもね。」
女子生徒と二人きりの放課後の教室は、少しキケンな香りがした。
「もう暗いから送ってやろうか？」
「あはっ。先生のほうが危なかったりして。」
彼女の髪が揺れて、ほのかに甘い香りがした。
「…そうだな。」
全ての雰囲気がオレを狂わせた。まさか生徒にキスをするなんて…あり得ない。
「えっ…やめて下さい。」
教室から逃げるように出ていく舞原。
「何してんだオレ。」
きっとこれは夢だ。自分にそう言い聞かせた。夢なら彼女を抱いてるはずだよな。教師と生徒とか見つかればクビだ。先輩の教師に結

婚した人いたけど、お互い相当な努力だったんだろな。

何真剣に考えてんだろ。一歩間違えばセクハラで訴えられる。オレってかなり現実的。てか、彼女いるし。やっぱ今のキスは浮気だよな。ガキに欲情するとかまだまだなオレ。

「はる兄！聞いて！」

「おまえ声でかい。」

想い出に浸っていたら、一気に現実にひき戻された。

「ノックしろ。ノック。」

「ごめん。私吉井と付き合う事になったの！はる兄のおかげだよ。」

「雛鳥が巣だった気分だな。」

「何それ。もっと喜んでくれると思ったのに。」

「これからはここに来るな。勉強の質問以外って言いたいトコロだが、華はオレに勉強なんて聞かないからな。」

バカ。そんな寂しそうな顔するな。抱きしめたくなるだろ？

「分かってる。それがはる兄との約束だもんね。」

そして彼女はまた逃げるように部屋を出るんだ。

「はる兄も彼女とお幸せに！」

今度は笑顔でゆっくり部屋を出た。
オレの目から水がこぼれたのは、気のせいだ。

「彼女なんていね―よ。」

あの瞬間から君だけを守るって決めていたんだ。君が傷つけばいつでもそばにいたいから。

あの瞬間がいつかはオレしか知らない。明日からは普通の教師と生徒。今日まで仲良しの教師と生徒。略奪愛なんてオレにはムリだなんて想いは、一瞬にして崩れていた。これが本気で人を好きになるってことか。

絶対に華はオレを頼る。そのため、オレは優しい兄ちゃんを演じてきたからな。吉井幹也には負けない。

「口が軽いヤツは寂しがりやなんだよ。」

幹也はいつも核心をつく。最近モテ期だなんて言うけど、幹也は中坊の時からモテモテだった。まぁ、アイドル的女の子はこの荒城清がいただいたけど。誰にでも好かれるヤツってムカつくだろ？

「キヨー。ノート返せ。」

お。噂をすれば影。

「マジ助かった。さすが数学マシンみきや。」

「おわっ。また落書きしやがったな！しかも油性かよ。」

心が広く生まれたかった。いや、鈍いヤツになりたい。

「悪い悪い。自分のノートと間違えちった。」

そんなのウソ。

「いいよ。これ計算用だし。」

かなわねーな。数学なんて簡単だけど、わざとノートを借りる。

「あ、キヨさ。桜と別れたら後悔すんぜ。」

「おまえに言われなくても分かってるから。」

はー何をやってもかっこつくんだよな。これからも利用させてもらうぜ。イロイロと。

華の漫画を読むことにした。まぁどんなのがタイプとか参考になるし。1ページ捲るとやっぱエロい。というか、絵のアングルが際どいっつうか。

「幹也ぁ。何読んでんのぉ？」

ぶりぶり女来たぁ。香水クサッ。

「あー。妹に借りた本だよ。」

もちろん隠す。

「そうなんだぁ。それよりぃ今日の髪型どぉ？」
髪になんかが刺さってる。ひたすらケバいわ。
「何で俺に聞くんだよ？いーんじゃね？」
「冷たいー。ゆんたんショックぅ。」
早くどっか行けよ。ってもういねーし。今度は杉岡んトコ行った。
ヤベッ鼻が効かなくなった。

「幹也君。今日クッキー作って来たんだけど、食べる？」
キミは天使だ。
「もち食べる。すっげぇ！手作り？ウチの妹とか料理全然駄目なんだぜ。」
「あはっ。喜んでくれて良かった。妹さん会いたいなぁ。可愛いでしょ？」
「めっちゃ嬉しいし。雪？会わねーほうがいいぜ。生意気だし。」
そこにキヨが乱入した。
「雪ちゃんめっちゃ可愛いじゃん。幹也かなりのシスコンでさーこのあいだとか」
「わーわー！余計なこと言ってんじゃねぇよ。キヨだってブラコン

だろ。」

「オレの場合、面倒見が良いんだよ。」

華は笑って聞いている。なんか俺この幸せを皆に分けてあげたい。とか心の中でだけ思ったり。

「そういえば華は兄弟とかいんの？」

「うん。弟が二人いるよ。」

「へぇ。」

なんか手強そうだな。キヨは桜のところに行っていた。素早いヤツばっかだな。

「小6と中3だよ。」

「俺の妹も中3。同中だったりして！」

「ウチの弟は新緑中だよ。」

「一緒だ。」

他愛もない話が、これから試練を呼ぶなんて俺達は想像してなかった。

心とカラダの成長期

体育は俺たちにとってのオアシス。梅雨の今は男女共に体育館なわけで。

「坂木の胸揺れてね？」

「赤井美脚ー。」

「桜ナイスバディーだな。」

そこで鈍い音が響いた。

「オレの彼女を変な目で見ないでくれるー？想像すんのもヤメロな。」

犯人はキヨだ。そこまで自分の彼女を独占するのはある意味うらやましい。そして他のヤツらは桜を盗み見ていたりする。

高1にしてあれだけのプロポーションなら誰だって一度は…。俺に手をふる華を発見した。おいおい試合中によそ見はヤバいでしょ。

「華危ない！」

俺もいっちょ彼氏らしいことやりますか。

バシッと華の顔面命中しそうなバレーボールをはね返した。ヒューとかキャーとか野次が飛ぶ。

「幹也君ありがとう。」

「当たり前だし。」

「何が当たり前だ！ガキのクセにかっこつけやがって！吉井は正座しとけ。」

はぁ。体育教師め。今時体罰だぜ。

俺はキヨたちの元に帰り、バカ笑いされながら正座した。

「でもさ、舞原チャン狙われてなかった？」

「オレも見た見た。」

俺以外の周りのヤツらも見たとか言ってる。

「はぁ？んなワケねぇし。だとしたらイジメじゃん。」

シンと静まる。ちょうどホイッスルが鳴り、試合が終わった。

「まぁ気のせいかもしれねぇし。余計なこと言って悪かったな幹也。」

キヨにポンと肩を叩かれた。もしも俺と付き合うことで華に何かあるなら、絶対許さない。一度のコトだしただの偶然だよな。

幸せの体育が重苦しくて仕方なかった。

その日部活が遅くなるから先に帰ってもらった。女の子を遅くに帰したくなかったし、避けてるとかそんなんじゃねぇ。そんなんじゃねぇんだ。

一人の帰り道はマイナスなことばかり頭に浮かんで、胸が苦しかった。

ガチャ

「ただいまー。」

玄関に見慣れない靴がチラホラ。しかも男モノばかり。

ドタドタと俺は二階にあがった。俺の部屋のドアが少し開いてる。

「不法侵入！警察よぶぞ。」

光がパソコンいじっていた。光だけなら日常茶飯事だけど、まさか友達まで連れ込むとは。

「幹也くんおかえりー。僕のパソコン壊れてさ。」

「んな事聞いてねーだろ。てか誰ソイツ。」

見た目好青年だけど、光の友達だけあってなんか胡散臭い。

「あ、こんばんは。勝手にお邪魔しちゃってすいません。ぼく舞原樹です。」

神様嘘だと言って。よく見るとただのヤンキーだ。

「あ！お兄ちゃん、樹くん私の彼なの。」

そして妹は舞原弟に抱きついた。これは光の仕業？ちらっと光を見

たら満面の笑みしてますねー。

「俺、絶対反対だからな！不在の人の部屋に入るな。今すぐでていけ。」

「あのお兄さんぼくは！」

「お兄さんはお兄さんでも違うんだよ！あーまどろっこしい。」

俺はテンパっていた。華と結婚して樹が義弟になるなら良くて、雪と樹が結婚しての義弟になるのは猛反対って言いたかった。

「ごめんねー。幹也くん今こんがらがってるから、帰ろうか。」

「雪のお兄さんってシスコンって聞いたけど、ここまでなんてね。ぼくもシスコンだけど負けるよ。」

「樹くん私の事嫌いになった？」

「まさか！」

パタンと部屋のドアが閉まり、三人の会話が遠ざかる。俺はベッドに寝転んだ。今日は波乱の1日だった。ただ言えるのは、舞原弟の出会いは最悪だった。

電話しようかなー。瞼が重くなり、目を閉じた。

目が覚めると、携帯の光が点滅していた。華からメールがきていた。まだ朝方の2時だから、俺は目を閉じた。

目覚まし時計をとめ、俺は歯を磨きながらある事に気付いた。樹はもしかすると従兄弟とか、華とは全然関係ないかも知れない。そうだよな！俺名前に敏感すぎんだよ。

「あ、おはようございます！」

俺はブハッと歯磨きの泡を吹き出した。その声の主はここいるはずのない舞原樹だった。これが華ならどんなに嬉しいか。

「また不法侵入か！」

「樹くんには私が準備する間あがってもらってるの！お兄ちゃん洗面所独占しないでよ。」

「驚かしてすいません。玄関でいいって言ったんですが。」

あー。この完璧な標準語ムカつく。俺は無視してリビングに向かった。なぁにが、「〜ですが」だ。おまえは文法の専門家か！いかにも頭いいんです的な顔しやがって。認めないっつってんのに。

「あら、おはよう。幹也珍しく早いわね。朝からイケメン見たら母さん幸せでねー。」

「はよ。いつもとあんま変わんねぇよ。イケメンは毎日ここにいんだろ。」

食パンをかじりながらぼやく。もちろんイケメンとか冗談。

「自分で言うあたりまだまだね。彼女にそんなことばっか言わない

のよ？」

「はぁ？」

「光くんに聞いたわよ。」

「全くプライバシーの侵害だ。朝からどいつもこいつも～。」

「樹くんはやっぱり言葉遣いから違うわよね。」

「すいませんね。俺そろそろ行きますから。」

ったく。樹に聞くのは悔しいから華に聞くことにした。

いつもより早く学校に着いた俺は、教室に入るなり2・3人でだべる華に話しかけた。

「ちょっと話があるんだけど。」

「…なに？」

華の手をひいて渡り廊下に移動した。二階の渡り廊下はカップルの憩いの場で、朝イチは誰もいなかった。

「あのさ。」

「幹也君、私に何か言うことない？」

これは…もしかしなくても華さんキレてます。

「な、何怒ってんだよ。」

「聞きたい事あるなら私が怒ってる理由見つけてからね。それまで会話禁止だから。」

フンッと俺を通り過ぎて教室に戻る愛しい彼女。　まさか、もっと言葉で愛情を表現して。とか？いやいや、俺意外と言いまくりだよな。

パカッと携帯を開く。そこにはメール一件の表示。紛れもなく華からのメール。内容を見て俺は走り出した。

そして廊下の窓から外を見ている華を見つけた。

「はなっ！」

「分かった？」

「デート！今週の日曜大丈夫だから。」

廊下で大声であり得ないけど、俺は必死だった。

「幹也君全然デートに誘ってくれないんだもん。普通最初は男の子から誘うんだよ？だから精一杯メールしたのに、の・に！」

「ごめん。俺あんまべったりすんの好きじゃねぇんだ。けど華がそんなに悩んでたなんて、ちゃんとしたデート行こうな。」

その瞬間、華の目から涙がぶわっとあふれた。

「もう、もうやだ！別れる～。」

「は？意味分かんねぇ。」

そんな騒ぎだから周りには野次馬だらけ。

「幹也ちょっと来い。」

「華、落ち着いて。」

俺はキヨに呼ばれ、華は友達になだめられた。

男便で俺は説教？をくらっていた。

「鈍いのにもほどがあるぜ。べったりしたくないなんて、本人の前では言わないもんだぞ。しかも、デートとか『誘いまくって最後まで』ってゆうだろ？」

キヨが先生に見える。どーせ、経験少ないですよ。しかも『誘いまくって最後まで』って初めて聞いた。

「分かってるよ。アイツやっぱ少女漫画に夢見すぎなんだよ。ちょい疲れてきた。」

俺の言葉にキヨがため息をつく。

「それを含んで舞原チャンが好きなんだろ？みんな言わなかったけど、付き合ってるってバレた日ヤバかったんだぜ。」

「ヤバいって何が？」
「舞原チャンの呼び出しだよ。今はだいぶ収まったけど男なら好きな女守れよ。有野先生が守ってたみたいだぜ？よく分かんねぇけど。」
まだまだ俺はガキなんだよ。キヨとか有野とかみたいにはなれない。
人の気持ちってすぐ冷める。けど、今回は違った。
俺はあるドアをコンコンコンとノックした。
「どうぞ。」
「失礼します。」
「そろそろ来ると思ったよ。」
「作文書いてきただけっスよ。」
有野はデスク用の眼鏡を置いた。そして作文なんていつも持ってない。
「なんてちょっとかっこつけただけ。舞原のことは吉井に任せてるからね。」
先生の鋭い眼力で一瞬怯みそうになった。だけど逃げたくない。俺も睨む。
「華って呼ばないんスか？それともやっと自分の立場に気付いたと

か。」

「調子に乗るなよ。好きな女も守ってやれないガキが彼氏ぶるな。」

「誰にでも知られたくねぇことはあるんだよ。俺が言うのはナンだけど、カッコ悪いとこ好きなヤツには見せたくねーから。」

「男と女は違う。そして、本音と建前もな？最近のガキは文学を読まないから知識が足りないな。この本読んでまた作文を持って来い。」

ぽいっと本を投げられた。避けたい衝動にかられたが、反射的に受け止めた。

「…はい。先生に聞いてもらって少し分かったよ。」

「小便臭さが残るから早く出ていけ。」

「言われなくても行くから！」ガチャン

本なんて久しぶりだ。漫画なら読むけど。漫画と言えば華に借りっぱなしだ。

有野は本気で華を好きなんだ。華は何で俺を好きになったんだろう。あー考えるだけで会いたくなって来た。ケンカしてもやっぱ好きなんだよなぁ。

好き好き言いすぎだし。好きっていつも感じ方違う。キュンとかキューとかズキッとか心臓に一々突き刺さってくる。俺だけじゃねぇのか？って苦しむと、相手の表情も辛そうだったりするから、この

気持ちは平等なんだ。

さてさて、どう謝るかなー。

この場合、直で言うしか無いだろ。が、しかし。学校中探しても華はいなかった。

帰る途中、俺は見た。妹が両手に男ではないか。だけど、いつもみたく乱入する勢いもなく。片方は光だし。片方は…樹かー。何か俺帰宅拒否しようかな。

近くの公園に入った。時間的にちびっこはいなかった。ただし、カップルだらけ。

うわっ！あんなことしちゃってるよ。まるで発情期の猫だな。

「幹也ー。」

イチャイチャカップルの友達いねーし。

いた。

「キヨか。」

「よっしーちゃんと華ちゃんに謝った方がいいよ！」

「うるせっ。もう俺行くわ。」

桜とキヨはラブラブだな。この間までしばるだの言ってたのによ。

石を蹴りながら公園を後にした。

あーあ。俺のべったりってあの公園のカップルみたいなイメージなんだよな。やっぱ公園とか外ではムリ。でも家には、受験生の妹と幼なじみの光がいるからいちゃつけない。逆に妹はすぐ彼氏家に入れるんだよな。必然的に邪魔するけど。

家の前で何やら、樹が急いでいた。

雪がわがまま言ってる。またまた、近所迷惑だっつうの。

「なーにしてんだ！」

「お兄さん。実はウチの姉ちゃんが高熱で、今すぐ帰らないといけないんです。」

「私も行くー。お粥作るから！」

樹の腕をひく雪に、拳骨を一発。

「雪のお粥食べたら、ハラ壊すだろ？俺のチャリ貸すから樹くん気をつけてな。」

雪は俺の拳骨には弱い。滅多に叩かないから黙りこんだ。

一礼して樹は姉の元に帰った。

「雪、光にチャリ借りるって言っといて！」

「…はーい。」

雪トーン低ッ。俺は樹の後を追った。つか光のチャリ高い。ちょうど信号機赤になる。

「樹くん！」

めっちゃ貧乏ゆすりしてるよ。もしかすると彼も極度のシスコン？

「どうかしましたか？チャリ必要になったとか。」

樹から貧乏ゆすり消えた！好青年に早変わり。でも、余裕の無さが伝わる。

「あー、実は華さんと付き合ってんだ。華は君のお姉さんだよな？」

「マジかよ。はぁ。オマエが姉貴の彼氏とかあり得ないから。まさか、着いて来たいとか思っちゃったりした？絶対教えねーよ。ばーか。」

「テメェ、猫かぶってやがったなぁ。こっちこそ雪のこと認めてねぇし。バカっつー方がバカなんだよ！自力で行けるわ。」

「俺の後着けたらストーカ扱いするからよ。せいぜい頑張るんだな！」

信号機が青になった瞬間、ヤツは俺のチャリで走り去った。あの表情、雪に見せたら一気に恋が冷めるぜ。

といいますか、お見舞いくらい、いいだろ？俺ももうちょい大人な発言しねぇとなぁ。結局この日は家に帰った俺だった。

「幹也！雪には手をあげないって約束したでしょ！」

「うるせぇな。もーほっといてくれよ。」

玄関に入るなり母さんの説教。雪は甘えんの上手すぎなんだよ。ふん。俺悪くねぇし。

今日は何人とケンカしたんだったか。まず、華を泣かせ、有野は微妙、雪は殴って、樹は言い合い。一つ言えんのは、イッチャン最低なのは俺だってことだけ。

「だぁあ！もう面倒臭いんだよ。」

そして、うるさいと父さんに叱られた。

ミキヤノアノヒ

普段と同じ通学路に、似つかわしくない黄色い声が飛び交う。

ヤツが来たのだ。

「おはよう。」

そして女子生徒の頬に次々とキスを落とす。誰?紛れもなく彼は…。

「みっきーやり過ぎ。」

そう。吉井幹也だった。いつもの幹也はぶっきらぼうで、クールなイメージだが、毎年この日はネジが取れたように、ホスト化する。

しかも次の日何も覚えてないらしいからタチが悪い。結果、触らぬ神に祟りなし。でも、めっちゃウケるんだぜ!

今度は大人しそうな女の子に話しかけてる。

「君の瞳に吸い込まれていい?」

いや、周りもキャーじゃないから。絶対このキヨ様が言ったら、凍り付くし。幹也帰って来いー。今日舞原チャン休みだからますますヤバい。去年までは水田光がいたから良かったものの、オレには幹也を抑えんのムリだから。

今度は手にキスしてるよ。しかも、先輩にまで！ありゃりゃー、確か空手部の部長の彼女じゃない？みっきー今日の部活ドロドロだぜー。未来と見に行こ。

「キヨー。よっしーどうしたの？」

「何、未来もちゅーされたいのかよ。おいらがしてあげようか？んちゅー。」

「きゃっ。ここじゃダメだよー。いつもの場所行こ？」

よくここまで育って（？）くれた！最高！

幹也がモテる最大の理由はこの日にある。

最近、未来チンと俺の愛の巣は野球部の部室。臭い？汚い？それ以上に燃えるだろ。

「やっだー。彼女はいいの？」

うげ。先客かよ。ってか合い鍵俺しか持ってねぇのに！

「キヨ。あれ英語の佐伯先生と…」

「あちゃぁ。幹也かよ。さすがにやべぇな。」

今日が何の日か光に聞いたコトがある。それは幹也が過剰なまでのシスコンになったきっかけだった。

光は一人っ子で、いつも雪を守るように側に置く幹也と幹也にべったりの雪がうらやましかったらしい。光はある遊びを雪にしかけた。それは、屋根の上での押し合いっこ。だんだんと憎しみが増してとうとう、本気で雪を落としてしまった。

家にいた幹也は、ドスッと鈍い音を聞いて庭を見た。そして、雪は急所は避けていて命に別状はなかった。でも、見えない傷は残った。幹也の心にも傷が。どうして側にいて守れなかったのか。

自暴自棄になる幹也を光は見ていた。一番の原因は僕だと…。そして、光が幹也を止める方法はひたすら幹也に殴られること。

「よっしー酷いよ！華ちゃんがいるのに。」

「幹也にも事情があるんだよ。」

「キヨ？」

「オレには受け止められねぇな。」

光がしたことは悪い。人として間違ってる。だけど、殴られるのは違う気がする。いい加減なオレは言えねぇけど。二人を見て雪ちゃんは何を思うんだろうか。

部活の時間が来た。幹也は空手の黒帯だ。練習中は先輩もいるからとか謙遜して、白帯をしている。野球部のオレは中坊の頃から、幹也の立ち姿に憧れていた。

今は…。

何が起こったか分からない。ただ一瞬にして相手の先輩が倒れていて、しかも何十人が白目向いていた。

「よっえー！そんなんで空手語ってんじゃねぇよ。」

中学の時のあの事件も、幹也だったのか。路地裏で気絶している男たち。そして、意識を戻した男たちはバケモノが出たと震えていた。

幹也の目は、ここを見ていない。黒い目がいつもに増して黒く見える。オレは震えていた。とめないといけないって分かってんのに、足が動かない。

「幹也くん！」

光の声で幹也の手がとまる。

「来んな！」

ところが、光はズカズカと幹也の前に行った。

ドカッ

「これで今までの事チャラね。」

右ストレートが幹也の顔にヒットした。俺たち野次馬はハラハラ見ていた。

シーン。

しばらく誰も動かない。そりゃそうだ。光が殴るなんて誰も考えなかった。

「…悪かった。本当は、自分自身が一番情けなくて光にあたってたんだ。今のパンチでスッキリしたぜ。サンキューな！」

「幹也くん。僕はいいけど、この人たちどうにかしないとね。」

…パチパチパチパチ。何処からともなく拍手が巻き起こる。

「なんか、よく分かんないけどっ…良かったね。」

「って未来ちゃん泣いてんの！？泣く場面あったぁ？」

未来を抱きしめながら、光を見ると案の定先生に怒られてた。まぁ、中学生が勝手に高校に入っちゃいかん。
幹也は…褒められてる！？何でだぁ？

聞くところによると、幹也は今まで先輩に手加減、いや遠慮していたらしく今回は、やられる方が悪いとのこと。日頃の行いが良いヤツは特だよな。

さぁてと、オレは未来とデートでもしますか。

「っはぁ、はぁ。」

ゆ、夢か。スッゲー夢見た。通学路で女をはべらせたり、色んな女とヤリまくって挙句の果てに、国語の佐伯にキスマークつけられ…。空手部の先輩思いっきり倒してめっちゃスッキリしたぁ。あと光に打たれたっけ。

夢ってあり得ない事ばっかだよなー。便所、便所。

「…なんだよコレ。」
便所の鏡にうつる自分は、右頬が腫れていた。そして、学ランで隠れるか隠れないかの首筋ギリギリラインに、キスマーク。
変な汗が流れて来た。いっそ誰か俺をトイレに流してくれ。

夢だと思ったのが現実だった。学校行けねぇ！今まで築きあげてきた俺のイメージが、1日でドンガラガッシャーン。頭がこんがらがってきた。各なる上は。

「お母さまー、俺ちょっと頭が。」

「はいはい。頭がおかしいのはいつものことね。」

「ちぇー。雪が休みたいって言ったら休ませんのに。」
「お兄ちゃんがそんな事言わない！早く準備しなさい。」

今は余裕がねぇんだよ。

「みーきーやくん、遊びましょ。」

呼び鈴ナシはキヨしかいない。俺は玄関のドアを開けた。

「おー。どした？」

「その顔を見ると、やっと現実認めたっポイな。」

キヨが嫌な笑みを浮かべる。でも、こんなダチがいて良かったって思う。

「カバン持ってくっから待ってて。」

「未来を迎えに行く途中だったんだけど、ま、いいや。」

ドタドタ自分の部屋に行くと、机の上にメモを見つけた。

【明日の俺へ
一日一膳
昨日の俺より】

俺は口元が緩んだ。一番好きな言葉。しかも、今と関係ねぇし。なんか笑える。

「みっきー置いてくぞー！」

「今行くー。」

今日の俺は昨日と違う。それは誰にでも言えるコトだけど。

しばらく俺たちは無言だった。桜の家は俺の家より学校に近いはずだし、「ついでに」だなんてキヨにしては下手な嘘。

「公園で桜とは待ち合わせしてんだけど、舞原チャンも来るんだよねー。」

「あのイチャイチャ公園か。華、俺が来んの知ってんの？」

「あー」とキヨが頭をかいた。一目瞭然、俺が来んの秘密でセッティングするってことか。

「キヨ。今度いいサイト教えてやるよ。」

「いきなり何だよー。」

この角を曲がれば公園が見える。ヤバい手が震えて来た。正直者がバカを見るって言うけど、秘密って言わない方が気持ち悪いだろ。

「お、美女二人はっけーん。」

「はよ。桜、華。」

「きゃは！そっちは美男二人だねー。」

「…おはよう。私、幹也君が来るなんて聞いてない。」

桜とキヨはお構いナシに、手を繋ぎながら前を歩く。離れて歩く華と俺。

「華、熱出たって？」
「メールもくれないんだね。」
「昨日は、俺も余裕が無かったんだよ。」
ケンカなんてしたくないのに、ついムキになって止まらない。
「それに、私に何か隠してるでしょ？」
「何かって何だよ。」
「さっきから目を合わせてくれないじゃん。」
ぐいっと詰め襟を引っ張られた。顔近いですよ姉さん。ヤベッ…キスしたい。
俺はそのまま華の可愛い唇めがけて…。
バッチーン
さすがのイチャイチャカップルも振り返る。
「幹也君コレなぁに？」
「いてっ。」
首元を思いっきりつねられた。すっかり忘れていたキスマーク。会話がかなり夫婦っぽいのはおいといて、言うか？真実言っちゃう？

「オレ見ちゃったんだよねー。ねぇ、未来ちゃん？」

「そうそう。アレはスゴかったよね？キヨ。」

マジ黙れ。セッティングしてもらって悪いけど、話かきまわすなぁ。最初から面白がるつもりか。

「どういうこと？」

おいおい。まず俺のほっぺ心配しろよ。

「華ちゃんはヤラシイなぁ。俺の顔より首筋見て、朝から誘ってんの？」

ツイっと華の顎を人差し指であげる。俺だって男だ。ヤる時はヤる。

ポカンとした顔をする華。

「まさかまだ、ホストバージョン幹也抜けてねぇのか？」

「昨日から変わっちゃたんだね。よっしーこれからも友達だからね。」

「幹也くん大好き！」

俺に抱きつく華。めでたしめでたし。

じゃねぇ！しまったぁ。ごまかしちまった。俺こんなキザだったっけ？成長期って怖いぜ。

整理できない恋

「美味しー！幹也君も食べる？」

苺パフェを食べる彼女。オマエを食べるゾーなんて、キヨなら言いそうだな。

「ん。さんきゅ。」

うぉー。甘酸っぱい間接キスの味！今日は待ちに待ったデートの日。誰にも邪魔されず。

「幹也くん？あっれー偶然だな。」

「ひーかーるー。マジ邪魔。ばいばい。」

「わぁー、君背ぇ高いねー。」

「ははっ。幹也君がチビなだけですよ。」

ってさりげなく人の彼女の隣座るなー。さりげなくチビ言うな。これでも整列した時、後ろから三番目だ。

「幹也君の幼なじみなんだー。」

「あなたは幹也くんの彼女ですか？…それでは僕用事を思い出した

んで、また。」

今の間何だよ。勝った的な表情とか、ちょっと寒気がしてきた。光がすぐにいなくなって良かった。

「いいなぁ。幹也君あんな幼なじみいるんだねー。って顔色悪いけど大丈夫？」

コツンとオデコとオデコがくっついた。

「熱は無いみたいだね。」

優しく笑う華さん。ここは、外だ。しかも店の中。抑えろ俺…我慢できねぇ。

唇の距離あと1センチ。

「朝から熱いな。」

「はっ、はる兄！何でここに？」

「はようございまーす。…たく。どいつもコイツも暇だなぁ。」

「吉井君何か言ったかな？ん？不純異性交友を補導してるダケだろ。」

今度は俺の隣に座りやがった。初デートなのに何で邪魔されなきゃなんねぇんだよ。

「ふじゅっ！違うよ。幹也君が熱がないかって計っただけだよ。」
「しかも不純異性交友ってもっとエロい行為っしょ。先生怪しー。」
俺たちを見て、有野が鼻で笑った。
「まだってトコロか。先生は忙しいんだ。じゃあな。」
だから何がしたいんだよ。華の顔が赤くなってるではないか。こっ、これは！
「華ちゃーん想像しちゃった？何なら続きヤリますか。」
「なっ。これは違くて…そのー、あのーまだ早いよ。」
可愛スギッ。このまま襲っちゃいますか。いやいや、今遠回しに断られ…うおっ！俺の太ももに手が！
「幹也君？どうしたの？」
「ちょっそこはっ！」
「我慢が足りないねー。みっきーは。」
「キヨかー！気持ち悪いっ離せっ。」
犯人はキヨだった。ってか何でデートの日とか場所バレてんの？
「みんな初々しい二人をからかー…心配してるんだぜ？」
ケラケラ笑うキヨ。今からかうって言ったよな。

「舞原チャンも気をつけなよー。幹也はこう見えてゼツ（ピー）だから。」
「そうなんだぁ。すごいねぇ。」
「ちょっ二人してドコ見てんだよ！」
「ドコって　ココァンだよ。」
「何でその発音？」

甘い雰囲気かえせ！

「キヨー。遅くなっちゃってごめんね！」

桜が登場。

「全然待ってないよー。みっきーで暇つぶしてたし。というわけで、俺たちは大人なデートをするから。じゃーにー。」
「華ちゃん、よっしー初デート頑張ってね！」

人のデート場所を待ち合わせにすんなよ。やっと二人きりになれた。

「美味しかったー。次ドコ行く？」
「ちょっと雨降りそうだから、洋服とか見に行くか？」
「うん。洋服欲しかったんだよね。」

「俺が選んでやろうか？際どいヤツ。」

「やだぁ。」

そんなこんなで、パフェ屋を出た。

俺から手を繋いでみた。華は指を絡めてきて、絡め方が何かこうゾクッときた。妖艶って言うのか分かんねぇけど、反応した。

「恋人繋ぎだよ。」

いや、いくら俺でも知ってるから。指がこんなに敏感って知らなかった。ちょっと指を舐めて欲しくなってきた。やーばーいな。

「ここ入りたい！」

ビクッ入りたいって、入りたいって…。まぁ、店だけどな。

「いいぜ。って、姫系？」

「今私に似合わないって思ったでしょ？」

「んーん。華なら何でも似合うと思う。」

華は俺の手を引っ張って、店に入った。

妹の荷物持ちしたりするけど、眩しいな。キラキラした目で服を選ぶ華が、無邪気で可愛いい。

あ、このブレスレットいいかも。華が服に目を奪われてる間に、買

った。ちょっと恥ずかったけど。

「幹也君、どお？」

「へぇ。そんな服もあるんだな。連れて帰りたいくらい可愛い。」

「もう。お世辞はいいから！」

シャッと試着室のカーテンを閉められた。アレは照れてたな。今の服は似合ってた。　水色のワンピース。いやらしくない具合に着いたフリルがいい。

「み…きや。」

今日は人に会いすぎると思ってた。でも、この人にだけは会いたくなかった。

「…花音さん。」

シャッとカーテンが開いた。まるで俺の目を覚ます様に。

「幹也君やっぱりこれやめようかな。あれ？知り合い？」

「何でもねぇよ。行こうぜ。」

俺の彼女は華だけ。俺は逃げるように店を出た。

「雨かよ。」

「さっきの人すごく綺麗だったね。」

「そうか？俺は華が一番だよ。」

歯の浮く様なセリフ。花音。俺の元カノ。初めての彼女だった。
その後は覚えてない。初めてのデートだったのに、グダグダだ。

家に着いて、自分の部屋でベッドに転がった。

「幹也くーん。」

俺が返事する前に光が入って来た。今は誰にも会いたくねぇのに。
「その様子じゃ失敗した？」

「…。」

「何かそれどころじゃないみたいだね。」

勉強机のイスに光がまたがった。

「あぁ。花音さんに会っちまったよ。」

「あれー別れたとき、会ったらシカトするってあんなに言ってたのにね。」

「別に話しはしてねぇよ。」

「じゃー何でオチてんの？早く今の彼女にメールで『楽しかった』くらい送らないと。好きなんだろ？」

「うるせぇな。そんぐらい送ったよ。」

「花音さんにベタボレだったのは分かるけど、会ったくらいでそんなじゃ華さんに失礼だろ。」

「分かってるよ。光みたいにすぐ整理できたら楽なのにな。」

光を見ると、顔を歪ませていた。

「僕が整理できてたら、とっくに彼女つくってるよ。」

あんな光初めて見た。今にも泣きそうで、壊れてしまいそうだった。過去に捕らわれない。このまま過去を美化し続けるのはダメだ。まずは、思い出の品を処分しよう。

ちょうどその時呼び鈴が鳴った。しぶしぶ階段を降り。

「はーい。」

ガチャっと玄関を開けた。

「こんばんは！お兄さん。」

「出た。二重人格樹。」

「失礼します。」

玄関入るのに失礼しますってと思った瞬間、拳が飛んできたが、間一髪受け止めた。

「はぁ！？」

ゴッと鈍い音が。スネから痛みが走る。

「チャリ返しに来るだけにしようと思ったけど。姉貴を泣かせやがって。」

右スネを抱える俺を見下してきた樹。

いや、声も出ないくらい痛いんですけど。

「今度は着いて来てもらいますから。」

「ちょっ。引っ張るな！ってタクシーいつの間に呼んだ？」

「うるさいんですけど。一々騒がないで下さい。」

バタン。タクシーに押し込められた俺。これは誘拐っていうんじゃねぇの？

シンとした車内。しゃべっちゃダメですからねー。

「ここです。」

旅館？何この広さ。

「フンッ。お前みたいな庶民を家に入れるのは久しぶりだ。」

「キャラまた変わったー！誰？樹はどれが本当だよ！」

「…。」

「シカトぉ？」

学校並の広さだな。絶対迷子になる。

急にピンクの襖の部屋の前に止まった。

「姉貴ー入るよ。」

何その優しい声。

「やだ。」

ぷっ。拒否されてやんの。

「吉井幹也を人質にとっている。放して欲しくば出てこい。」

そして俺は、右スネを蹴られた。

「いってー！」

しゃッと凄い勢いで襖が開いた。

「えっ！幹也君？樹何で？」

「姉貴が最近落ち込んでんの心配なんだよ。コイツと付き合ってからだし。」

樹にギロっと睨まれた。

「二人とも入って？」
中はピンクの世界だった。例えるならお姫様が住みそうな。
「ジロジロ見んな！」
「樹！幹也君に謝りなさい。」
「いや、もう慣れたし。それにしてもファンシーな部屋だな。」
「両親が揃えちゃったの。ちょっと恥ずかしいから友達とか呼べないんだよね。」
さっきから樹が威嚇した猫に見える。猫目だしな。
「それよりごめんね。樹ったら見境ないから。」
って樹の頭撫でてるし。俺も撫でられてぇ！
「いいって。それより落ち込んでんなら、話し聞くし。」
「あの人元カノ？」
うわぁ。いきなり来たぁ。俺はガシガシ頭をかいた。ちょっと聞かれたく無かった。
「おい、姉貴を無視すんな！」
「樹ごめん二人きりにさせて？」
「…分かった。」
あれは絶対盗み聞きする感じだな。また睨まれた。

「今はまだ話せない。」
まっすぐ華の目を見て言った。華もそれに応えて俺の目を見る。
「そっか。じゃあさ、いつか話してくれるんだよね？」
怒ると思ったのに、華の考え方に驚いた。
「怒んねぇの？」
「うん。だって何か嬉しかった。ごまかさないで宣言してくれて。」
俺の肩にコテンと頭を寄せる華。
そして、やっとキスをした。
ドサッ。華の甘い匂いが香るこの部屋で、俺たちは初めて…。
ドカッと襖がはずれた。犯人は言うまでもなくシスコン樹。
「姉貴に何してんだよ！」
「愛の育み？」
「僕に聞くな！」
何だかんだで、樹は俺が嫌いではないみたいだ。愛情の裏返しとし

て受け止めよう。

辛い思い出は、思い出すのにも勇気がいる。華となら乗り越えられる気がするんだ。

ライバル

俺は吉井幹也１５歳。最近ハマってるコトは、アクション映画を観ること。趣味は、空手と言いたいトコロだけど、人間観察。口癖は「不法侵入」と「近所迷惑」。これは雪と光が原因で、仕方なく言ってる。好きな技は回し蹴り、上段蹴り。蹴りが好きだ。

「へぇ。幹也君って意外と、武士道って感じだねー。」

華は俺に質問しまくってメモをとっている。

「武士道じゃねぇよ。華のスリーサイズ知りてぇし。」

「えっ！スタイル悪いから言えないよー。」

ここは俺んち。付き合って一ヶ月弱でやっと来てくれた。スタイル悪いとか絶対ない。スラッとした白い足。くびれの凄い腰に、素晴らしい胸。ヤベッ、ジロジロ見ちった。

「ちょっと幹也君…ドコ見てるの？」

胸元を隠す華を見て、俺の下心はピークに。

「スタイル悪いって言うから、確かめてただけだろ？最高です！グッジョブ！」

「幹也君やらしー。脱いだらスゴいんだよ。」

は？脱いだらスゴい？

「なっ。どこらへんが？」

「お腹がぷにぷにしてるの。いいなぁ。幹也君は痩せてるから。」
うおっ。華さんそこを触っちゃ！まぁ、腹だけど。
「腹筋割れてるの？見たーい！」
「…いちよう。別に良いけど。」
俺は自分のシャツを捲った。華の反応は、固まっていた。
「華さーん？」
「かっ。」
「蚊？」
「かっこいい！！」
うわぁ。そんなキラキラした子供みたいな瞳で見られたら…手は出せません。
「触っていーい？」
上目使い来ました。俺何で標準語なんだろ。
「タンマ！」
「へ？なになに？」
「やっぱ、今日は勉強しよう。清く正しく美しく！」
「最初からお勉強してなかったけど？」

コテンと首をかしげる彼女。

…ゲンカイ。

俺は華を抱きしめた。落ち着け。落ち着け俺。

「びっ、びっくりしたぁ！」

「華が悪い。俺を誘うから。」

ドキドキが伝わってくる。すげぇ嬉しい。俺が華の心臓の音を速めたんだ。

「きゃっ！幹也君！」

俺は華の胸に耳を当てていた。

「悪い！思わずっ。」ぱっと華から離れた。何やってんだ俺。これじゃあ、ただの変態じゃねぇか。

「…。」

しばらく無言がつづいた。あの胸は…Cくらいだな。って違う！何話そう。

「幹也君ごめんなさい。調子に乗って触りたいとか…引いたよね？」

「全然引いてねぇよ。俺こそ嫌われたかと思ったし。」

そして仲直りのキスをした。

時間は流れ、体育の着替えの時間。

「みっきー。昨日最後までやっちゃった？」

「あいにく俺は純粋だから。相手も大切にしたいし。」

「よく言うよなー。ついこないだまで、俺より遊んでた癖にー。」

「かってに既成事実を作るな！そんなのただの噂だって知ってんだろ。」

「そうそう。幹也はアルイミ男子にモテるから、たぁいへん。空手部の先輩たちみたいな感じで突撃ーみたいな。」

「先輩には、俺からケンカ売ったからしょうがねぇよ。それに今の部活の方が楽しいんだ。本気で闘えるし。」

「しょうがねぇ、ねぇ。まだ真面目な人たちで良かったなー。ネジが外れた幹也もなかなか好評だからナ？」

「げ。授業始まってる。早く行こうぜ！」

キヨいわく、ホストバージョンの俺はかなり女に積極的だったらしい。俺はホストってよく分かんねぇけど。

これは欲求不満からだったら危ねぇ！ってこと。もしも、無意識に華に襲いかかったら…って俺は猛獣かよ。

今日は快晴。男子はサッカーで、女子は外周を走ってる。あれは服装で注意されて走らされてるようだ。

球技は苦手まではいかないけど、あまり好きじゃねぇ。小学生の時、ドッジボールで顔面キャッチしてからセンスの無さに気付いた。

「吉井ー。この試合勝負しねぇ？」
「杉岡久しぶりにしゃべったなぁ。で？何たくらんでんだ。」
「あれ。サッカー苦手なんだっけ。おかしいなぁ。俺の記憶では何度も抜けられてんだけど。」
ハッラ立つわぁ。最後に髪かきあげやがった。
「受けてたつ。ただし、罰ゲームとかナシだかんな！」
「吉井ならそう言うと思ったよ。心配しなくても罰ゲームはしないから。」
サッカー部エースの杉岡は恐ろしいほど爽やかに笑った。
「よっしーと杉岡同じチームだろ？」
「安心して。多く点を入れた方が、欲しいモノを貰う。ってルールだから。」
近くにいたキヨが眉をひそめた。このパターンは、華の好きそうな「オマエの彼女を貰う」的なオチ？
ピピーっとホイッスルが鳴った。
「ゲームスタート。」
聞いたコトの無いくらい低い声で杉岡が呟いた。
足が速い。しかもこのチームサッカー部ばかりだから、自然と杉岡

にボールが集まる。

「おりゃー！」

俺のスライディングが見事に決まった。

「幹也！杉岡にスライディングしてどうすんだよ！」

そうです。やっぱ勝負を受けたからには、負けたくねぇし。見方は見方でも今は敵なワケだから、いいじゃん。

ゴール！

俺って意外とセンスありまくり？チームメートから集まる視線。これは！

「イェーイ！」

しーん。皆さんに睨まれてます。

「ははっ！オレは大丈夫だよ。幹也君には悪気ないからねっ。」

爽やかな杉岡に俺以外コントロールされてる。キヨは一人でボールを蹴って、めちゃめちゃ上手いんだけど。何か今ジャンプして避けてたよな。

「実はオレずっと欲しかったんだ。」

「華はやんねぇからな！」

ゲームは俺が勝ったケド、キヨが一番活躍してた。キヨは小学生の

頃サッカーやってたらしい。中学でキヨに会ってからは、野球少年なイメージだったから知らなかった。

「ははっ！オレが欲しかったのは吉井が筆箱に着けてるカンバッチだよ。」

「なんやとー？危ねっ。思わず関西弁なった。カンバッチって、ストロアップの限定バッチか。」

ストロアップとは、俺の好きなキャラクター。簡単に言えば、苺と林檎が混ざった小悪魔みたいなキャラ。最初は、ヘンテコリンだと思ったけど気が付けば好きになっていた。華を好きになったのと似ているような。

そういえば、ちょっと華に似ているかも。それならますますあげられない。

「杉岡。」

「くれるのか？」

「欲しいモノは自力で手に入れるのが男だろ？」

杉岡が笑った。作り笑いじゃないホンモノの笑顔。

「それじゃあ、舞原は自力で俺が貰うよ。」

「華はモノじゃねぇよ。バッカじゃねぇの？」

「あースッキリした。オレ、コソコソしたくないタチなんだよね。お、授業終わってる。じゃあ先に戻るよ。」

俺は空手以外で生まれて初めて、宣戦布告された。杉岡がかっこ良

く見えたのは絶対に目の錯覚だ。しばらく俺は一人校庭でぼうっとしていた。

「吉井くんだぁ。何してんの？」

「椿が言ってたのってこのコ？へぇ。アイドルの才藤海に似てるね。」

「似てないよー。吉井くんは吉井くんなの。」

キャーキャー2年の先輩が近づいて来た。椿先輩は空手主将の東先輩の彼女。かなりの綺麗系だ。あーつまり、一回アノヒに肉体関係が。

「こんにちはー。俺授業に遅れるんで、すいません。」

深入りしたら、谷底まで真っ逆さまだ。東先輩に毎日試合を挑まれる身にもなってくれよ。あの血走った目は苦手なんだよなぁ。試合すんのは、構わないんだけど。その前に一年はまだ試合できないハズ。

「今日も試合見に行くね！」

「椿先輩、東先輩を応援してくださいよ。マジ、東先輩がキレたら怖いんスよ。」

「竜はいーの。」

「椿行くよ！」

「うん。吉井くんまた目の保養になってね！」

いーのって何がいいんだか分かんねぇな。上手くいってねぇとか？
今は、杉岡に注意しねぇと。

走って教室に戻った。
教室に入ると、杉岡は何も無かったように友達といた。拍子抜けした俺は華のもとへ行った。

「放課後暇？」

「びっくりしたぁ。今日はちょっと用があるんだよね。」

あからさまに目をそらされると傷つく。

「用って俺には言えねぇことなんだ？」

「家の用事だから。」
むなしく予鈴が鳴る。授業中何も耳に入らなかった。

杉岡は動いてる。こんな簡単にギクシャクするもんなのか？

「みっきー。体育の後椿サンと密会してたらしいじゃん？」

キヨが後ろから話しかけてきた。そしてすぐ気まずくなった理由も分かった。

「また変な噂流れてんの？俺しゃべっただけだから。」

授業中に話しかけんな。

「接点ないのにー？」

ポキッとシャーシンが折れた。

「あんま俺に構うな。俺だって考えてんだよ！」

声が響いていた。教室は静まる。

「吉井！この問題を解け！」

今は数学の時間。俺は余裕で解いた。

「授業中は静かにしろ。今度しゃべったら、吉井に授業してもらうからな？」

「…すいませんでした。」

席に着くとキヨは寝ていた。タヌキ寝入り。いつもキヨに当たってしまう。チャカされんのが頭にくるんだ。

まずは、部長の誤解を解くしかない。一発殴られんのは覚悟の上で。

昼休み。2年1組の教室。

「すいません。東先輩呼んでもらっていいっスか？」

「千円。」

「はい？」

「有料なんだよね。」

この明るい茶髪の先輩は、ドアの前にいたから声をかけただけ。「

金」と手を差し出してきた。この先輩…本気？

「こら。立川、後輩をからかうな。」

「…東先輩。」

「いいじゃん。あの東　竜がかわいがってる後輩チャンらしいし。」

「…まぁな。それより吉井どうした？」

「あの、東先輩に話しがあるんスけど。」

「場所を変えるか。」

そして、立川先輩に頭を下げて東先輩についていった。

東先輩は凛とした雰囲気で、男らしい。身長も１８０はある。俺より１０センチは高い。

で、着いた先は体育館でした。

「椿は誰にも渡さないからな。」

この構えは…闘うんスか！？

「ちょっと待ってください。ここは話し合い」

「吉井くん頑張って！」

何で椿先輩がいるんだよ。また話しをごちゃごちゃさせてる。しかも椿先輩の一言で、堅実な東先輩の表情がガラリと変わった。

「話し合いなど無用だ！男なら力で勝負しろ！」
東先輩の上段突き速い！俺は払う。
「俺には他に彼女がいるんです！」
俺は上段蹴りをギリギリ寸止めした。
「ならばなぜキスしていたんだぁ！」
東先輩の上段と中段突き炸裂。ちょっとあたったぁ！
「すいませんでした！一発殴って下さい！」
ドゴォっ
先輩の突きが、俺のミゾオチ入りました。
「悪かった。本当は椿と上手くいかないのを、吉井のせいにしていた。」
「っりゅう！」
椿先輩は東先輩に抱きついて、二人はうまくいきました。
俺倒れてんのに、二人して行っちゃうんだ。ツボ入ったたから、しばらく動けねぇな。
これで、誤解は解けるだろう。体育館の天井を見上げた俺だった。

荒城兄弟

夏休みまであと5日。俺は朝から古着屋の前に立っていた。

「はよっス！」

古着屋に隣接する家から、子犬の様な少年が出て来た。

「ようマサ。朝から元気だな。」

「幹也サンまた兄貴とケンカっすか？オレんちの前で殴り合いはやめて下さいね。」

「またって去年ぶりだし。あー殴り合いかどうかはキヨしだいだな。」

そこへ、鼻歌まじりにキヨが登場。

「あれぇ。ひょっとして、兄ちゃん待ってた？」

「うぜっ！半径1メートル以内に近寄んな兄貴。」

相変わらずのブラコンぶり。人の見ると気持ちワリいな。

「あっれー？みっきーどうした？」

「昨日の事ナンだけどさ。」

「昨日何かあったけ。おいら覚えてねぇな。」

キヨを見直した。こんなに心が広くなったなんて、俺も見習わねぇとな。

「あぁ！アレか。サッカーでオレっちが活躍しすぎて妬いたんだ？」

「はいはい。そうだな。あれマサはいつの間に消えた？」

「マサの奴、最近様子がおかしいんだよ。なんつーの、ヤケに髪型気にしたりー、中2の癖に香水つけだしてさ。」

キヨが真剣な顔をした。

「それは、中2病…いや、コイワズライっつうやつだろ。」

「でさー、オレ言ったんだよ『まさか女に目覚めたか』って。」

「認めたくねぇのは分かるけど、シカトしないでくれるー？」

「だから、オレは『マサなら女でも大歓迎だ』って最後まで言う前に、シャンプーが飛んで来た。」

「お前、風呂に乱入しようとしただろ。」

キヨは今だに無理矢理、弟と風呂に入ろうとしている。銭湯ならまだしも、普通は兄弟で入ってもおかしくないハズだがキヨの場合…拒否られる。マサの気持ちもなんとなく分かる。

「男同士だし当たり前じゃん。オレが小さい頃から風呂場で伝授し

てるから、まだ最終秘技までいってないんだよコレが。あ、その顔！みっきー知りたい？」

…俺、嫌な顔したんだけど。秘技っつーのは何だよ！アッチ系か？コッチ系？それとも…。

「あー、みっきー変な妄想したっしょ。秘技は、古着の手洗いの仕方。アレもコツがいるわけよ。」

ヤベー。キヨは古着の話し出したら止まらない。適当に相づちを打ちながら歩く。

イチャイチャ公園の前に誰か立っていた。

「キヨー。おはよ！」

「愛しのハニー！ラヴュー。」

桜　未来の声と共にキヨは、走って行った。もちろん、桜のもとに。

「お熱いデスねー。じゃ、俺はお先ー。」

「幹也君、おはよ。ちょっといいかな？」

公園から華が出て来た。断る理由もない。

「はよ。時間あるから大丈夫。」

俺たちはベンチに座った。公園にはチラホラ人がいる。

「昨日、椿先輩をかけて東先輩と試合したの？」

「あー。試合はしたけど、俺一度だけ椿先輩とヤっちゃって決着つけようと思ったんだ。」

顔見れねぇ。

「浮気したってコトだよね。」

「キスマークあったろ？その前日、俺おかしくて色んな人とヤったらしい。」

「…。」

「感情は無かったから。」

「…。」

しばしの沈黙が続いた。いっそのことパーンと一発こねぇかな。

「そんなのヒドイよ。浮気相手に対しても失礼だし。私にも中途半端だよ。そりゃ、私は先輩みたいに顔もスタイルも良くないから、足りないんだろうけど。同情ならもうやめてよ。」

「俺だって無意識なんだよ。俺もイロイロ抱えて生きてんの！分かってくれないならもう分かった。」

「だって、私には幹也君隠し事ばっかじゃない！荒城とかには言えるのに私には言えない時点で、信用してないよね？」

「好きなヤツには、かっこ悪いトコロ見せたくねぇんだよ！それが俺のちっぽけなプライドなんだ。」

俺たちは初めて、大喧嘩をした。

『俺が椿先輩を寝取った』っていう噂が無くなれば全ては上手くいくと思ったんだ。甘かった。一度の肉体関係は事実だし。何より大切な彼女を傷つけた。

そう。中坊の頃も、コレが原因で彼女に振られた。告白されても失うのが怖くて、なかなか付き合えなかった。

華は違うって思えたんだ。でも、俺がトラウマを克服しない限り幸せにはなれない。

雪の落下事件のことは、雪が落ちたコトだけがショックだったんじゃない。本当は光がいれば大丈夫って信用していた。裏切られるコトの辛さは、一番分かってるはずなのに、歪んだ俺が一番大切な人を傷つける。

俺は傷つけられる人間だから、傷つけられる前に傷つけないといけない。

ただの臆病者。

「お兄ちゃん！大丈夫？」

雪。…病院？

「救急車で運ばれたのよ。疲労らしいけど、しばらくは点滴しないとダメみたいね。」

母さんまでいる。あぁ。なんだ。俺疲れてたんだ。

「迷惑かけてごめん。」

「彼女が救急車呼んでくれて良かったわ。」

「お兄ちゃん相変わらず面食いだよねー。」

彼女？俺の彼女は舞原華ただ一人。

「失礼します。」

ノックと共に、綺麗な黒髪を揺らして華が入って来た。

「あらー、じゃあ母さんたちは戻るわね。」

母さんと雪が病室から出て、華と二人きりになった。

「救急車呼んでくれたらしいじゃん。…さんきゅ。」

「私びっくりして、心臓止まるかと思ったんだから！」

華は俺に飛び付いた。ケンカが吹っ飛んだ。

「…ん。悪かった。疲労らしいから点滴すれば大丈夫。」

「無理してたんだね。あんなに怒鳴る幹也君初めて見たから。」

「あのさ、そろそろ『幹也』って呼んでくんないかな。」

「みき…や？」

点滴よりも、華の照れた笑顔が俺を元気にしてくれた。

「おう。はーな！」

「何でほっぺた摘まむのー？」

「じゃあこっち？」

俺は、ゆっくり唇をなぞった。ケンカしたばっかで、不謹慎？それとこれとは別の話。

「み…きや」

「しぃーっ。」

かなり久しぶりじゃねぇか？

ガラッとドアが開いた。

「幹也くん！大丈夫？」

俺と華はパッと離れた。

「ひーかーるー。ってか二度目だよな。」

「あっ。光くんどーも。」

「ひょっとして、今キスしてました？まさか病室で！僕には考えられないなぁ。」

コイツわざと声張り上げてる。よく言うよ。中坊の頃、光がプール

の中でキスしてんの見たし。それが光の忘れられない彼女。
「光もあん時は情熱的だったのに、中3にして冷めたのかよ。」
「えーなになに？」
「僕には覚えがない話だなぁ。弱っていじけてると思ったのに、つまんないの。邪魔者は退散しまーす。」
光の顔！かなり怒ってたな。元カノの話はタブーだから。光が帰ってから、華に説明した。
「えー！？プールでキスするなんて少女漫画みたい！ロマンチックだね。」
「じゃあ俺たちは」
やっとキスができた。
「病室もいいだろ？お姫様。」
「もう。何か違ーう。シチュエーションが大事なんだよ。」
「俺には違いが分かんねぇな。眠くなってきた。おやすみー。」
「うん。おやすみ。」
何かいいな。寝る前に華が近くにいてくれんのって、幸せだ。頬にキスされた気がした。明日には、点滴で身体も元気になる。
点滴だけなのに、大騒ぎしたんだろうな。救急車呼んだのはスゴい。多分、華とケンカの途中で倒れたっぽい。そりゃ、相手がいきなり

倒れたらびっくりするわな。

俺はゆっくり、眠りの世界に入った。

「みきやー！」

俺を呼ぶのは誰？眩しいんだ。光が反射して見えない。あー。こりゃ夢だな。ちょっと幻想的すぎる。モヤかかってるし。

聞き覚えがあるような。ソプラノっぽい綺麗な声。

「やっと戻って来たよ！」

まさか…。

そこで目が覚めた。アレは小５の頃引っ越した女の子。

「幹也く。スゴい汗だよ？」

「華…いてくれたんだ。今、『君』つけるトコロだったろ？」

「後ちょっとって聞いたから。まだ呼び捨ては慣れないの。」

「んー何か元気出て来た。付き合う前は、苗字呼び捨ててただろーが。」

俺は華にデコピンした。

「痛いっ。苗字と名前じゃ違うんだよー。」

華と話してたら、点滴が終わった。母さんが車で迎えに来てくれて、

何故か光と雪も乗ってた。華も乗って、ピクニックか！みんなウキウキ気分みたいな。
「お母さん。今日雪が学校で、」
「光ちゃん！言わないでよ！」
「光ー。母さんはお前のお母さんじゃねぇから。」
「妹さん可愛いね。」
耳元で華が話しかけてきた。くすぐったいなぁ。
「あらー、光くんなら大歓迎よ。でも、樹くんもいるし。」
「おいおい、なんでモテてるし私みたいになってんだよ！」
「樹くんは私のなの。光チャンはお兄ちゃんの。」
「それなら大丈夫ね。」
何が大丈夫なんだよ。俺が光のって初耳ナンだけど。
「あはっ。皆さん面白いですねー。」
「意外とノリいいですね華さん。僕が幹也くんの秘密教えましょうか？」
助手席の雪が身を乗り出した。
「えー！私も知りたい！お兄ちゃんの弱み。」

あー、頭痛い。うるさいんだよ。修学旅行か！

「母さんも知りたーい！」

って母さんまで便乗するなよ。

「そこまで言うなら、仕方ないですね。あれは、いつもの様に幹也くんの部屋で幹也くんの帰りを待ってた時の事。」

光の奴、母さんの前では『くん』付けするんだよなぁ。相変わらず不法侵入だなおい。

「僕は、ふと幹也くんの机の引き出しを開けたんです。」

三人ともワクワクして聞いてる。

「そこには…そこには。」

何故か黙る光。

「えー！続きは？」

雪が我慢できず騒ぎだす。まだまだシツケが足りねぇな。

「続きはウェブで。」

最近の光のマイブーム『続きはウェブで』。オチが無いだけだろ。

そして、初めての彼女とのドライブは幕を閉じた。邪魔者だらけだったけどな。

バクロノオトマリカイ

私、舞原華は桜未来ちゃんの家でお泊まり会をしてます。

「華ちゃんって、ただのオタクかと思ったけど、意外と話しが合うよね。」

部屋着の未来ちゃんは、男子が見たら鼻血モノだと思う。足長いなぁ。ショートパンツからのぞく小麦色の足。グラビア雑誌から飛び出てきたような…女の子なら憧れるスタイル。大人っぽい顔。

「私も、未来ちゃんは世界が違うかと思ってたー。」

「よっしーと華ちゃんが付き合ったから、話すようになったもんね。」

「うん。未来ちゃんたちはどんな感じでくっついたの？」

未来ちゃんがハートのヒョウ柄クッションを抱きしめた。まるでポスターの一枚みたいに絵になる。

「あんまり人には話さないんだけど、華ちゃんならいっかなぁ。」

タイミングが良いのか悪いのか、未来ちゃんの携帯が鳴った。

「出ていいよー。」

「ごめんね。」

（ピッ）

「はぁい。…もう、今日は女の子だけのお泊まり会だからダメだよ。…うん。浮気してないから。…えー？ちょっと待ってね。華ちゃんキヨからなんだけど、ちょっと代わりたいって。」

ナゼに私？しぶしぶ携帯を受け取った。

「なに？」

（お、本当に舞原チャンだ。）

「荒城ーもっと信用したら？未来ちゃんスッゴい、いい娘じゃん。」

（…何が分かるんだよ。）ブチッ

ツーツーと電子音が鳴り響く。

「何か切られちゃった。」

「そっか。まぁ、キヨは意外と怒りっぽいからね。」

「そうなんだー。荒城ってひょうひょうとしてるから、怒んないと思った。」

「キヨはねー、一時期グレてたんだから。」

確か、未来ちゃんと荒城は違う中学だったハズ。

「あれ未来ちゃんって女子中だったよね。」

「そだよ。私も同じ時期にちょうどグレてたの。中2の秋くらいかなー、私金髪にしてたなぁ。」

「中学生で金髪って周りがうるさくなかった？」

「全部に反抗したくて、わざと怒られるコトばっかしてた。でも、女って単純だよね。好きな人ができたんだ。」

未来ちゃんは、懐かしそうに、目を細めた。好きな人って荒城の事かな？

「私が一目ぼれしたのは、よっしーだったの。で、隣に私と同じ髪の色した男が歩いてて、話しかけやすそうだったから、その男が一人の時を見計らって話しかけた。」

「未来ちゃん…みきやが好きだったんだ。」

「あはっ。昔の話だよ。隣に歩いてた金髪の男ってのが、私のダーリンのキヨ。で、よっしーの事を教えてもらううちに、お互いの髪の色もおさまり、気がつけば付き合ってた。」

「なんか、気がつくと。っていいね！じゃあ、みきやは知らないんだ？未来ちゃんが好きだったこと。」

「さぁ。当時よっしーは恋愛に興味ないって言ってたから分かんない。」

じゃあ綺麗な元カノといつ付き合ってたんだろ。未来ちゃん知ってるかなぁ。でも、やっぱり本人に聞きたいかも。

「よっしーの元カノの事知りたい？」

「えっ。」

「そんなに驚かなくても、顔に出てたよん。」
「本人に聞きたいから、今はいいよ。」
「我慢はよくないよ。たまには、ズルしてもいいんじゃない？」
ズル…かぁ。
「でも、みきやが約束してくれたの。自分で話せるようになったら話すって。」
「なるほど。爽やかカップルだねー。まぁいつでも相談とかのるし。明日から夏休みだよ！水着買った？」
「ありがとう。って水着買ってないよ？なんで？」
「夏休みと言えば、海！水着！そして、ビキニで彼の心を仕留めよう！」
「それって、この雑誌に書いてるのを読んだだけだよね。」
未来ちゃんは、引き出しからヒモ？がついているモノを取り出した。
「じゃん！可愛いでしょ。」
「その水着絶対布が足りないよ。しかも白？」
「これ去年のだから、一緒に買いに行こうね！」
そして、色んなシチュエーションの場合の対応の仕方？をお布団に

潜りながら教わり、あっと言う間に一夜が明けた。
それにしても、紐で縛る場合ってのが謎だった。しかも、彼氏を縛るとか？まさかね。こんな美人さんがそんなコトしないよね。
謎を残したまま、未来ちゃんちを出た。

キヨが、電話で俺たちが泊まるのは無しって振られた。中2以来に機嫌が悪いキヨ。

「ウチに泊まるか？」
「男の家に泊まるかア・ホ。」
「雪がキヨに会いたいっつってたなぁ。」
「ふーん。じゃ行くか。」
もれなく、光もつくけどな。
「ただいま。」
「おっじゃましまーす！」
「俺より先に行くな。キヨのヤツ何だかんだで、嬉しかったんだな。」

俺の部屋にはヤツがいた。

「おかえりー。あれ？キヨ先輩！」

「よっ！一番弟子。」

「このサイトがですね。」

「まだまだ甘いよキミ。俺っちが大人の世界に…。」

「人のパソコンで何してんだよ。」

と言いつつ、興味津々な俺。「おー」とか「もうちょい」とか俺の部屋に響く。

「お兄ちゃーん。また私のシャンプー使ったでしょ！あ、キヨ先輩こんにちはー。」

雪登場。

「あ、雪これ以上近づくな！」

「光早く消せ！」

「はい。師匠。」

ピッと冷静に画面を消す光。

「またエロサイト見てたのー？あ、今日お父さんとお母さん、おばあちゃんちに用があるから泊まるって。」

「マジ？今日キヨが泊まるから。お前、樹を泊めんなよ。」
「雪ちゃんいっぱい遊んでねー。」
「僕も泊まります。」
「三人一緒に喋んないでよ。好きにしたら？私はイイコにお勉強してますから。あんまり騒がないでよー。」
雪が自分の部屋に戻った。晩飯どうしよ。適当でいいかー。
「雪ちゃんおっきくなったねー。アレは未来を越すかも。」
「おい。人の妹を変な目で見んな！」
「それより格ゲーしません？」
「人の部屋のモン勝手にあさるな！」
「おーいいじゃん。やろうぜ！」
誰がコイツらへのツッコミ協力して。一人で二人はキツいわ。
「みっきーなに寝てんの？夜はこれからだぜ！」
数時間後。
「おりゃっ。十の字固め！」
「うっ。ギブギブっギブですー。」

「そして、くすぐり地獄ー。」
格ゲーから、実技になっていた。そして雪はいつの間にか俺の部屋で、出前のピザをモグモグ食ってる。
「私もまざりたい！」
いきなり雪の爆弾発言。
「お前は、受験勉強しろ。」
「光ちゃんも受験生じゃん！」
「僕は、間に合ってるから。」
間に合うって何が？プロレスごっこは体が密着するし。イヤだ。
「雪ちゃんは、彼氏と楽しもうね？」
キヨが雪の頭を優しく撫でた。
「うん。」
クソー。雪のヤツ、キヨには素直なんだよな。雪は「おやすみ」と俺の部屋を出た。すぐ隣の部屋なんだけどな。
「うちのマサも雪ちゃんみたいに素直なら可愛いのに。」
「隣の芝生だぜ。俺もマサみたいな弟欲しかったし。」

「え！僕みたいな弟は欲しくないの？」
俺とキヨは顔を見合わせてから、
「いらない。」
とハモった。
「僕も嫌われちゃったなぁ。別に気にしないけど。」
「出た。光ってたまーに、どす黒いよな。」
さすがキヨは鋭い。
「はい。僕よく性格良いって言われますね。」
切り返し上手い。ってかこれってすごい話術だよな。話がずれていくように仕掛けてる。
「僕眠くなった。」
一秒で光は寝た。光はいつも寝るのがめっちゃ早い。
「そういや、天使とか言われてたなコイツ。」
「キヨは金猿。」
「失礼だよなぁ。この好青年にサルってなんだよ。幹也は、ストロアップルだっけ。」
「キヨ、猿っぽいじゃん。俺のは、あだ名じゃねぇし。」
「やたらと甘そうなキャラクターな。今頃、未来と舞原チャン何し

てんだろーね。」

「悪口言われてるかもなー。」

「未来が舞原チャンに変なコト教えてなけりゃいいけどー。」

「何だよ変なコトって？」

「縛るとかー？」

「俺に聞くな。束縛は俺別に構わねぇし。ヤキモチとか嬉しいから。」

「良い子は寝ましょーねー。」

今の絶対バカにされた。でももう夜中の3時。さすがに眠い。俺は部屋の電気を消して、雑魚寝した。

明日から、夏休み！華とラブラブなるぞ。やっぱ海とか行きてぇなー。

しばらく明日からの夏休みを、想像して眠れなかった。

雪の日常

私には、誰にも言えない秘密があるの。それは、お兄ちゃんのシスコンより、私が重度のブラコンなこと。世間的にもキモいから、私だけのヒミツ。

お兄ちゃんは今まで会った男の子の中で、一番男らしいし、強いし、カッコ悪くはない。恋人同士に見られたら、ちょっとだけ、ちょっとだけ嬉しかったりする。

世界一のお兄ちゃんなんだ。そんなコト言ったら泣いて喜ぶんだろうけど、ずっと先の結婚式あたりにとっとこうかな。

私が屋根から落ちた時のこと、よく覚えてないんだ。お兄ちゃんが暴れたのはびっくりした。光ちゃんも殴られっぱなしで、怖かったのが私が止めても意味が無かったコト。

アノヒから頭痛もちになって、でも心配かけたくないから黙ってた。光ちゃんとお兄ちゃんはずっと親友だと思ったのに、私のせいで、私が瓦から滑ったせいで、今もまだ二人には見えない壁がある。光ちゃんはわざとだったって私に言ったけど、私は足が滑っただけだった。私が説得しようとしても、お兄ちゃんは辛そうに唇を噛みしめるんだ。

華さんと付き合いだして、少しずつ本来のお兄ちゃんらしくなった。だけど、時々お兄ちゃんが元カノの写真見てぼうっとしてるの知ってる。光ちゃんが言うには、お洋服屋で元カノと会ったとか。

私は今から、お兄ちゃんの部屋に侵入します。お兄ちゃんは今お風

呂に入ってるから、チャンスなの。
私はお兄ちゃんの部屋にこっそり入って、勉強机の二段目の引き出しを開けた。
「あれー？確かここに…。」
「なーにしてんの？」
気配もなく光ちゃんが後ろにいた。
「はー。光ちゃんで良かったぁ。今からお兄ちゃんの元カノの写真を」
「ダメだよ！少しずつ処分してるみたいだし…ね？」
光ちゃんの指差す方を見たら、ゴミ箱に写真のらしきモノが丸まって入ってた。ほっとしたいのに、ちょっと心が痛む。
「雪なんで泣きそうなんだよ。」
「目にゴミが入ったの！光ちゃんはお兄ちゃんの事なーんでも知ってるよね。」
「ゴミならとってあげるよ。じっとして？」光ちゃんまた茶化した。ゴミなんてないけど、じっとするしかないよね。
「雪は相変わらず目ぇデカイなぁ。ゴミなんてないけど？」
私たちはただの幼なじみだから、至近距離でも恋は芽生えない。

「気のせいかも。それより光ちゃん、いつもお兄ちゃんのパソコンで何か打ってるよね。」

「さすがにバレた？コレは僕のメッセージ。今はまだ内緒ね。」

光ちゃんがお兄ちゃんのパソコンを、カチッとクリックすると、長々と文が書いてあった。その前の暗証番号めっちゃ長かったんですけど。

「へぇ。タイピング速いよねぇ。」

なんとなく内容は読まなかった。お兄ちゃんへのメッセージだし。

「じゃ、私隣にいるからねー。」

「んー。」

光ちゃんは集中力が凄い。集中してると返事が「んー」とか「へぇ」とか、ともかく腑抜けになるんだよ。

私は背伸びをしながら出口へ振り返った。その先にはお兄ちゃんが仁王立ちしていて、冷や汗が流れた。

「あれ？ここは雪の部屋だっけ。光もいつもいつもいつも、なんでいんだよ。」

不自然な笑いがお兄ちゃんの怖さを表現している。

「不法侵入って分かる？」

「なによ！お兄ちゃんが鍵かけないから悪いんでしょ？」

「なんだと？めんどくせぇだろ。うら！」

お兄ちゃんに両頬を摘ままれて、言葉にならない。

「カラスの行水だね。ちゃんと洗った？」

「光、またエロサイト見てたのかよ。へぇ、よくやった！」

今度は私のほっぺたを放して、光ちゃんの方に行った。光ちゃんはエロサイト見に来てただけじゃないんだね。パソコンにメッセージ残すって遺言みた…って失礼なこと考えちゃった。

「この娘どうっスかお兄さん！」

「ふむ。その娘もいいが、コッチの娘がいいかな。」

「さすがお目が高い！」

怪しい会話してる。ついていけない。リビングで、おやつでも食べよう。

「雪、飲みモノ持って来て。」

「分かった。」

よし。エロい二人には、ポン酢を薄めたやつ持って来よう。

5分後、幹也と光が飲みモノを吹き出したのは言うまでもなかった。

「目は覚めた？」

「水！」

二人はリビングへと駆け込んだ。

普通匂いで気づくのに、視覚ばっかが働いて嗅覚が鈍ったんだろうね。イタズラって楽しい！

しかし、十分後冷蔵庫を開けた私は叫んでいた。

「私のかぼちゃプリンがないー！！」

ウチでかぼちゃプリン食べるのは私しかいないはず。あと、３個あったのに！冷蔵庫からポン酢出してなおした時まであった。

私は、お兄ちゃんの部屋に、勢い良くドアをあけて駆け込んだ。

「私のプリン！」

光ちゃんとお兄ちゃんは、私のプリンを食べながらアクション映画を見ていた。

「さっきポン酢ジュース飲んだら、甘いモン欲しくなったんだよ。なぁ。光ー。」

「意外と美味しいね。スナック菓子も欲しくなってきたなぁ。雪？」

コレは二人とも根に持ってるなぁ。光ちゃんの場合、『僕があんな稚拙な罠にはまるなんて』って顔に出てる。プライド高いからね。お兄ちゃんは、してやったみたいな。

「…かしこまりました。お飲みモノは？」

アクション映画の音が部屋に響く。

「よしよし。そう怒るなよ。雪がその口調の時はいい思い出がねぇからな。」

「今日は、僕がお勉強を教えてあげるよ。」

「光…。俺ちょっとコンビニ行ってくるわ。」

お兄ちゃんは逃げた。私と雪ちゃんのバトルは変わってる。なぜか、お勉強しながらキレあう。

私の部屋にて。

「だから、この公式使えば分かんだろ？プリンバカ。」

「光ちゃん全然説明して、くれてないじゃん！指差して『これ』とか『それ』とか分かんないし。ムッツリスケベ！」

「あぁ？プリンで脳みそまでふやけてんのか！この、ペチャパイ！」

「もうペチャパイじゃないもん！少しずつ成長してんの。光ちゃんだっていつまでも、声高いままじゃん！」

「ふーん。ま、興味ないけど。僕はこの美声だから、この顔に合うんだよ。天使と言われるのは、この美声あってのことなんだよ。」

「このナルシスト！」

「上等だね。ペチャリスト。」

「おっぱいフェチ！」

そしてお兄ちゃんが、帰ってくる。

「お前ら、幼稚園の頃から変わってねぇな。悪口かなり低レベル。つか、何で勉強から入るかな。」

フンッと私たちは顔を背ける。本音を言うのはスッキリする。光ちゃんは私以外とは、滅多に口喧嘩しないからアルイミ特別な幼なじみ。ただの喧嘩友達ナンだけどね。

「コンビニで『雪にコレ渡して欲しい』って、長身のいかにもスポーツマンな男に渡された。」

お兄ちゃんから渡されたのは、花柄の小さな袋。

「行くなよ。」

「光ちゃん。うん。行かないよ。」

「あのー。俺話についていけないんですけど。」

「ただの先輩だよ。」

その袋の中には、手作りの指輪が入っている。開けなくても分かる。光ちゃんには相談してた。この指輪は『さよなら』ってことなの。

私がお兄ちゃんの事で悩んでいた時、行くだけで癒されるアクセサ

リーショップがあった。そこでアルバイトの男の人とよく話すようになって、私はお金が無くて買えないのに色んな事を教えてくれた。

光ちゃんに相談したら、『男なんて下心の塊だ。』って、心配してくれた。つまり、『あんまり会いに行ったら誤解されるよ。』って言いたいみたい。

でも、会いたいのかアクセサリーを見たいのか分かんなくて、その時友達だった樹くんとお店に行ったの。明らかに年上の男の人と、毎日会える樹くん。比べたかった訳じゃないけど、夢と現実は違うって実感した。

結局、恋にまでは発展しなかったけど。さよならの代わりに、アクセサリーをくれるって言ってくれた。指輪なんてまだ欲しくないけど、私が食い入る様に見ていたシルバーのハートがついたリング。『まだまだ、下手だけど俺が初めて作ったのもらって？』涙が出た。なんか、プロポーズされたみたいって錯覚したの。彼は十歳以上も年上で、私はまだ中学生。夢物語を見るほど、純粋じゃない。

私は貰えなかった。貰わなかった。不思議な関係も嫌だったから、本人に伝えたらそんなに想ってくれてたなんて思ってもみなかった。

そしてお兄ちゃんがコンビニで彼と会った。

私には彼氏もいる。他の男から指輪貰うなんて、いくら優しい樹くんでも怒るに決まってる。怒るとかの前に、私やっぱり返すべきじゃないかな。

行くなって言ってくれた光ちゃん。私の性格分かってるからだよね。

次の日。今日は樹くんとデート。いつもなら、お洋服を選ぶのも楽しいのに今日は何かシックにまとめていた。普段、ヒラヒラな服ばっか来てるのに、今日は細身のズボン。

私たちのデートは、図書館でお勉強。真面目？さすがに受験生だからね。

「樹くーん！お待たせ。」

「おはよ。今日は大人っぽいね。」

「ちょっとー。いつもは子供っぽい？」

「いつもなら女の子っぽい。今日無理してない？」

樹くん、会って3分で鋭い。

「どうしてそんなこと言うの？」

「座って話そうか。」

近くのファミレスに入った。樹くんいつもと様子が違う。

「ひょっとしてあの店のオッサンに会った？」

通訳すると、アクセサリーショップのアルバイトの人ね。オッサンはヒドい。

「いやー。私は会ってないよ。」
「じゃあ、雪のお兄さんが会ったんだね。雪から会いに行くなら、僕別れるよ。」
「樹くん怒ってる？」
「悪い？僕だってヤキモチくらい妬くよ。」
樹くんが可愛い。
「ホントは、間接的に指輪渡されたの。だから、自分で返すつもりで。」
「その指輪、僕が返すよ。あと、雪に近づくなって言ってくる。」
「樹くん！ありがとう。嬉しいよ。すっごい嬉しいけど、私の問題だから。」
「…ついていく。」
「うん。」
波乱の予感です。雪の恋はどうなるのか。

オトコノプライド

今日はキヨたちと四人で、遊んでいる。今人気の水着ショップに行くために、駅に向かっているところだ。

「イチ、ニッ、イチ、ニッ」

野太い声の…白い集団が目の端に映った。あれは幻だ。

「みっきー…空手部って今日から合宿じゃなかった？」

「よっしーサボり？空手部上下関係厳しいからヤバいよね。」

「みきや、今からでも間に合うよ！」

やっぱり現実だよなー。空手部の集団が近づいて来る。その時、俺は3人に押された。

「オレたち楽しむから。」

「華ちゃんには代わりに、私が選んであげる。」

「時間があったら様子見に行くね。」

そして、俺は裏切られた。サボるつもりはなかったんだよ。ただ、忘れてただけだ。

「吉井！私服で何してんだ。着いてこい！！」

「部長…どこまでもついていきます。」

「その言葉忘れるなよ。」

道場に戻り、俺は腕立て、腹筋、背筋、側筋を百回ずつ、3セットした。汗が滝みたいに流れる。

「あのー、家帰って必要なモノを持ってきます。」

「さっき、妹さんが持って来てたぞ。」

雪のヤツー。華がマネの先輩と、試合を見ていた。

「吉井くんお疲れー。タオルと、麦茶どうぞ。」

「どもっス。」

「みきや、腕立て速いねー。そんなに汗かいて大丈夫?」

「来てくれたんだ。カッコ悪いとこ見られたなー。こんくらい全然平気だし。」

そこへ、鬼部長が現れた。

「最近、気が緩んでるぞ。恋愛禁止とは言わないが、他人に迷惑はかけるな。」

「はい。すいません。」

彼女の前で怒られるとか、悔しい。

「今から打ち込みするから、受けろ。」

「はい。」

いわゆる人間サンドバックっつーやつ。普通は先輩が後輩の打ち込みを、受けながらアドバイスする。
俺は少し前から、先輩たちのを受けている。
コレが結構楽しい。払ったり、避けたりたまに正面から受けたり。
雄叫びが道場に響く。その声と共に俺も乗りに乗る。

「集合！」

急な部長の掛け声に、五十人弱の部員は集まる。

「白坂先生に、令！」
《おねがいします！》
この人はいつも、タイミングが悪い。

「吉井！ちょっと来い。」

げ。俺は見逃さなかったけど、今部長が笑った。ってか情報速っ！
いつ俺が遅刻したって報告したんだ。

「はい。」

空手部の顧問は、二人いる。中年の小山と、３０代前半の白坂。どっちも男。

「合宿のこと忘れてたらしいな。かなりたるんどる！」
あぁ。声がめちゃくちゃ響いてますね。迫力満天。
「すいませんでした。」
「お前、ちょっと期待されてるからって、調子に乗るなよ。部長みたいにコツコツと努力をするヤツが最後に笑うんだ。」
「はい。」
出た。白坂のヒイキ。つまり、白坂派と小山派がある。小山は、割と技を見てくれる。
グダグダと説教は続く。酷い時は、途中から３０分武勇伝を語る。相づちを打ちながら、他のコトを考える。華の水着姿とか。
「顔がにやけてるのは気のせいか？」
「白坂先生は、素晴らしいです。思わず顔が綻びました。」
「まぁ、良いだろう。戻れ。」
今日は２０分ってトコだな。ん？華がマネの仕事手伝ってる。おい！華にベタベタ触んなボケ！とは言えない。今汗臭いから、近づきたくないし。
「それと、合宿中は携帯禁止だからな。」

「え！？マジっすか。」

「3泊4日くらい、どうってことないだろ。」

オッサンには分かんねぇだろうよ。華と連絡取れねぇじゃんか。雪にもしものことがあったら…。光に部屋を荒らされてたら…。合宿に集合できねぇよ！

「みきや顔色悪いよ？」

俺は素早くニオイが届かないくらい離れた。

「気のせい気のせい。俺かなり汗臭いからあんまり近くには」

「んー。大丈夫だよ？私も武道やってたから慣れてるんだぁ。」

「近づくの速いな。華は何やってたんだ？」

「ヒミツ。」

「うわー感じ悪いなぁ。ま、当ててやるよ。」

「うん。もう休憩終わったみたいだね。私そろそろ帰るよ。明日も来ていい？」

「明日も来てくれんの？マジ嬉しい。気をつけて帰れよ。あと、合宿中、携帯禁止なんだよ。」

「携帯禁止なら、公衆電話からかけてね！じゃ頑張って！」

あー。俺の可愛い彼女が帰っちまう。ちきしょー。こうして合宿が始まった。

合宿の夜は、体育館に布団敷いて寝る。道場には寝ないらしい。ウチの高校は、いちよう名の通った名門高校で制服着てるダケで逆ナンパされるとか。

俺が言いたかったのは、女子空手部は宿泊施設が整ってんのに、なんで男子空手部は蒸し熱い体育館かってコト。

しかも先輩たちの武勇伝が、熱い。

「そん時、女の子を守ったのがこのキズよ。」

俺たち後輩は『おおー』とか『スゲー』とか口々に言う。自慢してんのが、3年の岩田先輩。

そして、部長は一人読者してる。

すでに寝てる先輩もいて、うらやましい限りだ。

「幹也はないのか？」

「俺っスか？先輩みたいにカックイイの無いです。」

ここで、先輩より目立っちゃヤバいだろ。しばらくして、次々と布団に入った。

俺の武勇伝は、小学校低学年のとき。俺はピータパンなんて言われてて、自分でも自覚あるほど目立ってた。このツリ目とか、雰囲気が似てるとか言われて。

ある日、ジャングルジムで遊んでいると、やっかむ男子に『ピータ

パンならそっから空飛べるだろ』って言われた。ここだけの話ピータパンってあだ名、気に入ってたし。

「空くらい飛べるよ。」

あろうことか、ジャングルジムの一番上からジャンプした。飛べるワケもなく、右足の骨を折った。　で縫った後が薄く残ってる。

バカだよな。男のプライドってちっさい頃からある。思い出したら古傷が傷んだ。

雪も飛べると思ったのかも。なんて考えながら目を閉じた。

次の日は、朝食前に鉄下駄で校庭十周。マネの先輩と、椿先輩がベンチで話していた。東部長が嬉しそうだ。

「あと1周！」

今十周終わったはずなのに。彼女の前だと気合い入りまくりってのは、よく分かる。でも、人を巻き込むなって言ったのは部長だよな。まだ1周追加だからましだ。

「みきや！頑張って！」

「はなー！頑張るー！」

華が来てくれた。思わずブンブン手を振ってしまった。周りの白い

目。俺は全力で走った。すると、東部長も本気で走り、他の部員も負けじと競争になっていた。

「うわっ。」

後ろから声がしたと思うと、まさにドミノ倒し状態で倒れてきた。

「重いーっ！」

「お前はしばらく潰されとけ！」

「マジ退いてください！」

「こんにゃろー。彼女とイチャつきやがって！」

「今関係ないじゃないっスかぁ。」

俺はしばしスシの如く押し潰され、華は笑っていた。いや、笑いごとじゃねぇから、窒息する。

「おい。そのくらいにしてやれ。」

「部長！部長もラブラブじゃないっすか。」

涼しい顔で俺を見下す東　竜部長。今鼻で笑われた。

「ゴホッ。ゲホッ。」

クッソー。絶対仕返ししてやる。とやっと自由になった俺は決心していた。

俺の仕返しその1、必要以上にイチャつくのを見せつける。それじゃ、興奮させるダケだからボツ。

その2、正々堂々と空手の組手で倒しまくる。いつかみたく不穏な雰囲気になる。ボツ。
その3、先生の話を聞いて正座した後に、足をつつく。なんかきったねぇな。

まぁ場所をわきまえるか。合宿中じゃなくてもいいかー。

「吉井！隙有り！」

「だぁっ！急所はさけてくださいよ！」

俺…いつからいじられキャラになったんだよ。ワリとクールなキャラな方に入ってたはず。地味にショックなんだけど。

「幹也ちょっと相手して。」

「お。勇人から誘うなんて珍しいな。」

勇人はタメで、部の中では一番気が合う。

「最近のお前、隙だらけで勝てる気がする。」

「ソレ、マジで言ってんの？」

「マジ。」

勇人にまで、なめられてるなんて、ありえない。

「いいぜ。その言葉ひっくり返すからな。」

そして、俺たちは構えた。

「一本！」

今の蹴りいつの間に出来るようになったんだ？自信があるだけある。

「えい！」

負けたくない。

「幹也意外と鈍ってないな。」

「うるせぇ。試合中にしゃべんな！口切るぜ！」

他の部員たちが練習をやめて集まる。俺、見られる方が燃えるんだよな。先に一本取られたのは痛い。

「一本！」

「スゲーな。簡単に一本なんて取れねぇよ普通！」

「さすが吉井！」

おいおい。勇人を見ろよ。楽しんでるぜ。おとなしいだけだと思ってたのに。

「お前たち！何してんだ！」

小山先生が登場。ほっとする俺がいる。勇人に負ける。直感で分か

る。俺、いつの間に追い越されたんだろ。

毎日走ろう。筋トレも増やして、組手のリズムも相手がタイミングが掴めにくいリズムを作ろう。中学で、決勝で負けた以来に悔しい。

「み…きや。」

俺は自分の拳を握りしめていた。大好きな華の声も耳に入らなかった。

俺は負けず嫌いなんだ。もう。誰にも負けないって決めたんだ。

ちょっとくらい強くなったからって、俺にはかなわない。

そうだよな。カノン…。

彼との距離と先生の告白

みきやは、トイレに行くと言ったきり帰って来ない。小山先生にマネの先輩が見て来いと言われてたけど、忙しそうだから私が見てくるコトになった。

道場を出てすぐの階段に、みきやは座っていた。膝を抱えて、頭も丸めていて表情が見えない。

「みきや。練習戻らなきゃ。」

私は隣に座った。

「…あのさ。しばらく空手に集中したいんだ。だから、練習見にきてもらって悪いんだけど…ごめん。」

「私がいたら気が散るってコトだよね。分かった。」

そんなの変だよ！なんで応援しちゃいけないの？私邪魔？って言いたい。目も合わせてくれないのは、何言っても【みきやの心】は固まってるって意味。

「ふう。帰ろう。」

帰って久しぶりに、エロカワな少女漫画読もう。自分に重ねて妄想して、現実逃避。これじゃ、前と変わらない。

「ただいま。」

「姉貴おかえり！今日新発売のお菓子買ってきたんだ！」

相変わらず尻尾をふる犬…顔は猫の様な弟の樹。その後ろから、てくてく歩いてきたのが弦。

「今はいいや。」

二人の弟をよしよしする余裕もない。

「ストップ！部屋に閉じこもったら、この漫画全部焼いて捨てるからね。」

「ちょっと『勝手にお姉ちゃんの部屋入らない』って約束したでしょ？」

「ぼく姉ちゃんが暗いの嫌だ。」

「…弦ちゃん。あぁ！可愛い。」

小学生の弦ちゃんを抱きしめた。私はブラコンではない…と思う。

結局、弟たちに負けて、3人でお茶会をすることになりました。

「姉貴、またあの男と何かあった？まさか…手ぇ出されたりしてないよな！」

「そんなに身を乗り出さないで。べっつに、普通だよ。」

「姉ちゃん嘘ついてるね。目が泳いでるもん。」

「げーんちゃん。何を言ってるのかな？」

「そん時は僕が殴り込みにいくから。」

何だかんだで、弟たちは励ましてくれてるみたい。表現が不器用だけどね。夏休みだし、学校がないから離れてても意外と平気かも。

「お姉ちゃんがクッキー焼いてあげる。」

「僕チョコチップクッキー！」

「ぼく、バニラ！」

「あはっ！いつも同じじゃん。」

出来たクッキーは、ちょっと焦げてていつもよりほろ苦い味がした。

「姉ちゃん？」

「やだ！苦いから。」

「泣きたきゃなけばいいんじゃない？」

恋は人を弱くするのかな。なんか涙腺が緩みっぱなしな気がする。恋愛ドラマとかで、ウジウジしすぎとか思ったけどこんなもんなんだね。

「姉貴にあの男は合わないよ。僕も彼女とは保留中なんだ。」

最後のクッキーを頬張りながら樹がつぶやいた。私は何も言えなかった。

今は、みきやを肯定も否定もできないから。
「姉ちゃんココアおかわり！」
「チビ、自分でつげるだろ！」
「チビじゃないし。兄ちゃんとあんまり変わらないよ。」
「はいはい。二人ともケンカはやめよう。弦ちゃんついだげるよ。」
このまま大きくなって欲しくないかも。二人を見てちょっとだけ、心が軽くなった気がする。
自分の部屋に戻ると、眠気が襲ってきた。お布団を敷いて眠りについた。

「吉井くんと同じクラスだー。」
「荒城くんも一緒だよ。ラッキー！」
クラス表を見ていると、女の子が私の隣でキャーキャー騒いでいた。
みきやの第一印象は…。
「ちょっ、どいて後ろ詰まってるから。」
思いやりのある人。周りをよく見てるなぁって感じた。空気読むのって意外と難しい。

それから、みきやを目で追ってた。私はキモオタクって言われてるって気づいてたし、みきやは悪口をあまり言わない人だから、アルイミ特別に思ってくれてるかもなんて、期待したりしてた。

ある放課後、現国の有野先生に、エロ漫画読んでるのがバレて初めてキスされた。好きな人以外だから、気持ち悪くて、しばらく無視し続けた。先生を無視って今思うと、スゴいよね。

で、先生が『お詫びに吉井と両想いになる方法教えてやるよ』なんて、全部見透かされてるみたいなコトを言われた。

「両想いになるには、自分の長所をいかす作戦を3つ実行しろ。」
「何かスパイ映画みたいだね。」
「例えば、綺麗な黒髪をかきあげたり、唇を際だたせる口紅を塗るとか、見た目からだな。」

「先生がメイクしていいなんて言っていいんですか？」

はる兄…もう有野先生だね。有野先生との時間は楽しかった。

「もし、華と吉井が上手くいったらここへは来るな。俺を有野先生と呼べ。そして、このことは忘れろ。」

みきやと上手くいかなかったら、今も先生の隣で笑ってたかな。

目が覚めて、長い夢を見た気がした。夏休みまだまだこれから。みきやから電話があるかも知れない。

私はもう、片思いには戻りたくない。

みきやと両想いになれたのは、私だけの努力じゃないから。

時計を見ると夜中の1時。癖で携帯のはる兄からの着信履歴を見ていた。もう2ヶ月前の履歴。前は、はる兄の履歴で埋まってたのに。

この時間なら、ワンコールで出てくれる。

私の中で、いけない考えが駆け巡る。うまくいってないから、話聞いてくれるかな。

私は通話ボタンをプッシュした。

トルル…。

《…もしもし。どうした。》

「なんでもない。間違えてかけちゃっただけ。切るね。」

《華の声ふるえてる。話くらい、いくらでも聞くから落ち着いて話せ。》

あぁ。どうしてこの人には、かなわないんだろう。

「はる兄。また会いたいよう。」

《バカ！彼氏いんだろ。この電話だって、オレが吉井なら嫌なんだぞ。》

「うん。私魅力ないよね。」

《ガキは元気ならいいんじゃねーか？ぴちぴちだしな。》

はる兄の声がかすれてる。寝起きって分かった。

「ぴちぴちってオジサンみたい。」

《あぁ。オッサンだよ。あと、もしオレと二人で会うんなら、正式なお付き合いじゃないとダメだからな。じゃ、オヤスミ。》

ブチッと耳元で電話が途切れた。今のは、告白？話聞いてくれるって言ってくれたのに、何であんなコトを言ったんだろ。

きっと、自分で考えろってことだよね。

はる兄の声が熱っぽかったのはきっと気のせい。寝起きだから、はる兄って呼んじゃった。有野先生って呼ぶのにやっと慣れてたのに、さっき見た夢のせいだよね。

鏡台の前に置いてるハートの箱。私は開けた。そこには、リボンとハートのデザインのブレスレット。初デートの時、みきやがくれた。

もったいなくて、なかなかつけられなくて、『ダサかった？』って誤解された。

今さらつけても、意味ないね。

みきや、今寝てるかな。合宿で頑張りすぎなきゃいいな。
その時、携帯が鳴った。ディスプレイに公衆電話からと表示されてる。
「…はい。」
《俺…だけど。今、ランニングしてたら公衆電話見つけて。》
「うん。」
《ちょっと言い過ぎた。俺、勇人に負けそうだったのが悔しくて、あん時自分のコトしか考えられなくて。》
みきやのあふれる想いが伝わってくる。
「今、夜中だよ？走ってる…って明日も練習あるんでしょ？」
《俺、考え事とかあると走るんだ。華が俺のせいで眠れないかと思ってさ。》
「…。」
《ちょっ、そこツッコむトコだろ。俺、ただのナルシストみたいじゃん。》
「もっ…ムリだと思った。私、ウザいのかなぁって！」
チャリンとお金を追加する音がした。
《そんなふうに思ったら、電話しねぇよ。合宿終わったら会いに行

く。》

私が答える前に、電話が切れた。最後ちょっとぶっきらぼうだった。みきやも私のコト考えてくれてたんだ。

ブレスレットしたのが、伝わったのかな。なんてブレスレットにキスして飛び跳ねた。

「姉貴ードスドスうるさい。」

隣の樹に怒られた。急いで、布団にもぐって目をつぶる。初めてみきやを好きって気付いて、話した夜みたいに心臓がトクトクいって熱い。

今夜は眠れそうにない。

ドタドタと足音が近づいきた。スパンと襖を開ける音がする。

「姉ちゃん！朝ご飯作ってー！」

「姉貴ー！僕イタリアン　スパゲッティがいい！」

部屋に飛び込んで来たのは、弟二人。

「あー、お姉ちゃん寝不足だから、声おとして。お母さんが作り置きしてくれてるよね。」

「兄ちゃんが全部食べたんだよ！」

「かわいこぶりやがって。弦のが肉、食ってただろが！」

「いたいーいたいー！」

樹が弦の髪引っ張ってます。

「そういや、【無表情でメガネで、髪ハリネズミなのに、姉貴にデレデレのオッサン】が『車で待ってる』とかほざいてた。」

「兄ちゃん、何かの番組みたい。」

「え、今待ってるの？」

「気のせいだったかも。なー弦？」

「なんで、ぼくをつまむの？いたいー！」

どうしよう。どう考えても、有野先生だよね。今、９時？夏休みなのにー。

二人を押し倒して、ラフな格好に着替えた。Ｔシャツに Ｇパン。

家の門を潜ると、先生がタバコ吸ってた。吸い殻が足元に散らばってる。

「先生！どうしたの？」

「夕べ　ラブコールくれただろ？乗れ。」「ちょっと待って。もう

みきやと仲直りしちゃったって言うか。」
私の腕をひき、車の助手席にのせた。
「抵抗しねーんだ？」
「夕べは悪かったし。お茶ならおごられてあげる！」
デコピンされた。
「そうそう。舞原は生意気じゃなきゃな。」
くしゃっと笑う先生。今日まで。今日までだから許して。

ちょっとレトロな茶店。いつもチョコパフェを頼んでくれる。
「昨日ちょっと酔ってて、電話の内容あんま覚えて無いんだけど、変なコト言わなかったか？」
「変なコト言ってたよ。ちょっとキザだった。」
「やっぱり。」
「本気じゃなくて良かったぁ。びっくりしたんだよ私。」
ちょうど、パフェとコーヒーが来た。
「オレ、好きって言ったんだ？」
「ううん。正式な付き合いがどったらって。」

「へぇ。で、華はあの時少しは揺らいだワケか。」

先生の様子がおかしい。目が真剣で、射抜かれそう。金縛りにあったようにただ先生を見ていた。

「図星？気づいてたんだろ、二人で話した日からオレがお前に惚れてんの。」

「違う。そんなこと。」

「ない？オレはいつでも華のコトを受け止められるから。今は、その時じゃない。」

「なに考えてるか分かんないよ。協力してくれたり、好きとか言ったり。」

「じゃあなんで、オレに電話かけたの？」

「え？」

「会いたいって言ったんだ？」

「覚えてるの？」

「さぁな。まぁ、あんまり気にすんな！」

先生の表情から分かったのは、自信満々なこと。その店をでて、すぐに家に送ってくれた。

「じゃあ、夏休み楽しめよ。」

「うん。」

ドアを閉めて、門に誰かが立ってるコトに気付いた。

「華。」

この声は、愛しいあの人。

ヒカルノヒカリ

俺に気付いた華は、目を見開いていた。これでＢＧＭ流れたら、月９っぽい。華は完全に偶然だと思ってる。

現実は違うよ。俺は汗臭い白い軍団の最後尾で、走ってた。ふいに横を車が通った。俺は残念なコトに動体視力がいいから、華と有野の楽しそうな顔まで見えたんだなこれが。

車が、華の家の方向に走ってたから、細い道から先回りした。それだけの話。

それを物語るように、俺は今、空手部のシャツに道着の下を着ている。勝手に練習抜けて来たわけで、時間がない。

「華。」

「みきや、合宿は？」

「抜けて来た。さっきのどういうこと？」

「違うの。ただパフェおごってもらっただけだよ。」

華の必死な表情を見てるのが辛い。

「違う？『ラフすぎる格好だな。朝帰りだったのかよ？』とかまだ聞いてねぇよな。華の言う『違う』はなんだよ！」

「…浮気してないもん。みきやがキスマークつけてた時も、浮気し

てたって分かった時も私、何も言わなかったじゃない。なのに、みきやが浮気してない私に怒る筋合いない。」
「俺、一年に一回記憶がない日があるんだよ。だから、わざと浮気したワケじゃない。彼女にヤキモチやいちゃ悪いかよ！」
「また、私に秘密だったんだね。その時説明してくれなきゃ分かんないよ。私不安だったのに。みきやのそれは本当にヤキモチなのかな？」
「男が、んなペラペラ自分のコトしゃべれるかよ。もう時間ねぇから、合宿終わってからまた話そう。」
「嘘つき。」
「ぁあ？」
「頑張ってね！」
笑顔で手を降る華。俺がどんな想いで、列から抜けて来たと思ってんだか。あー、練習戻りたくねぇ。また筋トレからだ。
道場に向かう途中の道路脇に、青い車が停まっていた。見覚えのある車。俺が近づくと、中から人が出てきた。
「道場まで、送るよ。どうせ、オレと華を見て追いかけたんだろ。」
「こっち風下なんで、タバコ吸わないでクダサイ。先生には関係ないデス。自分で走れマスから。」
「その敬語、ナメてんの？オレが小山先生にフォローしてあげようと思ったけど、必要ないみたいだな。」

「うわっ。うわうわ。乗ります！お願いしまーす！」

「どーぞ。…ったく単細胞ザル。」

「わー、綺麗にしてますね。」

ちっ。今は筋トレより打倒勇人。有野でも何でも利用できるモンは利用しよう。

「夕べ華から電話があった。」

「はぁ？」

「おい、敬語で話せ。敬語で。まぁまぁ落ち着け。オレは電話した理由を何も聞いてない。」

メガネを中指で押し上げた。中指とか…ありえない。女子は『キャー』とか言ってたけど。よく分かんねぇなぁ。オレには、怪しい合図にしか見えねぇ。

「良かったっスねぇ。俺の彼女から電話貰えて。次はありませんから。」

「ははっ。そうムキになるなよ。言いたいのは電話の話じゃなくて、俺が華に告白したって話。」

え。今、さらりと問題発言をしやがったよな。

「先生が華に告った？ふざけんな！」

「もうすぐで着く。」
「話変えないで下さい。」
「だから、オレが小山先生にお前のコトをフォローするのは、華に告白したのが1ミリくらい悪いと思ったからだろ。成績は良いのに頭悪いな。」
鼻で笑われた。だから、一々俺にライバル宣言しろっていつ言った？裏で動かれても分かんねぇし。正面から邪魔されても大迷惑。
結局、筋トレしなくてすんだ。有野がどういう言い訳を小山にしてくれたか謎だけど、信頼されてるコトは明らかだった。
そして合宿最終日。
「吉井の勝ちー。」
やっと、勇人に勝てた。
「言っておくけど、一度も吉井に勝ってねぇからな。」
「俺の中では、相討ちも負けに入んの。」
俺たちは握手しながら笑い合った。今日で合宿も終わる。帰って早くベッドにもぐりたい。

「吉井ー。ちょっと来い。」

「はい！」

部長に呼ばれた。

「脱水症状はもう大丈夫か？」

有野…そういう理由にしたのか。意外と下手だな。

「大丈夫です。」

「なら、明日からの朝練も出れるな？」

「朝練？」

「6時からだ。もし遅刻したら、この前の2倍だからな。」

こうして無事、合宿を終えたモノの明日から朝練が待っているのだった。

全身筋肉痛だ。後ろからチャリが来た。

「幹也君…。乗る？」

「光ー。お前やっぱ天使だったんだな！」

俺はチャリの後ろに乗った。歩くよりマシ。

「僕は悪魔がいいな。なんてね。とばすよ！」

「ちょっ！フラフラするな。危ないだろが。」

「なら、振り落とすよ？」

「こっち見んな！前見ろ！ブレーキ！」

キキッと急ブレーキが体にくる。やっぱ歩いた方が遥かにマシだ。コイツの運転、まるでパラリラバイク。

「パラリラバイクとは、バイクでくねくね走るテクニックの事。」

「光？わざとだろ。」

「僕、せっかく本屋のついでに迎えに来てあげたのに、そんなコト言うんだ？ほぉーへぇー。」

「だから前見て運転しろー！」

ある意味、合宿より神経使う。いや、命すり減るぜ。…5年は縮んだ。

「目的地に到着しました。お代は、そうだなぁ…。」

「ふざけ！色んな意味で助かった…。オヤスミー。俺は寝る。」

「まだ昼間だよ。」

サッと、風呂に入ってから、ようやくベッドに入った。

今は、ゆっくり眠ろう。頭も体も疲れた。誰かが部屋に入ってきた

気がしたけど、瞼の重さには負けた。

目が覚めると窓の外は真っ暗で、パソコンの明かりだけがついていた。

光のヤツ付けっぱなかよ。

俺は、だるい体に鞭をうち起き上がった。パソコンに近づくと何か文が打っていた。

「吉井幹也様へ？なんだコレ。」

内容を読むと、心が熱くなった。最後までたどり着かないのに光だって分かった。俺のコト、雪のコト。あの事故は光が押そうと考える前に、雪が滑った真実。

最後に、県外の高校に行くコト。

「意味分かんねぇよ。なんで？」

「幹也君。言えないコトを全部文章にしたんだ。」

いつの間にか後ろに光がいた。

「なんで県外の高校？」

「僕、これ以上一緒にいる自信ないんだ。」

「…。」

「休みとか帰ってくるから。…泣くなよ。」

「…ちげーよ！バーカ！」

「返事は、僕の卒業までにちょうだい。じゃ。」

吉井幹也様へ

僕は、幹也君にずっと言えなかった事が沢山あります。まずは、幹也君に本当は憧れてた事。ピータパンって言われてた時、ジャングルジムから落ちて骨折したよね。その時、病院の先生に「骨が丈夫じゃないから折れた」って言われてから、空手をやりだした。

最初は、細い幹也君が空手なんてムリだと思った。でも、どんどん色んなメダルやトロフィーをもらってるの見て、僕も何かやろうと思ったんだ。僕は、バスケだけど。

雪の事が一番言いたい。僕は、幹也君の弟になりたかった。雪がうらやましくて、ずっとどこかでひがんでたんだ。あの日、二階の屋根で遊んでて、雪を落とそうと一瞬思った。その時、雪が足を滑らせた。本当は、突き落としてなんかない。

ただ、助けようと思えなかった。手を伸ばせない僕がいた。だから、天使って呼ばれるのも苦しかった。

僕はもう、二人と一緒にはいられないんだ。悪魔だからね。だから県外の全寮制高校に行く事にした。バスケ推薦とれそうだし。

僕は、二人とも大好きだよ。だから、しばらく離れる事にした。

水田光

光に対してどんな返事をすればいいんだろう。俺に執着してたのは、気付いてた。俺は弟みたいに思ってた。雪が落ちた時、真っ先に光のせいにして、責任を押し付けたんだ。

俺と雪といるのが、辛いなら止めない。このまま、もとには戻れない気がしてたまらないんだよ。雪にも相談しようか？

これは3人の問題。

文じゃない、話し合いで解決したい。

おとぎ話

「お会計、五千百円です。」

「はい。」

「ちょうどですね。」

近くの本屋さんで、エッチな漫画大人買いしちゃった。全部樹に取られたからってのは2割で、8割はストレス発散。買う時のスリルが癖になる。

初めて読んだ時、体がずくんって熱くなった。でも、今は読んでも、読んでも何も感じない。

エッチな漫画を見るよりより、みきやと一緒にいたい。比べられないほどのときめき。キスするだけで心臓がとまるかと思った。有野先生の話を思い出した。

「華がエロ漫画読むのは寂しいからだろ?」

「寂しい?」

「そう。人は孤独を感じれば肌を寄せ合う。相手がいないから漫画ってワケ。」

「セクハラオヤジ。」

「ガーキ。」

寂しいって、ぽっかり心に穴をあいた様な感じ。その心を埋めるために、漫画を買ったのかも知れない。

携帯を見るのも辛い時とか、わざとリビングに置いて漫画読むの。現実逃避ってずるだけど、私なりの心のクッションだから必要なんだ。

むかーしむかし。鈍感な王子様がいました。王子様は、他の国のお姫様たちからアプローチされても気付かず、王様とお妃様は心配していました。

しかし、王子様には誰も知らない秘密があったのです。それは、使用人の娘に恋をしていることでした。そうです。王子様は本当は、他のお姫様の気持ちに気付いていたのです。気付かないふりをして、遠ざけていました。

両想いになれたのですが、現実は甘くなくお妃様に見つかり使用人の娘は辞めさせられまし…。

「ばかみたい。」

シャーペンを置いた。こういう場合、使用人が綺麗になってハッピーエンド。使用人の娘＝元カノ。合宿終わってるはずなのに、会いに来てくれない。宿題はむなしくどんどん減っていく。

漫画の残りは宿題終わってから読むことにした。

「姉ちゃん携帯忘れてるよー。」

「げーんちゃん。実入っていいか聞いてから開けるって約束でしょ。…ありがとう。携帯そこにおいといて。」

「ぼくも早く欲しいなぁ。黒の携帯にするんだ。」

「…無い方がいい時もあるよ。」

「ぼくにはまだ分かんないなぁ。だって持って無いもん。」

弦から見れば贅沢な悩みか。携帯をスライドさせた。未来ちゃんから着信有り。

「姉ちゃん。後で、マカロン作ってね。」

部屋から出て行く弦ちゃん。電話かけるって分かったみたい。さすが私の弟。

《はぁい。》

「ごめんちょっと手が離せなくて。本当は宿題してたんだけどね。」

《こらぁ。海どうする?》

「今ちょっとケンカ中なの。実は、みきやの合宿の時ケンカしちゃってさ。」

《えっ!応援がどうやったらケンカになるの?今から会おう!》

「今から？良いよー。」

クレープ屋さんで待ち合わせ。暑いからノースリーブの淡いピンクのワンピースを着た。

「お待たせー。そのワンピ可愛いね。」

「未来ちゃんの胸元のリボンすごいカワイイ。」

「って、本題に入るね。ケンカってどゆこと？」

大まかに話した。『空手に集中したい』って言われたこととか。

「それはヒドイね。」

「うん。」

「でも、たまに男らしいよねよっしー。」

うっとりする未来ちゃん。

「未来ちゃんみきやは私の彼だからね。」

「あはは。冗談だって。でも、意見はっきり伝える人嫌いじゃないかなー。」

未来ちゃんは、私より長くみきやと一緒にいたんだ。それが友達としてだとしてでも、まだ私が知らないみきやを知ってる。ちょこっと妬けるかも。

「私がキヨとケンカするのは、いつもキヨは『いいよいいよ』って私を甘やかすでしょ。それで、だんだんとエスカレートするから我慢するキヨがキレるってパターン。まぁ、私が気持ち確認するために、オーバーな甘え方するのが悪いんだけどね？」

美味しそうにイチゴを頬張る未来ちゃん。付き合いが長いとケンカにもパターンがあるんだ。

「あ、そのチョコちょうだい？」

「いいよー。」

マジだ。私自然に『いいよ』って言ってる。恐るべし甘え上手！

「えっちした？」

「はっ？はいー？」

「せっくす。」

バナナを食べながら言って欲しくなかった。

「まだだよ。」

「体で繋ぎとめるってのも悪くないかもよ？」

怪しげに笑う未来ちゃん。

「んー例えば、まずは指を絡めて、足を絡めてー。」

「ストップ！ストーップ！まだ昼間です。姉さん。」

「唇を絡めて、」

「私、知識はあるから大丈夫だよ。」

「初めてかぁ。個人差はあるよー。」

食欲失せてきた。プラス未来ちゃんがセクシーに見えてきた。荒城はこの罠にかかったんだね。

「なんて、体の繋がりなんてすぐに終わるよ。だから、華ちゃんはゆっくり、よっしーに任せてね。」

未来ちゃんは一瞬泣き出すかと思った。皆、濃い恋愛してるなぁ。私には、まだまだ経験不足で、不謹慎だけどちょっと憧れちゃう。

未来ちゃんの携帯が鳴った。今ヒット中の恋愛映画の主題歌。私は歌手の甘ったるい声が苦手。

「キヨからだ。メールだから大丈夫。」

「荒城って意外と束縛激しいんだね。」

「ううん。私が縛るんだよー。」

「シバル？」

「そ。し・ば・る。私の部屋ではキヨを縛ると安心するの。どこにも行かないって信じられる。」

どうしよう。話がヤバいよね。縛るって…えすえむ的な？監禁して安心？いやいやいや、目の前の美人さんが危ない事をするワケないじゃん、ねぇ？

「あの人見たー？豚のTシャツ着てたよね。」

何か女王様みたいに見えるのは気のせい…だよね。私の漫画趣味なんてまだカワイイ。

「縛るって詳しくは分かんないけど、繋ぎとめたい気持ちは分かるよ。」

「教えてあげようか？」

「遠慮するよ。私の場合、赤い糸をお互いの小指に結びたいなー。」

「なんてっ！純粋なの！」

体を繋げても純粋な人は純粋だと思う。未来ちゃんは純粋過ぎて、荒城への気持ちがそうなっただけなんだよね。

カラオケに行く途中、未来ちゃんはナンパされまくってたけど、断り慣れてた。あのマシンガントークをかわせてたのが、とにかくすごかった。

「カラオケ次は四人で来ようね。」

「うん。」

まずは、みきやくんと仲直りしなきゃね。

ティアーアンドスマイル

ノックが聞こえて、部屋を開けた。

「なんだ雪か。お前がノックするなんて雪降るんじゃね？」

「光ちゃんから伝言です。『僕に返事くれるまで、話しかけないでね。』以上。」

「俺から『3人で話し合おうとしたのに、俺が怖いのかよ。ヘイ！チキン。』って伝えとけ。」

「またぁ？私が何で伝言板しなきゃなんないわけ！」

「そういや、駅前のケーキ屋にかぼちゃケーキ置いてたなぁ。」

「お兄サマ喜んで！」

居酒屋かよ。部屋を出る雪を見て、売り言葉に買い言葉な自分が情けなくなった。

数分後、雪が戻って来た。

「伝言です。『幹也くんが僕に本音言いたくないんじゃない？チキン…弱虫か。そのまま返す。』だって。」

「光の真似してるだろ。似てねぇな。もっと卑屈っぽいだろ。」

「はい。伝えます。」
「おい！」
「私これから友達と遊ぶから、あとは自分たちで解決してよね！行ってきまーす。」
「そのスカート短いだろ！」
ったく。反抗期かな。ついこの前まで、素直だったのによ。それともアレの日か？

5分後、水田さんちのインターホンを連打した。
「僕会わないから。」
いつもはドタドタ走って来んのに、つまんねぇ。
「返事書いて来た。」
ガチャっとドアが開いた。俺の手紙を受け取りカサっと封筒を開けた。
「…ふざけてるの？」
「そんだけじゃダメか？それ以上…書けなねぇよ。」
「俺達は一生兄弟！って、だから僕は最低なっ…」
「もう自分を攻めんのやめようぜ。俺も光も雪も、あん時はガキだったし。だから、もう泣くの我慢すんなよ。」
「ずっと、ずっと二人に嫌われよう嫌われようってわざと…わざとっ！」

光が咳き込んだ。泣くのが下手なんだ。ガキの頃から光が泣くのは見た事ないくらいガマンしてたんだ。玄関に入り、背中をさすった。

「ばーか。お前が本当は不器用なのも、我慢強いのも知ってるよ。人間泣かなきゃ、どす黒いもんがたまるんだぜ。」

生意気に俺より背が高い光は、心はまだガキで、俺より背伸びしようって無理してた。俺は光が落ち着くまでただ黙って隣に座っていた。

光は涙腺が切れた様に、涙を流し続けた。まるで赤ん坊の様に。普段大人びてる光が今泣いてるだなんて誰も想像しないだろうな。

光は今までの辛い想いを洗い流しているように、涙はただただ溢れていた。

そして安心したように光は、リビングのソファーで寝た。俺は家に戻って、ふと携帯を見た。

「あー！華に連絡してねぇ！！」

慌てて電話をかけた。

《はい。》

「華？マジごめん！」

《今みきやの家の前に着いたところだよー。》

俺は玄関まで全力で走った。ドタバタうるさくても今は関係ねぇ！

「華！」

勢い良くドアを開いた。クイズ番組で、どちらが正解かＡの部屋かＢの部屋かを開ける様に。分かりにくい例えだ。

「電話来なかったら、修羅場だったね！」

俺は玄関で華を抱きしめた。

「今から華に大事な話があるんだ。」

「私別れないよ！」

「違うよ。俺の秘密だよ。ようやく解決したんだ。」

「分かった。」

俺の部屋で、華は黙って真剣に聞いてくれた。途中から少し目が潤んでる気がした。俺たちの話は、可哀想な話なのだろうか？華が何て言うか少し怖くなった。

「そうなんだ。近くにいる人って意外と分かり合うの難しいよね。気持ちを伝えるのも勇気がいるから、みきやが私に教えてくれて嬉しいよ。」

「俺、今まで誰にもこの話できなかったんだ。華には分かって欲しくて。光も俺の兄弟みたいなモンだから、華にも知ってて欲しくてさ。」

「それって、私も家族になるからってこと？」

「あーまぁ。まだ先の話だけど結婚しような。俺恥ずっ！」

「うん！みきや大好きだよっ！」

そして、俺たちはベッドでごろごろした。キスまでは…なんとか。でもベッドだぜ？俺も男だ。

「みきやって細いのに、腕の筋肉ちゃんとついてるね。すごーい。」

「そんな触ったら、くすぐってぇよ。」

「きゃは！」

きゃはっじゃないよ。よし。キスまでキスまで。

「いいよ？」

「マジっすか！いっただきまーす！」

そこでガチャっとドアが開いた。

「幹也くん！これからは頻繁に遊んでね。」

「光…いい加減にしろ。今からやっと、やっと…。」

「光くんありがとう。ちょっと目が血走って怖かったんだ。」

「僕で良ければいつでも呼んで下さい。」

「華？俺血走ってたぁ？」
「いただきます。はムードないよー。やっぱりまだオアズケ。」
「愛してるとかが良いよ幹也くん。」
「俺のガラじゃねぇんだよ。」
問題は解決して、俺は幸せな時を過ごしていた。しかし、Hしたかったなー。Hって変態行為の頭文字って聞いた事がある。変態行為って字ならび悪いよな。
久しぶりに光と華の自然な笑顔を見た気がした。俺、そんなに笑わせてなかったっけ。そうか、きっと無理して笑わせてたんだ。
「みきや、聞いてる？」
「僕が邪魔したの、そんなに残念だった？」
「今、『僕はわざと邪魔しました』って言ったようなもんだよな？」
「当たり前じゃん。僕は幹也くんのお兄さんみたいなものだからね。」
「お兄さん？確かに、みきやの方が弟みたいだよね。」
「華まで！地味にショックなんだけど。」
だから、俺いじられキャラじゃなかったんだってば。どうせ、身長

のせいだろ。

「今、身長が低いからって考えたでしょ？」

「性格だよね。」

「軽くイジメか！？はいはい、お二人の言う通り。はい終了。」

「もっと大人にならないと、華さん大変ですよねー。」

「そうなんだよね。」

これ以上、ムキになるとそれこそガキだ。落ち着け自分。深呼吸、深呼吸。

「ただいまー。」

雪が帰って来た。

「おー。俺たちさ、仲直りしたよ。」

「雪、おかえり。」

「お邪魔してます。」

雪が入り口から入らない。

「なんで、最初に私に言ってくれなかったの？…華さんに言う前に言って欲しかった。」

「雪待てよ！」

「幹也くんここは僕が説明するから。」

光は外にでる雪を追いかけた。

「雪ちゃんの言う通りだよ。３人の問題だから、私より先に雪ちゃんに話すべきだったね。」

「俺は雪も華も同じくらい大切だから。順番とか重要なのか？」

「もう！みきやは鈍感なんだから。私今日は帰るよ。ちゃんと雪ちゃんにあやまるんだよ。」

俺に優しくキスをして、華は帰った。女って複雑だな。

窓からコンコンと音がした。窓を開けると光がムダにカッコ良く入って来た。

「雪のヤツ相当怒ってたよ。僕の話も聞いてくれないなんて、初めてだよ。」

「マジで？」

「立場が逆なら、気持ち分かるよね？」

うわぁ。おっかねぇな。さすがに、かぼちゃケーキじゃ許してくれねぇよな。

「でも、僕も悪かったよ。メールくらいしとけば良かった。」

「ここは、二人で協力しようぜ。」

「そうだね。」

光はひたすら雪にメールを送った。返事は『うん』ばかり。
俺は、かぼちゃプリンやかぼちゃケーキなどを買った。雪の反応は、『今ダイエット中だからイラナイ』。
「機嫌とりみたいなことしないで。しばらくほっといてよ。」
俺は、3人のコト以外に何かあるんじゃないかと思った。最近の露出の多い服装とか、遊ぶ友達の名前を言わなくなったこととか。
「雪どうした？」
「な…にが？」
「最近変だよなお前。化粧とか濃くなったし。」
「流行ってんの。」
「何か言えないコトでもしてんのか？」
「私のコト信じてよ！お兄ちゃんまで信じてくれないの？ひどいよ！」
俺まで？ってことは、他の誰かに信じられないって言われたのか。
「幹也くん。今は様子を見よう。あんまり刺激したら逆効果だよ。」
「あぁ。分かってるよ。」

「雪には雪の世界があるだろ。学校の友達とかにも聞いとくから。」
「さんきゅ。」
一難去ってまた一難。まさにこのことだな。
「雪の友達に電話で聞いたら、樹絡みらしいよ。」
次の日、部活から帰ると当たり前の様に、ベッドに光が座っていた。
「完璧な不法侵入だな。それより、樹絡みってどういうことだよ？場合によっては殴り込みに行くかんな。」
「僕も殴り込み、手伝うよ。」
華の弟ってのが、気が…引けねぇよ。雪を傷つけたなら、誰でも許さねぇ。
「と、言いたいところだけど。雪にも落ち度があるらしいから。」
「落ち度だぁ？」
「年上の男と、樹を天秤にかけたとか。」
「…まさか。」
「雪の友達だから、詳しくはさすがに教えてくれなかったよ。」
「信じられないって樹が言ったんだな。」

「そうらしいね。」

俺に相談くらいすればいいのに。きっと雪のことだから、理由があるはずだ。

「雪を助ける？」

「当たり前だろ。」

「じゃ、久しぶりにいきますか！」

「おう。」

俺たちは、もがき苦しむ雪を救うべく、作戦会議をした。

「あー！思い出した。」

「何だよ急にデカい声出しやがって。」

「僕、雪から相談のってた時期あった。『年上のショップ店員』がどったらって。」

「おい。どったらじゃねぇだろ。」

「駅前にティアラって店あるでしょ。雪毎日通ってた時期あったらしくて。」

俺たちは、その店に向かった。

「いらっしゃいませ。」

「あ！あん時の。」

小さい紙袋を雪に渡してって言ったヤツ。頭を下げてきた。

「幹也くん知り合い？」

「微妙。」

「雪ちゃんは元気ですか？」

短髪で爽やかな男。この笑顔で女ならみんなイチコロになりそうだ。
「あんたさ。今も雪と会ってるだろ。」
「幹也くん抑えて。」
俺が睨んだのを気にもとめず、にっこりと笑いかけてきた。
「あなたに袋を渡してから、関わってません。」
「いきなりすいませんでした。」
光が頭を下げて、俺を引きずって店から出た。
「幹也くんあれは、いくらなんでも失礼過ぎるよ。僕もあの笑顔にはイラッとしたけどね。」
「大人の余裕…か。」
「そういえば雪、あの人に恋愛感情はないって言ってた。」
「はぁ？来る前に言えよ！」
「さっきの幹也くん面白かったなぁ。オラオラ系っぽくなってた。」
「なってねぇよ！」
ショップ店員と何もないなら、樹が怒ったのは何でだよ。何だかんだで、樹は俺と華がケンカした時仲直りさせてくれたし。まぁ…いいヤツだから。

「樹んち突入する？」
「だーかーら、俺の彼女の家でもあるんだよ。光、楽しんでるだろ？」
「ちょっと探偵気分？」
「最低だな。こっちはマジなのによー。」
「幹也くんは、さっきから力みすぎだよ。もっとリラーックス。」
やたらと発音がいい光が笑えた。確かに今の俺はキレやすい。
「樹に会っていいのか分かんねぇよ。雪が嫌がるかも知んねぇし。」
「今さらだねー。このままじゃ、雪が非行の道まっしぐらだよ。お兄さん。」
「このパターンだと、良かれが悪かれだぜ。ガキん時も雪に怒られたろ。」
「『私は一人で大丈夫だから、余計なことしないでよ。』でしょ。雪はやたらと呼び出しくらってたからね。」
「俺たちは、ただ守りたかっただけなのによー。」
「僕たちのせいで、エスカレートしてたからね。」
「だから女は分かんねぇ。」
「分かんねぇ、か。まだ、分かんなくていいんじゃない？」

「そうだな。」

樹が急に立ち止まった。

「キヨさんち行っていい？」

「めんどいな。一人で行けよ。」

「ほら、マサも情報通なんだよ。」

…何か、上手く丸めこまれてるっつーか。

「はいはい。分かったよ。」

古着屋に隣接する家の門を開ける。

「幹也さん！光先輩！」

子犬みたいなマサが玄関から出てきた。

「マサ香水つけすぎ。甘ったるい香りだな。」

「僕があげたんだよ。ねぇ、マサ。」

「はい！ありがとうございます。」

こりゃ忠犬ハチ公だな。マサが尻尾をふってる様に見える。マサは光に憧れてたりする。

「光か！オレのマサをこんなにしたのは！」

店からキヨが出てきた。さすが地獄耳。キャラ違うし。

「ども。キヨ先輩は相変わらずピョコンって前髪決まってますね。」

「これセットに時間かかるんだよ。自然な仕上がりだろ？」

光のペースにハマったな。

「兄貴ダサいって言ってんだろ。」

「マサも似合うかもね。」

光のせいで明日からマサもキヨヘアーの餌食になる。

「マサはこのふわふわな髪が似合うよ。」

「先輩！」

はいはいやっとけ。

「みっきー、海早く行こうぜー。仲直りしたんだろ？」

「さすがキヨ。情報はやっ！行きてぇけど、土日以外朝練なんだよ。」

「オレも朝練言ってるし。じゃあ今週の土日な！」

土日じゃ…夏休みの意味なくね？ってか他の二人ねキヨスケジュール把握済みかよ。

「お前に似合う服あるんだよ。見る？」

「見るだけな。いっつも、すぐこずかい無くなるんだよ。」

キヨの後に続いて店に入った。オシャレなキヨのおじさんとおばさんに挨拶した。

「幹也くん久しぶりね。」

「部活が忙しくて。」

「キヨも最近頑張ってるのよ。」

「母ちゃん余計なこと言うなよ！」

「じゃ、ゆっくり見てね。」

若い母ちゃんだなぁ。うらやましい。

「これこれ。このチェーンオレがつけたんだよ。」

「へぇ。スゲーな。このボタンも？」

キヨはジーンズをアレンジするのが趣味で、仕上げはおじさんがするけどなかなかの腕前だ。世界に一つだけってのがいい。

「どうスか？お客さーん。」

「…ちょっと俺には派手かもな。」

「幹也は、黒とか白とかしか着ないからなぁ。こんなのも似合うと思うぜ？」

「うーん。絶対これマサに作っただろ。」

「はは。ばれちゃった？」

「最近反抗期だから、着ないってところか？」

「鈍い幹也が鋭くなった！ピンクとか黄色とかカラフルすぎんだよ！だとー。ぼくちん、嫌われちゃったよ。」

「雪も反抗期なんだ。マサと関係あったりしてな。」

俺たちはそれは無いだろと笑った。

これは、お兄ちゃんが指輪を受け取って、私に渡してからの話。

私は樹くんに指輪の話をして、『ちゃんと自分で返す』って言った。

『僕もついていくよ。』この言葉を貰えて、最初は嬉しかった。でも、信じてくれて無いんだって思う自分がいた。

「僕がついて行ったら迷惑なんだ？やっぱり、やましいことがあるんじゃないか？好きなんだろ。あいつが。」
「何で私一人で行っちゃダメなの？信じてよ！私を信じて！」
「信じられないよ。しばらく距離を置こうか。」

去り行く樹くんを、ひきとめるのも怖かった。信用できないなんて付き合う意味ないもんね。
私は結局、学校の帰りに指輪を返しに行った。意外とあっさりしてて、樹くんとの言い合いが馬鹿みたいに思えた。

「あの。」

振り向くと、子犬みたいな目のくりくりした男の子がいた。

「ポチ。」

私は思わず呟いた。

「はい！よく言われます。」

変わったこだな。

「なんか用？」

「雪先輩ですよね！光先輩といつも一緒に帰ってる。」

「光ちゃんの知り合い？」

「はい。光先輩は憧れなんです。」

「君、明るいね。」

「先輩もいつもは、太陽みたいに元気じゃないですか。あんまり話したことないのに、変だけど、オレで良ければ話聞きます！」

あまりにも必死なポチに、私は。

「ぷっ。あははっ！最高！」

爆笑した。

「笑うことないじゃないですか！」

「ごめんごめん。あまりにも可愛くて。」

これがポチ、いや、荒城マサとの出会いだった。

ポチとの関係

ポチに今まで全然気付かなかったけど、男女問わずに人気だった。マサって名前らしいけど、私にはポチの方がしっくりきた。ポチって呼んでも怒らないし、むしろ喜んでるみたいに見えた。

一緒にいるだけで癒されるって初めてだった。

「オレがポチなら、雪先輩はご主人様っすか？」

敬語が崩れてきた頃ポチが聞いてきた。

「なんか、違うよ。私ポチをリードで繋ぎたくないし。たまに公園で野良犬を世話する気まぐれな女の子かな。」

「…噂通りの小悪魔っすね。」

「ポチはさ、色んな場合に連れてって嫌なこと忘れさせてくれてるんでしょ？」

「樹先輩と早く仲直りして欲しいだけですよ。ベストカップルでしたから。」

「いいの？ご主人様とられちゃうよ。」

「いいわけ…ねぇだろ。」

いきなりポチの声のトーンが下がった。冗談だったのに。

「マサ？」

「オレ、最初は雪先輩と、話せるだけで嬉しかった。たよりないオレに相談してくれて、いい後輩になれただけで十分だって自分に言い聞かせてた。」

「やだ。それ以上は言わないで！」

「耳ふさがないで下さいよ。オレなら先輩を大切にします。本当はずっと好きでした。」

私の服が派手になったのも、マサの服が派手で可愛いから。だんだんと合わせてる自分がいた。最初はマサに逃げてるだけだったのに、一番落ち着ける存在になってた。

「やめてよ。」

「ちゃんと、樹先輩と話し合って下さい。今の忘れて下さい。オレの初告白だったんすけどね。」

マサは、タイミング外したかぁなんて苦笑いしてる。どうしよう。嬉しかったのに、樹くんとまだ付き合ってるんだから。

「ちょっと待って。」

「雪先輩？」

「私、マサのこと好きだよ。だけど、樹くんとちゃんと決着つけてからでいい？」

「はい！」

「時間かかると思うよ？」

「待ちます！」

「私性格悪いかもよ？」

「知ってます！」

「ちょっとぉ。」

抱きつきたい衝動を抑えた。ポチからマサって呼んだ日。私たちの距離は近づいた。

夕方の図書館。窓際に彼はいる。ただのクラスメートの樹くんと初めてしゃべった場所だった。

「樹くん。」

「距離を置こうって言ったよね。」

樹くんはノートから目線を離さずに答えた。

「距離を置くっていつまで？私から逃げたいだけでしょ？」

「僕は、雪から話しかけてくれるの待ってたよ。」

「なにそれ。」

「僕は信じてた。やっぱり雪は」

「信じられないって言ったのそっちでしょ！」

周りの人に睨まれた。図書館って忘れて大きな声を出しちゃった。

「出ようか。」

「ごめん。」

夕暮れの川辺におりた。川に夕日が反射して綺麗だけど、あと少しで太陽とさよならなんだと思うと切ない気がした。

「本当は雪の顔を見た時、気づいてたんだ。別れを言いに来たんだって。」

「…樹くん。」

「ほら、いつまでたっても僕は『樹くん』だろ？樹って呼んでくれない。」

「それとこれは違うよ。」

「違わないよ。僕は受験に集中するよ。だから、マサと仲良くな。」

「雪せんぱーい！」

土手の上でマサが両手を振っていた。おあずけ…が待てなかったん

だ。

「あとちょっとだからそこで待っててて！」

「嫌です！待てませーん！」

「ははっ。雪にはちょうど良いかもね。あのくらいが。」

「ちょっとどういう意味よ。」

「大好きだったよ。」

私の頬にキスを落として樹くんは土手を上がった。

「樹先輩！今雪先輩にちゅうしましたね！」

「さよならのキスだよ。」

「唇にしてませんでした？」

「さぁな。」

ちょっと女の子置いて先に帰らないでよね。

「待ってよ！」

「おら。マサちゃんと送れよ。」

「言われなくても分かってます。さようなら。」

「お前今馬鹿にしただろ！」

「雪先輩！今すぐ消毒しましょう！」

「おあずけできなかったからだーめ。」

「マジっすかぁ！」

お兄ちゃんにはまだ言えない。可愛いすぎる私の新しい恋人。

家に帰ると、お兄ちゃんが仁王立ちしてた。光ちゃんがその後ろで腕組みして壁にもたれかかっていた。これは二重に怒られるな。

「どこ行ってた？」

「友達のお家。」

「じゃあ、樹んちだね？」

「違うよ。光ちゃんまでどうしたの？」

2対1はずるいよね。
「雪が俺たちに冷たいんじゃねぇか。」
「そうだよ。幹也くんにならまだしも、僕にまで。」
「ちょっと！二人とも子供すぎ！引きずらないの！」
「その匂い。僕がマサにあげたねと同じ匂いだ。」
「へぇ。偶然か？」
「光ちゃんの嗅覚犬なみだね。」
「あれ？まさか図星だった？あの香水、今人気だから色んな人がしてるはずなのにね。」
「名探偵ヒカル出た！」
「分かったよ。今度家に連れてくるから。私、お風呂入りたいから。」
「ゆきー。あんな犬やめとけ。」
「だから、マサが雪のこと聞いてきたのか。」
「光って、恋愛にはやたら疎いよな。」

「確かに、自分以外の恋には興味ないから、すぐ忘れるよ。」

私は、お兄ちゃんと光ちゃんの雑談が聞こえる中、部屋に向かった。

マサからメールが届いていて、デートの誘いを遠回しにしていて可愛い。メール返したら電話が来そう。

私はベッドの上で飛び跳ねた。

『うるさい』ってお父さんに怒られたのは言うまでもない。

「雪ー。マサなんて頼りないだろ？」

「お兄ちゃんしつこい！」

「僕が前より遥かに男らしくしたはず。」

「光何したんだよ。」

早く電話したいのに。二人が邪魔する。

「キヨはなんて言うだろうな。」

「キヨさんが何で？」

「マサはキヨの弟だからだよ！」

「しかも、極度のブラコーンだよね。」

「発音おかしいよ。お兄ちゃん何ウケてんの！」

「ぶ、ブラコーンってお前！ぶははっ！」

お兄ちゃんのツボは謎すぎる。キヨさんとは仲良いし大丈夫だよね。

お兄ちゃんと光ちゃんが私の部屋を出てから、私は電話した。

《もしもし。》

「あれ？キヨさん？」

《雪ちゃんか。ウチのマサと知り合いだっけ？》

ガタッと音がした。

《すいません。今風呂入ってて、兄貴いつも勝手に電話出るんスよ。》

「そうなんだ。」

心無しかキヨさんいつもより冷たかった様な。

《兄貴早く出てけよ！本当にウチの兄貴迷惑なんスよね。》

「なんか、びっくりしちゃった。ごめんもう寝るね。オヤスミ。」

《あ！雪せ》

ブチッと切ってしまった。いくらお兄ちゃんでも電話に出ないよ。

…付き合って当日、ちょっと不安になる私だった。

精一杯な俺

明日は、キヨと桜と、華と俺の四人で海に行く日だ。光にだけは、邪魔されたくねぇ。俺は喉がかわいたので、ミネラルウォーターを冷蔵庫に取りに行き、部屋にまた戻った。

「幹也くん…にしては、頑張ったこの派手な水着どうしたの？」

「うおっ！お前いつ入ったんだよ。水着勝手に触んな！」

光から水着を取り返しバッグに戻す。

「なるほど。明日あたり海にでも行くとか？」

「何推理してんだよ。だとしても、光はお勉強があるだろ？いい加減そろそろやべぇだろ。」

「僕、志望校オールA判定。」

「受験の怖さ知らねぇな？A判定で落ちるヤツは落ちんだぞ。」

「今、禁句を言ったね…。幹也くんだってそのダサい水着どうにかしたら？僕勉強に戻ろう。」

結局窓から、自分の家に渡った光だった。この水着思いきって買ったのに、そんなダサいか？俺は、光の意見を真剣に受け止めていた。

「雪ー、ちょっといいか？」
「…お兄ちゃんノックしてよ。」
「暗っ！何で地味にオチてんだよ。」
「うざい。一人にして。」
「ぁあ？兄さんに向かって『うざい消えて』だと！」
「耳おかしんじゃない？一人にしてって言ったじゃん。」

俺は構わず雪の部屋に入った。

「んで？マサとケンカしたか？良かった良かった。」
「違うよ。お兄ちゃんが言ってた通り、キヨさんのブラコンぶりを実感しただけ。」
「あー。キヨのは俺から見てもヤバいからなぁ。」
「ヤバいって？」

イスから身を乗り出して俺に聞いてきた。

「んー。まぁ…それは雪が直接自分で聞くことであって、むやみに俺からは言えないなぁ。」

「その水着似合わないよ。じゃあね。」

そして部屋を追い出された。何だよ。人間、水着より中身だろ。しかも、これ高かったんだぞ。店員さん似合うって言ってくれたし！やっぱ、売るためだけの言葉だったのか。薄々は気づいてたけど。

キヨ、ウチの妹に何言ったんだろ。雪にはめちゃくちゃ甘かったのに、マサに関わると厳しいからなぁ。あそこまで異常なまでにマサに溺愛な理由、きっときっかけがあるはず。聞いても言わないだろうな。

「マサに聞いてあげようか？」

「光！また来てたのか！？」

「消しゴム忘れちゃって。」

「何で消しゴム持って来てたんだよ。」

「まぁまぁ。それはいいから！マサに聞いてあげる。」

「何で俺の考えてたこと分かんだよ。読心術か？」

「幹也くん…ブツブツ言ってたよ。」

マジかよ。俺テストの時答え言ってねぇかな。って、そうじゃなくて。

「また面白がってるだけだろうが。さすがに俺も雪離れをしねぇといけねぇから、ちょびちょびな。」

「ふぅん。へぇー。ほぉ？はぁー。」

「光が俺をバカにしても、俺に二言はない。」

「『男に二言はない』でしょ？」

「わざとだ！」

ちくしょう。背が高いからって見下しやがって！まぁ、正確には見下ろすだけどな。

「ぶっ！本当はめちゃくちゃ気になる癖に。痩せガマンは体にわるいよ？」

「笑うな！今は受験に泣け！消しゴムならくれてやるから。」

「ストロアップル？僕はクールなブラックチェリーが好きだから、いらない。」

「かっわいくねぇヤツ！誰に似たんだ全く！」

「幹也くんかもね。」

ちょっとこしょばゆい。こうやって、さりげなーく女を口説くんだな。俺には到底無理。

「なんだよ。」

「明日楽しんでね！僕はジャマはしない。」

「『は』ってなんだよ。意味深だな。」

「じゃあ、また来るね。」

「いい加減、玄関使え！」

ひらりと怪盗Hは家に帰った。この調子だと今夜は眠れないな。

…水着二着持ってくか。

翌日。キヨの家で待ち合わせだ。途中で華と桜と合流した。

「あの二人可愛くね？」

「マジヤバいな。行っちゃう？」

「げ。ゴブつきかよ。」

聞こえてますけど！

「よっしーは、私たちのガードマンなのにね。」

「ガードマンよりみきやは執事っぽいよ。」
「お嬢さん方盛り上がってますねー。俺の話題はやめろってガードマンでも執事でも何でもいいよ。」
「執事かぁ。似合うかも！」
「でしょー！」
俺の声聞こえてねぇな。きゃいきゃい楽しそうだな。…華かわいい。
「…おまえら遅い。」
「ごめーん。キヨ機嫌悪くない？」
「荒城、こっちのテンションまで下げないでね。」
「あぁ。」
いつものチャラさがない上に、俺と目線合わせねぇ。やっぱ雪とキヨのコトか？
「華ちゃん行こっか！」
「えっ？未来ちゃん待って！」
桜が俺たちの様子を見て先に行った。

「幹也。」

「キヨ待てよ。」

「オレ嫌われたぁ！」
いきなりキヨがしがみついてきた。俺の体は華のモノなのに、なんてな。

「はいはい。とにかく落ち着け。」
「雪ちゃんからの電話オレが出ちまって、ちょっと冷たい対応したんだ。」

「なんだと！」

「悪かったって。マジで殴るなよ？そんでキヨが雪ちゃんの様子がおかしいって。兄貴とは絶交だ。ってぇ！」
マジ泣きしたよ。つか早く海で華と海辺を走りてぇのに、何で男の涙をティッシュでふいてんだ俺。

「まぁ。１００％お前が悪くて雪が一番可哀想だけどよ、二人を試すチャンスじゃねぇか？」

「わぁ。幹也かなり悪人面！だよな。あんくらいでダメになるなら、付き合う意味ゼロだな！」

「うっせ。顔が悪いのは元々だよ。って訳で早く行こうぜ！」

「みっきー待てよ！」

二人は少し前で待ってくれてた。

「仲直りした？」

「未来ー！ありがとな！大好き！」

おいおい。公衆の面前でキスすんなよ。

「いいなぁ。」

「華！？」

「なんちゃって。」

俺は建物の影に、華を引っ張った。

「みきや？」

「しっ。俺はここが精一杯。」

優しくキスをした。

「みきや…だいすき。」

「俺は、すっげぇ好き。」

もう一度キスをしようとした時。

「電車間に合わないよお二人さん。」

キヨに見つかった。

電車の中は混みまくってた。華が痴漢に合わない様に、座らせて俺は正面に立った。キヨも同じ事をしていて、いきなりダメ出しされた。

「みっきー全然ダメだね。」

「何だよいきなり。」

耳元で、『キスの仕方がなってない』とかほざいて来た。

「うっせぇ。自己流だからしょうがないだろ。」

「何事も勉強だよ。チミ！」

「歴史の河田のマネだろ。」

「あはは！キヨ似てるよね。」

「へぇ。荒城って特技があるんだ。」

「舞原ちゃんそりゃないぜ！」

…華も下手くそって思ってたらどうしよう。華と目が合った。ニコッと微笑む彼女。ヤベっ、唇に目が行く。

「みきや、着いたよ。」

「エロヤ行くぜ！」

「キヨに言われたくねぇよ！」

海が見えた。他の三人には電車で見えたって笑われたけど。それどころじゃなくて、水着になる自信無くなってきた。これはキヨの策略だな。

「人多いな。」

熱気がむあっとくる。海辺走れねぇ！

「じゃあ、着替えてからここでね。」

「おう。」

「未来ー！ちゃんとTシャツ着るんだぞ！」

「どうしよっかなぁ。」

隣でまだラブラブしてる二人。俺もさっさと水着に着替える事にした。

「…極端すぎる。」

俺は、色が地味な水着と、新品の水着とにらめっこしていた。

「幹也こっちにしろよ。俺といれば地味に見えるぜ！」

「キヨはキャラ的にいいんだよ。」

「男は女の子待たせたらダメって言うだろ。早く脱げ！」

「やめろって！自分で脱ぐから。」

せっかくだし。俺は派手なのにした。待ち合わせ場所には、まだ二人は来てない。

「オレの未来がナンパされてるかも。」

「大丈夫だよ。二人ともしっかりしてるだろ。」

二人が走って来た。

「ごめん！遅くなっちゃった。」

「未来ちゃん最高！ってTシャツは？オレの来てなさい。」

「みきや、変じゃない？」

水色の水着は、色白の華によく似合ってた。しかし、透けねぇかな。めっさ心配。

「みきや聞いてる？」

「か…わいい。抱いて寝たい！」

「私だきまくら？ひどい。」

そういう意味じゃないのに、ほっぺたを膨らまして可愛い。

「って二人がいない！」

「せっかくだから泳ご？」

「あっちで泳ごうぜ？」

「うん。」

手を繋ぐだけなのに、いつも以上にドキドキした。お互いいつもより素肌が近いからだ。

少し離れた場所に来た。襲うとか思ってないからな。

「岩影涼しいねー。」

「そうだな。泳ごうか？」

立ち上がろうとしたら、手をつかまれた。

「しばらく、こうしてよう。」

華は腕を絡めた。ふわっと柔らかい胸が当たる。ザザン、と海の音と、少し離れたところから人の騒がしい声が聞こえてくる。

「このまま時間をとめようか？」

「あはっ。そんなこと出来るの？」

華を抱きしめた。いつもより肌を感じられた。

「こうしてたら、時間が止まったみたいだろ。」

「うん。」

心臓の音が重なる。

俺は離した。

「よし。競争しようぜ！」

「うん。私泳ぎには自信あるんだからね。」

海に来て良かった。海の水は当たり前にしょっぱくて、俺の心の青くささの様に感じた。

前を泳ぐ華は…ヤバい下心がムラムラきた。

「やった！いっちばーん。って、みきや鼻血大丈夫？」

「鼻血？うわぁ！俺初めて鼻血出した。スゲー。」

「感動しないで早くこっちに…」

むにっ。

夏の熱気が俺を狂わせた。ヤバい。暑い、熱い、アツイ！！

「大丈夫だから！ちょっ、俺自分でできるからはなれて！」

「みきや？」

その後、しばらく…ある場合にこもったらしい。キヨにはひやかされ、桜に怒られ、華には心配され散々な1日だった。

光の言う邪魔者は、俺の欲望だったのか。

光の好きな人

「デッレデッレぇー、デッレッデッレー。」

「幹也くん。華さんにデレデレなのは分かったから、変な歌口ずさまないでよ。しかもクリスマスソングまがいだよね。」

俺は光が勉強してる横で現国の宿題の漢字を書いていた。ちなみに今のは俺の鼻歌だから深い意味はない。

「鼻歌は頭をリフレッシュする効果があるらしいぜ。」

「それ幹也くんが今考えた理論でしょ。」

「よし、あと少しだ。」

「あー、今逃げたね。問題です。そんな幹也くんですが、1ヶ月記念日に彼女に何をしてあげたでしょうか？」

「華に花をあげた。」

「…マジ？」

「ちょっと明らかに引くなよ。」

光は出口までズサッと体を引いていた。

「ダジャレとか無いだろ。いくら隠れ硬派な幹也くんでも、ギリギリアウトだね。」

「花屋に行って、片手で持てる小さなサイズの花束作ってもらったんだぞ。花言葉も花の名前も知らねぇから、『幸せになれる様な花言葉の花、束ねて下さい。』ってハズいセリフはいたんだぜ？」

「…僕は何も聞かなかった。次は、数学しよう。」

「ネットで花言葉調べて万が一家族に履歴見られてみ？俺キザだと思われるだろ。」

俺を無視して、黙々とシャーペンをスラスラ動かしている光。自分から問題とか言っといて腹立つなぁ。

「その後プリクラ撮った。俺あんまり好きじゃねぇけど、いい思い出になったな。」

「そういえば、元カノとチュープリとってたよね。華さんとはとらないの？」

「さぁて、どうだろな？俺も数学しよう。」

光の部屋で宿題した方がはかどる。殺風景で誘惑が少ない部屋だからだろう。

「おかしいな。僕の解き方が間違えるハズがないんだよね。」

「自信満々だなおい。あー、単純ミスだな。ここんトコ計算ミスしてる。」

「本当だ。どうも。」

「どうもってなんだよー。あ、光が照れてる。」

「違うよ。幹也くんこそ、そこ間違えてる。」

「二人とも何イチャイチャしてんの？気持ち悪い。」

雪が入り口に立っていた。

「雪ちゃんとチャイム鳴らせよ。」

「…何か変なコトでもしようとしてた？」

「僕はちゃんと女の子が好きだから。大丈夫！」

「お。雪も勉強しに来たのか？」

「うん。教えてー。」

さっきまで、ホモ疑惑かけて来たのに、変わり身早いなぁ。さすが俺の妹。雪を教えるのはどっちだ！を決めるためにジャンケンした。俺が負けて教えるコトになった。

「今数学してるから、数学だせ。」

「はーい。」

数分後。

「この公式覚えろってこの前も言っただろ！全っ然やる気ねぇな。」

「たまたま忘れただけだもん！今暗記したよ。」

「じゃあこの応用問題解け！」

「こんくらい楽勝だもん！」

「二人とも自分ちでやってよね。まぁ、僕は問題集一冊終わったけど。お先に休憩するね。」

光は一階におりていった。光は問題集を1日一冊解くとか目標にしてる。結局どこ高行くんだか。

「お兄ちゃんできたよー。」

「お！やれば出来んじゃん。」

「アイス食べる？」

光が戻って来た。

「食べるー！ありがとー光ちゃん！」

「さんきゅ。俺バニラがいい。」

「はいはい。雪はイチゴ味で幹也くんはバニラ味ね。ちなみに僕はコーヒー味。」

「生きかえるー！」

「冷たくて気持ちぃー。」

「ははっ。オーバーだよ。他の人に餌付けされないでよね。」

二人に聞きたいコトはある。でも呑気な二人の顔を見たら、今はその時じゃないかなと思った。

「お兄ちゃんこぼれるっ！」

「うあっ。危ねっ。」

「ちょっと僕の部屋汚さないでよ。」

そんな俺たちの日常は、永遠だと感じていた。まだガキで、バカで、くだらない毎日は短い青春の1ページに過ぎないなんて、知るわけなかった。

「現国の作文のテーマは…『青春』か。やっぱ部活のコトを書くしかねぇな。」

「なんで？華さんに花をあげたって書けばいいじゃん。」

「お兄ちゃんキザだったんだ。ブラコンの上にキザ男…最悪。」
「華は可愛く喜んでくれたんだよ！お前らに分かんなくてもいいし。」
俺は下書きを始めた。雪は光に教わっている。ケンカしない時は穏やかな二人。光と雪の勉強からケンカに変わる時といったら、漫才なみの勢いだ。
「光。眠くなってきた。ベッド借りる。」
「うん。分かった。後で起こすよ。…で、このXに代入して。」
「ほんとだー！」

賑やかな声を聞きながら俺は眠りについた。
夢の中で、俺は華と追いかけっこをしていた。場所は、見たことのない広い草原。いくらなんでもメルヘン過ぎる。でもこんな夢を見るくらいだから、今は追いかけっこだけでドキドキするくらい華が好きなんだろうな。
ドゴッと頭上の音で目が覚めた。
「幹也くんやーっと起きたね。」
辞書を片手に光が俺の顔を覗き込んで来た。

「あれ？雪は？」
「先に帰ったよ。」
「お前その手に持った辞書を頭に落とそうとしただろ！っつーかギリギリに落としただろ！」
「へ？こんなトコに辞書が。変だな。」
3時間も寝てたらしい。光のベッドは寝心地が良いんだよな。
「幹也くんHな夢見てたでしょ？」
「はぁ？」
「はなぁー。はなぁ！とか幸せそうに叫んでたよ。」
「ちっ、ちげぇよ！バカ。ピュアすぎる夢だ！」
「はいはい。ピュアとか似合わないから言わないで方がいいから。僕なら何でもアリだけどね。」
「光のがピュアじゃねぇし。ピュアなハートがふるえーる」
「ナンとかの愛のシゲーキ。僕、歌詞忘れた。幹也くんご機嫌だね。」
「俺ってやっぱ、意外とロマンチストだって分かったんだよ。」
「どのへんがー？」

「このへん全部だよ！コイツー！」

「タンマタンマ！」

光にヘッドロックを決めた。光んちに泊まるコトになった。

「僕好きな人ができたんだ。」

「いきなりその話？」

「心って意外と簡単に癒えるんだね。」

光と恋バナなんて久しぶりで、あっと言う間に夜が明けた。

心の傷が簡単に癒えるなんて俺は思わない。光は好きになった人は、スゲー努力して光を振り向かせたに違いない。少し前までもう恋なんてしないなんて言ってた光が、簡単に心がわりするハズがない。光のコトだから、相手の気持ちには気づいてたんだろうな。

「光の好きな人今度紹介しろよ！」

「ちょっと今やっと寝かけてたのに、大きな声出さないでよね。すぐには紹介しないよ。」

「あっそ。そんなに見せられない様な人なんだ。」

「その反対。幹也くんに惚れられると困るからね。」

「バッカじゃん。アホらしー。寝よ。」

なんて言ったけど、一歩踏み出せた光に安心した。人にすぐ壁を作る癖がある光だから、好きになるってよっぽどなんだと思う。

「…ごめん。」

光が小さな声で何か呟いた。寝言かと思って俺はスルーした。ごめんの深い意味が、俺にはまだ分からなかった。俺は呑気に光の成長に喜んで、いつか紹介してくれるんだろうなとか期待してた。

まさか、光の好きな人があの人だなんて全く想像してなかったんだ。3日後の部活帰りに目撃するまで、1ミリも…。

「…花音さん。」

まさか光が俺の元カノを好きだったなんて、嘘だ。でも光のあの熱っぽい眼差しは恋をしてる顔だ。いつから、会ってたんだろう。まさか、俺と付き合っている当時からいつも会ってたのか？そういえば光、花音さんを見たってしょっちゅう言ってたな。

「だから紹介できないわけか。」

俺はむなしく呟いた。

光から見たら、まだ俺が引きずってるみたいだったのかよ。

また一つ光に聞きたいことが増えた。

華のおまじないのキス

光と元カノを目撃した後、真っ直ぐ家に帰った。寄り道するつもりだったけど、そんな気分にもなれなかった。

「ただいまー。」

「おかえりー。可愛い彼女が部屋で待ってるわよ。」

「分かった。」

俺は自分の部屋のドアをあけて、目があった瞬間、華を抱きしめた。そして、めちゃくちゃにキスをして、押し倒した。

「何で抵抗しないんだよ！」

「みきやが泣きそうな顔してたから。」

「俺っ、俺、華が好きなんだ。華だけが！」

華はゆっくり俺の頭をなでた。まるで子供をあやす様に。

「知ってるよ。光くんとケンカした？」

「…違う。」

華を押し倒したまま見つめた。凛とした瞳をしてる。まるで本当のコトを言ってと言うようだ。俺はゆっくり華をおこした。そして、座ったまま後ろから抱きしめた。

「顔が見えないよ。」
華が俺を見上げる。唇に軽いキスをあげた。
「もう。」
「照れてる？華かわいい。」
「今日のみきや甘えん坊だね。なんかくすぐったいなぁ。」
華に相談するには、元カノとのコトを話さないといけない。このまま言わないと華への秘密がつもりつもる。
「みきや？何かしゃべってよ。」
「今から華が聞きたがってた元カノの話するよ。」
華はギュッと俺の手を握った。
「やっぱり怖いよ。聞かない方がいいかも。何かみきやが遠くなるきがする。」
「大丈夫。俺のコトもっと好きになるから。って、本当はそんな自信なんてねぇけど。」
「分かった。じゃあもっと好きにさせて？」
もう一度俺を見上げる華。ってこの会話初めてのHみたいじゃねぇか！ヤバい俺のエロ心が出てきた。手が自然に華の胸に…。
「って違う。初めてアイツと会ったのは。」
中1の春。桜が綺麗で、校舎の窓に舞い降りてた。入学したばっか

の俺は、桜を見てて友達とはぐれた。友達の後ばっか着いて行ってたから、校舎の道なんて覚えてない。一人うろついてたら、花音さんが声をかけてくれた。中1の俺にとっての中3はすっげぇ大人に感じていた。

花音さんもお姉さんで、道案内してくれてる時緊張した。そしたら笑って『緊張しなくていんだよ。先輩はみんな優しいから。』なんて言ってくれた。最初は憧れだったんだ。

「そんな優しい顔して話さないで。やっぱりちょっとキツいなぁ。」

「華？」

「本当はね。光くんと元カノさんが一緒にいるの何回か見たんだ。元カノさんのコトを思い出して欲しくないから、みきやには言い出せなくて、ううん、言いたくなかった。」

「俺だけが知らなかったんだ。取り乱してバカみてぇだな。」

華が俺の胸元に顔をうずめた。

「…ばかだよ。元カノ元カノって、今目の前にいるのは私でしょ？」

「あー。だから華だけって言ったの！俺がショックなのは光が内緒にしてることなんだよ。」

今度は正面から抱き合う形になる。

「光くんには俺に構うなみたいな感じなのにね。過保護なんだから。」

「…まぁそうだけど。それとこれは違うだろ。」

「それに本人に確認してないのに、騒ぎすぎ！」

俺らは、暑い中密着しながら話していた。抱き合うと俺らだけの空間って感じがする。

「俺さ、光に県外の高校に行くの変えたのかもまだ聞いてないんだ。それなのに、何で二人で会ってんのかとか聞くタイミングもつかめねぇよ。」

「そっか。光くんが話してくれるの待ってるんだね。」

「かっこ悪いよな。」

華は何も言わず、俺の頬にキスしてきた。

「勇気が出るおまじない。」

「ありがとな。あー、もう！かわいすぎ！」

華はまだエロ漫画を読んでんのかな？読んでても読んでなくても、オタクでもオタクじゃなくても、華だから好きなんだ。

そして華を家まで送った。

その夜、光は来なかった。まるで、俺が目撃したのを知ってるかの

ように。

「お兄ちゃん、光ちゃんは？」

「知らねぇよ。アイツも、やっと受験に専念するんじゃねぇの。」

「うわー。冷たぁい。」

「夏だからちょうどいいだろ。」

「また親父ギャグ？」

「親父ギャグも頭の体操になるんだぜ。」

「うっそだー。」

光の部屋に明かりがついた。って、悪魔でも偶然見えただけだから。

華に勇気のキスを貰えたんだ。

「雪、俺光んち行って来る。」

「はーい。」

酷い真実でも知りたい。俺はチャイムを一度だけ押した。

「幹也くんがチャイムを連打しないなんて、珍しいね。」

「光に聞きたいコトがある。」

「暑いでしょ？まぁ、中に入ったら？」

光は気づいてる。ほんの一瞬、顔が強ばったのを見逃さなかった。
「何でも聞いていいよ。ただし、答えるか答えないかは、僕の自由だからね。」

「あぁ。まずは、第一志望は変えた？」

「んー。まだ迷ってるから、まだ親父に相談してない。」

「じゃあ、今日花音さんと会ってたのは何で？」

光はゆっくりため息をついた。

「何で？幹也くんと出会う前から、花音さんのコトを知ってたんだよ。話しかけたのも僕が先。いけない？今は幹也くんと花音さん関係ないでしょ。花音さんのコトを無視したの幹也くんだしね。」

「おまえっ！知らないふりしてずっとバカにしてたのか！？」
俺は光に本気で掴みかかった。

「バカになんてしてない。ただ、今さら花音を好きになっただけだ。いいだろ！僕だって好きになんてなると思わなかったんだ。」

「ちげーよ。俺はお前がそれを隠してたのが嫌なんだよ。」

ゆっくり光から手をはなした。

「どっちも大切だから、それにまだ付き合っても無いだろ？僕だけ盛り上がってバカみたいじゃん。それに花音も僕とは付き合わないと思う。」

「光にしてはやけに、弱気だな。」

「ほんっと鈍感でいいよね。罪だよそれ。自分で考えたら？」

光が俺を鼻で笑った。ムカつく。鈍感じゃねぇよ。鈍感鈍感みんな言うけどな。

「でも幹也くんが、聞いてくれて良かった。僕、バレないかビクビクしてたんだよね。」

「光から好きな人できたって言っただろ？バカか。」

「それが精一杯だったんだよ。僕デリケートだからさ。」

「俺応援するから。ま、せいぜいガンバレ。」

家に帰ってからすぐ、華に電話した。華も相当不安だったらしく、応援するって言ったら喜んでくれた。

俺が応援するって言った時の、光の緊張の糸が解けた様な笑顔は、今までの中で一番自然な笑顔だった。

いつもあんなに素直に笑えばいいのに。と密かに思ったのだった。

黒髪フェチ

朝の稽古場は、好き。家の一番奥にひっそり立つここは、客人には見せない秘密の部屋。毎朝、私は体を動かしてる。

「やー！」

二段蹴りをした。

「華、軸がずれていたぞ。」

「お父さん。おはよう。」

「昨日、食事の約束をまた断ったそうだな。父さんは、色んな人と話しだけでもしてほしいだけだ。それなのに、何だその形は！」

「食事とか言って、安心できる男性を紹介したいだけだよね。一度軸が曲がったからって、大げさなんだから。」

汗を拭きながらお父さんを見た。

「一度だと？その一度で、父さんは殺されかけたこともある。」

お父さんの指導はかなり細かい。少林寺拳法は体が軽くないとできない。つまり、軸がずれたのは…。

「華、お前太ったな。」

「分かってる！だから体動かしてるの！」

「体重で重心が変動する。お菓子作りすぎだ。樹と弦は太らないからいいが、華は…。」

「今から走ります。」

全く。デリカシーがないんだから。お母さんはお父さんのどこが良かったんだか。あ、お見合い結婚だっけ。お見合いで見た瞬間、人目ぼれとかホントかなぁ。

考え事してたら、枝に髪の毛を引っかけた。

「いたっ。どうしよう。」

「舞原大丈夫？」

杉岡くんがなぜか走ってきた。そういえば、毎日走ってるって聞いたことがある。

「大丈夫だよ。」

「ちょっと動かないで。…とれた。綺麗な髪が傷ついたら大変だよな。」

「…ありがとう。でも、髪のことあんまり言わないでね。」

「そういえば、オレが髪のこと誉めたら泣きだしたもんな。意味分かんなかったし。」

「杉岡には分かんなくていい。」

私は走り出した。

「お礼なし？」

後ろで杉岡が図々しく言った。私は振り返る。

「ありがとうって言ったよ？」

「コンプレックスなんだな。その漆黒の髪。」

「みんな、私の髪しか見てくれないから。でも、みきやとか、未来ちゃんとか荒城は違うよ。」

「知らないんだ？吉井が黒髪フェチって。」

「え？」

「オレはそろそろ帰ろう。信じてんなら、本人に聞けばー？バイバイ。」

あんなやつ信じない。仮に黒髪フェチとしたら、私が黒髪じゃなかったら、好きにならなかったの？心がざわめく。

私は近くの公園に入り、しばらくベンチに座って動けないでいた。

「舞原チャンじゃん。一人で何してーんの？」

「荒城、あのさ、みきやって黒髪フェチなの？」

「あー。まぁ、なんつーの？ほら、舞原チャンは筋肉フェチだろ？」

「うん。」

「それと一瞬だよ。きっかけってやっぱ見た印象だし。な？だからーそんなしかめっ面すんなよ。眉間にシワ寄るぜー？」

私はやっと立ち上がった。

「違うよ！結局みんな私の髪しか見ないんじゃない！」

「…舞原チャン。」

荒城は、黙っていた。私は、コンプレックスの塊。荒城が自分の頭をわしゃわしゃかいた。

「あのさ、舞原チャン間違ってるよ。そんな綺麗な髪して、髪しか見ない？甘ったれんじゃねーよ。自分の長所けなしてどうすんの？全然可愛くねぇよお前。」

悔しい。悔しい。そんな事分かってるのに卑屈になってる。

「だから、荒城には分かんないよ！チャラい癖に知った様な事言わないで！ほっといて！」

「オレはずっと、幹也の影にいた。でもオレは自分のアリくらいの長所を必死に引き出して、頑張って未来を振り向かせたんだぜ。…舞原には分かんねぇよな。…オレ未来を迎えに行くわ。」

この日、荒城と初めてケンカした。そして、私は長い髪を切った。

「華！あれぇ！髪切った？」

みきやの家に行くと、勢い良く玄関が開いた。

「…変かな？」

「めっちゃ似合うぜ！可愛い、いや、大人っぽくなった。」

私、最低だ。彼氏を試すなんてあり得ないよね。

「俺、華のことちゃんと見てるから。ここのホクロの位置も、細部まで。」

「荒城から聞いた？」

ニヤリとみきやが笑った。

「もっと知りたい。」

「みき…や。」

「ストップストップ。玄関ではやめて下さい。」

「幹也くん、まだ新婚じゃないだろ？」

「舞原チャン似合うよ。」

雪ちゃん、光くん、荒城がとめた。たぶん、最初から見てたと思う。恥ずかしいな。荒城はいいヤツなんだなぁ。

「んでさ、舞原チャンこの世の終わりみたいな顔してたんだよ。」

「荒城クン？何をしゃべってんのかな？」

「まさか、華にコンプレックスがあるとはなー。」

「みきやは身長でしょ。」

「違うから。って流れで光とキヨと雪は、遊んできなさい。華、俺の楽園に行こうか。」

私たちはシラーっとした。楽園＝みきやの部屋らしいけど。

結局、5人で盛り上がり、みきやの部屋がごちゃごちゃ散らかって、片付けを手伝った。

「華、俺嬉しかった。」

「ん？」

「俺ばっか自分のコンプレックスで悩んでんのかと思ってたんだ。」

私達は、思春期だからまだまだ悩みもいっぱいある。でも、ちょっとずつ自分を好きになれるといいなと思った。

ここはオレ達の秘密基地。中坊なのにダサい？景色が綺麗な高台なんだよ。兄貴の邪魔でギクシャクしたけど、ようやく雪先輩と仲直りした。

「ポチ！マルボーロ持って来たよ。お座り！お手、お代わり…よし！」

「ワン！…ってオレ犬じゃないっすから。しかもやーっとマサって呼んでくれたのに！」

文句を言いながらもマルボーロをモグモグ食べるオレ。

「よしよし。マサは可愛いなぁ。」

「むぅ。オレも男なのにー。」

「マサが雪って呼んでくれたら、ちゅうしてあげる！」

こんな感じで、先輩に主導権を握られてる。オレだって、ちゅうも自分から出来るのに。樹先輩が雪先輩にちゅうしてるのを思い出した。ほっぺたにしたらしいけど、クソっ。

「マサ？グルルーって言ってるみたい！かーわいー！」

先輩はオレに抱きついた。嬉しい。

「かわいいのは雪だよ。あんまり無防備だと襲いますよ？」

「やだ！はーなーしーて！」

「雪から抱きついたじゃん。耳真っ赤ーかわいい。」

オレは、ちゅうした。まずは、耳に。そしてほっぺた。最後に、唇をペロっとなめた。

「雪からここにちゅうして？」

「もー生意気なんだから。」

雪との初めてのちゅうは、甘い味がした。お互いお菓子食べてたからだけど。

「オレ、雪と同じ高校行きたいな。」

「私、バカだからバカ高だよ。マサはお兄ちゃんと同じ高校に行けるくらいの頭持ってんだから、そっち行けるじゃん。ね？」

「嫌っす！オレ雪と同じとこ行くから。」

雪がオレの頭を撫でた。

「マサはふわふわだねー。きっと心がわりするよ。でも、マサは私のだよ。」

「なんか切ないっすね。きっと夕日のせいですよ。帰りましょう。」
「もう一度ちゅうしよ？」
雪はたまに甘えん坊だ。オレは少し長めのちゅうをした。
オレ達は手を繋ぎながら帰る。恋人繋ぎみたいに指は絡めない。なんか柄に合わないし。
「今度お兄ちゃんに紹介するね。」
「マジっすか！？緊張しますね。」
「マサも紹介してね？」
「…はい。」

兄貴なんか嫌いだ。でも雪が言うなら、仕方ない。
「じゃあ、明日！」
「はい。」
雪の家の前で軽くちゅうした。
「マサぁ！お前何をしてんだ！」
「お兄ちゃん落ち着いて！」

「ちゅうです。」

「マサも反発しないで！」

今のところ、幹也さんと仲良くなれないらしい。

図書室と立川凛

「クリーン出て来いやー！」

「マウスどついたるー！」

罵声が教室まで聞こえてくる。クリーンはキヨの清いからで、マウスは幹也のミッキーからマウスなわけだ。まぁ、キヨのヤンキー時代俺も何回か加勢したけど、キヨは首を横に降る。つまり、覚えがないらしい。

ボコボコにした覚えはあるが、一年以上前の話。２０人弱は校門にいる。先生が注意していた。

俺たちは、夏休みに呼び出しをくらった。図書委員の仕事サボっていたから、本の整理を教室で頼まれてた。その矢先、冒頭に戻る。

「幹也ーどうするよ。」

「校舎の中なら大丈夫じゃね？さっさと本整理して帰ろうぜ。」

図書室についた。思った以上に本が積みかさなってる。

「2時間はかかるな。」

「未来呼ぼっかな。」

「バカ。桜が俺らとつるんでたのバレてんだろ。」

「でも当時金パだったからバレないと思うぜー。」

「ったく。キヨはお気楽だな。」

俺は奥から直して、キヨは手前から直す事になった。

奥の本棚の下から足が見えた。まさか、ヤツらの…。

この明るい茶髪は確か3年の部長と同じクラスの…。金要求してきた立川先輩だ。

「あー。よく寝た。あれ？東の後輩だっけ。」

「はい。吉井です。今から本直したいので、ちょっとずれてもらえますか？」

「千円。」

「またっすかぁ？冗談やめて下さい。」

「真面目だって言うかもよ？」

図書室で寝てた上に、カツアゲとは自由すぎる！この人。

「みっきー、さっきから一人で何ブツブツ言ってんだよー。って凛先輩！」

「んー？お！キヨっち。」

「二人は知り合い？」

「凛先輩は野球部の部長だよ。そういえば図書委員長でしたね！」

立川先輩はもう一度床に寝転んだ。

「委員長だからここで見張ってんの。だからこっから先は立ち入り禁止区域。つまり有料。」

「みっきー頑張って！オレはあと3分の1くらいだもんねー。」

「キヨ助けろ！こんな自由人無理だから。」

キヨは戻り、自由人立川凛先輩は寝息をたてていた。

俺は奥に秘密でもあるのかと思った。

「ニャー。」

「ん？ニャーってさすがに寝息たてないよな。」

立川先輩の頬に子猫が頭をスリスリしてた。真っ白で綺麗な子猫だ。ってここ図書室だよな？この人図書委員長だよな。ダメじゃん！立川先輩がむくっと起きた。

「あー。ミルクの時間だっけ。ダリねみー。よしっちー自販のミルク買って来てー。」

千円札が紙飛行機と化して飛んできた。

「猫用じゃなくていいんスか？」

「じゃあそっちー。」

ニャーと猫も鳴いた。ったく。どうやったらあのいい加減な男になつくんだか。

ってオレ、目ぇつけられてんの忘れてた。校内の自販機のミルクを買った。

「買って来ました。」

図書室に入ると、キヨが猫と遊んでいた。

「お疲れ。釣りはいらねぇから。」

「いいっスよ。」

「みっきー貰っとけよ。」

「ありがとうございます。」

立川凛先輩はめちゃくちゃだ。カツアゲしたり釣りくれたり。図書室で猫飼ったり。

「つばきー。美味しいか？」

って、東先輩の彼女の名前つけてるし！人の彼女の名前つけんなよ。

「凛先輩って椿先輩が好きなんスね。凛先輩のがお似合いなのに。」

「キヨー！？」

「ははっ。違うよ。椿の花の下にいたからつばきにしただけー。」

明らかに嘘だと思った。能天気な顔が、少し揺れていたから。

「オレ暇だから手伝おっかなー。」

「マジっスか！」

俺は振り回されない様に黙々と仕事に取りかかった。

「よし。終わったー。」

3時間はかかった。ほとんど話してばっかだったけど。

「そういや、クリーンとマウスについて聞かれたよオレ。」

俺とキヨは固まってしまった。これじゃあバレバレだよ。

「だからオレ、クリーンは掃除する。綺麗にする。でマウスは鼠って答えたー。なぁつーばき。」

ニャーと素直に答える猫のつばき。

「そうなんスか？初めて聞きました。なぁ幹也？」

「あ、あぁ。頭いいスね。さすが図書部長！」

「何かあったらここに隠れろよ。この窓の鍵いつも開けてるからさ。」

その窓から先輩は出ていった。

「待てよ。ここ2階。」

「しかも真下は職員室。」

「今日の当番は、鬼の田鍋。」

「てことは。」

俺たちは窓の下を見た。立川先輩が先生に追いかけられていた。

ちょっと前までいいシーンだったのにな。しかも立川先輩のこと見直したのに。

「凛先輩はああでなきゃなー。」

「最後にはかっこつかないって事か？」

「そうそう。」

追いかけられる先輩を傍観しながら俺たちは勝手に先輩を分析していた。

「あ、東先輩が出てきた。」

「フォローしてるみたいじゃねー？お、鬼の田鍋が引いた。さすが空手部は違うねー。」

その後、立川先輩が東先輩に何か言ってふりきっていた。

「余計な事するなよ！とか？」

「勝手な真似すんなよ！じゃねぇの。」

「幹也一緒じゃん。まさか三角関係だとはね。」

「やっぱキヨも気づいてた？」

「オレは凛先輩を応援するから。」

俺は何も言わずに図書室を出た。

職員室の前に東先輩がいた。

「部長。」

「どうした。何でいるんだ？」

「図書委員で呼び出されたんです。」

「そうか。」

「あの！椿先輩とは上手くいってますよね。」

「…当たり前だろ。」

東先輩は笑ってなかった。なんとなくこれ以上関わるべきじゃないと思った。もし、キヨが東先輩と椿先輩を引き離すとしたら、見て見ぬフリはできない。

「幹也、これ以上凛先輩に傷ついて欲しくねぇから、オレの邪魔するな。」

後ろから、キヨの声がした。いつにない、低すぎる声。

「第三者が入る問題じゃねぇだろ？」

「関係ねぇよ。」

立川先輩とキヨの間に何らかの絆があるとか知らなかった。それは、光が俺に対するモノと似ている気がした。そう、兄弟みたいな絆。

立川凛先輩は、少し話しただけでも分かるくらい、つかみどころのない人だ。キヨはいったい何を企んでいるんだろうか。

今は、キヨと仲間割れしてる場合じゃねぇのに。これじゃあ、他校の奴らにどっちかが、ボコられるのも時間の問題だ。

「あーもう！なんなんだよ！」

教室で一人叫んでいた。

立川凛先輩に出会ってから俺たちのネジが少しずつずれ初めていた。

ミルクとパンチ

風がそよぐ。裏庭の木陰でオレは昼寝中。

「りーん！」

高く綺麗な声が響いた。

「…何かよう？」

「猫ちゃんに会いに来たー。名前決めた？」

「ないしょー。」

むくれる椿。自分は恋愛感情なんて生まれつきない人間だと思う。女を見てもドキドキした事ないし。

「あー！フードに猫ちゃん隠してるかわいい！」

ただ、椿といると心がぽわぽわ温まる。夏だから暑いし迷惑。

「ドントタッチミー。これ以上近づいたら有料ー。」

「はぁ。凛はいいよね。自分のペースを相手に巻き込む力があるもん。」

隣で体育座りをしてる椿。

「また、東と何かあったのか？」

オレは目をつぶりながら問いかけた。

「なんもないよ。なぁんもな・い・のー！」

耳をふさぐ。猫のつばきが目を覚ました。震えてるし。起き上がり、猫のつばきを抱き上げた。

「うるせー。東探してんじゃねー？なんもないなら平和じゃん。」

「凛にもなさそうだよね。せーよく。」

思わず猫を落としそうになる。

「性欲なんて男の前で言うな！オレだから良いけど、他の奴なら襲われるぞ。マジでアホちゃうか。」

「凛が早口になった！簡単に襲われるわけないじゃん。私の悲鳴なめんなよ？」

「椿！こんなとこいたのか。人気の無いところに来るなってあれほど言ってんだろ。」

東のとうじょー。やっとゆっくり眠れる。心がチクッとしたのは、気のせいに決まってる。

「立川！吉井に何かいっただろ？」

「なんで幹也くん？」

「よしっちー？図書委員の仲なだけだけどー？」

「語尾を伸ばすな！ニャーニャーうるさい！」

猫のつばきは東が嫌いらしい。東も猫にあたるなよなー。仕方なくオレはまた起き上がった。

「性欲ないってマジ？ヤバいんじゃねー？」

「せっ、せっよくー！？」

「声がデカいカップルだなー。つばき。」

「ニャー。」

「つばきって…なんで私の名前？」

バレたぁ！

「椿の花の下にいたからだよ！」

「そんなことはどうでもいい！オレには食欲、睡眠欲、性欲がちゃんと備わってる。椿どういう事だ？」

「どうどう。分かったから二人とも落ち着いて！」

東は猫がいる事に関して怒らなかった。撫でようとして咬まれてたけど。

「なーんで、オレがケンカの仲裁しないといけないかなー。」

「凛、仲裁どころか悪化させてんじゃん！」
「椿帰るぞ。すまないな、いつも椿が甘えて。」
「ねぇ。もし、オレが椿好きならさー。とっくにとられてるんじゃねー？」
「…どういう」
「りゅーう行くよ！猫ちゃんバイバーイ。」
壊してやる。
「ヤベー。今変な事考えた。」
オレは猫に癒されながら目を閉じた。
よしっちかー。相当東の中で鍵になる人物だなー。ちょっと遊んであげるか。オレは思わず口元が緩んだ。
うわ。またつけられてる。5人ってところか。アクション映画好きだけど。
「あのー。かなり迷惑なんすよね。」

「マウスはハウス。なんちってなー！」

「ブッハハハ！」

くそ。イラッとするバカ笑い。コイツら男子校だからたまってんじゃねーの。

「早く来たら？」

オレは人差し指で挑発する。なるだけ被害の出ない場所まで走った。

「もっと人目につく場所がいいんだけど！なぁ？」

「だよなー！マウスをボコるの見せたいし。」

コイツら目がヤバい。ったく。いったい何が原因だよ。

「オレたち強くなったんだぜ！」

近くの壁を殴った。ビキッとヒビが入る。

「お前、器物損害って知らねぇの？早くヤレよ。俺と戦うの怖いんじゃねーの？」

「うるせえ！」

それが合図かのように、5人いっせいに飛びかかってきた。

ドカッ！ボカッ！ベキ！ボキッ！ドスッ！ガッ！

ジャスト5秒。あとは。

「ここに人が倒れてるぞー！」

「キミ顔が腫れてるけど大丈夫か？」

「…大丈夫っす。」

通りかかったお兄さんに言われた通り、イッパツくらった。ったく。なんでいつも顔ばっか？ちなみにヤツラは気絶させただけだ。

手加減してやったのに。顔めっちゃジンジンすんだけど！チクショー。バカ野郎。よけれなかった俺もまだまだだな。

キヨなら『みっきーだっせ！また顔よけれなかったのかよ！』って言ったよなー。

「幹也だっせ！」

「キヨ何してんの？」

「あれは避けられただろー。」

「このやろー。助けろよ。」

「みっきーなら大丈夫だと思ったんだよ。その顔ヤバいね。ウケる。」

立川先輩のことに関してはまだ分からないけど、キヨがいてくれて良かった。

「凛先輩はさ、自分の気持ちに気づいてねぇんだよ。」

「いきなり？」

「だから、そっとしておく事にした。何か悪かった。」

「早とちりかよ。ま、キヨらしいけどな。ゲーセンでも行こうぜ！」

キヨの話によると、あの刺客…いや、ヤツラは中坊ん時、負けたのが悔しくて俺たちに勝ちたいらしい。かなりの暇人だよな。

「その為に学校まで来るか普通。」

「だから、みっきーは愛されてんじゃん。」

「あんな連中に愛されたくねぇから！」

カクゲーの必殺技をキヨに炸裂。ボタン連打連打連打…。

「ちょお待てよー！あーまた負けた。」

「へっ！顔のうらみだよ。」

「はいー？自分が悪いのに俺っちのせいかよ！」

「勝負だ。」

俺たちは小銭を使いまくったのだった。

ニャー、ニャン。猫の声で目が覚めた。腕時計を見ると5時を回っていた。

「つばき起こしてくれたんだなー。よしよし。」

頭を撫でてやるとくすぐったそうな顔をした。

「んー！よく寝たー。」

携帯が震えている。ダリー。

「はいー？」

《…やっと出たな。》

「なーんだ東か。」

《今学校か？》

「さすが竜ちゃん。オレ寝過ごしちったよ。」

《凛は、やはり好きだったのか。》

あんまり言わないけどオレたちは従兄弟だったりする。二人の時は竜ちゃんと凛って呼びあう。学校じゃいろいろと、面倒だから苗字ってわけ。

「んー。猫大好きだよ。知ってるだろー？」

《違う。椿をだ。》

「んー？好きって何？友達としてもウザいだけじゃん女なんて。ってか今はさー、竜ちゃんがウザいよ？ばいばい。」

なんでこんなイラつくんだろ。カルシウム不足かなー。つばきにばっかミルクあげないで、オレも飲もう。

みんな好き好きうるさい。好きになるくらいなら、嫌った方が楽だろ。オレはまだ猫といた方が楽なんだ。

竜ちゃんには分かんないかもな。

竜ＶＳ凛 〔本気の想い〕

朝練があと少しで終わろうとしていた時だった。

「たーのもー。」

俺達空手部は掛け声や、何人ものドスッという足音でその声には気づかない。

「たー！のー！もー！」

シンと道場が静まった。入り口を見ると立川先輩が真っ赤な顔をして珍しく叫んでいた。

「練習中に何の用だ？」

東先輩が立川先輩の元に行くとみんなまた練習を始めた。

「だから、東に勝負しかけに来たー。」

「何だ。」

「野球対決しよう？ハンデは俺が左で投げるから、それを一回でも打ち取れば東の勝ちー。」

「…遊んでる暇はない。」

「オレが勝ったら、野球部に、よしっち欲しい。」

俺はたまたま、聞いてしまった。俺、売り飛ばされる！東先輩のほっとした顔何？椿先輩じゃなくて良かった的な顔だよな絶対に。

「良いだろう。凛はもう空手はやらないんだな。」

「なんのことー？じゃ、部活終わったら校庭に集合ー。よしっちも連れてくるんだよー？」

「あぁ。分かった。俺も左でバッド握るから。」

「東は両効きだろー？ま、いーけど。」

そして、立川先輩はいなくなった。

部活が終わり、東先輩に呼ばれた。俺、内容分かってますけど。立川先輩何がしたいんだろう。いくらなんでも謎が多すぎる。

「後、一分遅かったらオレ昼寝してたかもー。」

「まだ朝っすよ先輩。」

「さっさと始めよう。」

って、あの握り方は変化球有り！？

「もし、オレが勝ったら、空手部と掛け持ちしないか？」

「いーよ？あり得ないからー。」

「あの！もし東先輩が十球全部外したら俺にもチャンス下さい！」

「ありー？オレ十球なんて言ってないけどー？それなら、よしっちにもチャンスあげる。」

東先輩が『あちゃー』と頭を抱えていた。

ズバッ。

「ストライーク！」

魔球？消えたよな。マジックか？速すぎて見えねぇ！

「なるほど。ストレートで来るとはナメられたもんだな！」

「最初だから、東が好きな球投げてあげただけー。東こそ今からは、観察する暇ないかもよ？」

立川先輩がギュッとボールを握る。キャッチャーの先輩に１・２回

首を横にふった。そしてゆっくりうなずく。
ビュン。ズバッ。
カキン。
「ファーボール。」

それから、先輩たちは静かに睨み合った。俺争奪戦とか、立川先輩の空手部助っ人とか、もう関係無いんだ。二人はもう目の前の勝負しか見えてない。

いきなり目が塞がれた。

「だーれだ？」

「華？」

「あったりー！」

朝練を見に来てくれてた華が、マネの仕事の手伝いが終わったらしい。自分から手伝うなんてえらいよな。

「先輩たち凄い気迫だね。東先輩は空手の試合の時と一緒だよね。」

「だよな。何かかっこいい。」

「あはっ！どうしたのかっこいいなんて言って。」

さりげなく華が手を繋いできた。俺は分からない様に、制服のポケットに入れた。

「あっ！打ったー！」

風にあおられてまたファール。

「おしいな。あと2救でヒットしなかったら、俺の番だ。」

「みきや大丈夫なの？」

「おい！どういう意味かなー華ちゃん。やる時はやる男だぜ？」

「そうだったっけ？頑張ってね。」

華の笑顔が、俺を元気づけてくれる。

カキーンといい音がした。ボールがフェンスを超えた。

「これで掛け持ち決定だな凛。」

「竜ちゃんにはかなわないよなぁ。」

「お二人ともなんか、仲良くないっすか？」

「従兄弟なんだよ。」

この正反対な二人が従兄弟だなんて。って事は従兄弟がライバル？

「みきや？」

「ショックを受けたようだな。凛、たまには家来るか？」

「負けたからちょっと練習して帰ろー。夜に行くかもー。」

「相変わらず野球熱心だな。じゃあ、オレは先に帰る。キミには吉井の事頼んだ。」

「はい。」

俺の頭の中はグルグルうずめいていた。従兄弟の三角関係。従兄弟の三角関係。従兄弟の三角…エンドレス。

「みーきーや！」

「はっ！起きたまま寝てた。」

「あはは。何それー！」

俺たちは手を繋いで家路を歩いた。

俺の部屋で、華と宿題中。

「作文書いた？」

「読書感想文だよね。私まだ本も選んでないよー。」

「読書感想文だとー？俺だけか？『青春について』は。」

華にプリントを見せた。

「ぷっ。有野先生の仕業だねー。一番下に小さく何か書いてあるよ。」

【なワケねーだろ。てなわけで読書感想文書け。】

「なんだぁ？このちっこい字！」

「あははっ！みきやしか引っかからないよー。あー笑い過ぎてお腹痛い。ははっ！」

しばらく華は爆笑していた。俺にだけこのプリント渡すなんて、手の込んだイタズラにもほどがある。

「はなー？いい加減にしないとキスするよ？」

ピタッと華の笑いがとまり、頬を赤く染めた。

「して？」

俺は鼻に軽くキスした。

「ちゃんとここにして？」

「ワガママな姫は好きだぜ？」

唇に吸い付く様なキスをした。そして深く深ーく絡める。荒い息の彼女が可愛くて強く抱きしめた。

「はぁっ。今日は光くんは？」

「それ聞くか？花音さんと会ってるらしい。」

「上手くいくといいね。」

「顔見せろ。」

俺は少し離れて、華とデコをくっつけて目を見た。少しうるんでいる。

「嘘だな。俺が協力したら不安だろ？」

「…うん。心狭くてゴメン。」

「バーカ。俺よりかなり広いから気にすんな。あと、協力っつっても会うとかしてねぇよ。」

俺は頬にキスした。

「分かってる。みきやのこと好きすぎて不安なのかも。ぎゅってして？」

俺はそっと抱きしめた。華奢でふわふわで、柑橘系の甘酸っぱい香りが鼻をかすめる。

「華とずっとこうしてたいなぁ。」

「私も。でもあとちょっとで宿題しよう。」

「はいはい。現実的だな。」

体がくっつけばくっつくほど、もっともっとって俺の欲望が邪魔をする。

「みきや？手ー止まってるよ。」

「また目ぇ開けたまま寝てた。」

「今度寝たらお仕置きだよー！」

華にならお仕置きされたいなんて、バカな事思うんだ。華が俺を好きすぎるんなら、俺は華を愛してる。それが、口では言えない本気の想い。

マサの暴走

「もう会うの止めよう。」

花音の飲むフルーツティーの香りが漂う。彼女のカップを置く手が、カタカタとかすかに震えていた。

「僕と会うと幹也くんを思い出すから？」

「私達受験生だし、時期が来たんだよ。だから…。」

「そんな話しに来たの？僕帰る。」

3歳も年上の貴方は、僕より余裕がない感じがした。

「待ってよ…光。ちゃんと話を聞いて？」

「その目反則だよ。」

僕はもう一度座った。肩まであるストレートの黒髪。人形の様に整った顔。無表情の時、ミステリアスな魅力がある。そんな彼女の声は震えていた。

「私…。私、光と会うと何か怖いの。」

「どういう意味？よく分からないんだけど。」

「どんどん大人になって男っぽくなる光に、今までと違う感情を感じそうだから。」

目をふせて彼女は言う。長いマツゲが強調された。

「僕に惚れそう？」

「分からない。何かおかしいよね。だから、しばらく会わない方がいいでしょう？」

「僕は好きだよ。僕も最近気づいた。花音の魅力に。」

「年上をからかわないの。」

「花音が僕と会いたくないなら、その通りにするよ。後悔しても知らないよ？」

恋は駆け引きだ。

コンコンッ

家に帰ったら寝てたみたいだ。窓からの音で目が覚めた。

「幹也くん！？」

口パクで『ハヤクアケロ』と言っている。ガラッと窓を開けた。

「よっ！」

「よっ！じゃないでしょ。幹也くんが窓から来るなんて、珍しいね。」

「ちょっ、この窓高くねぇか？」

「幹也くんの足が短いんだよ。」

「ほっ」とか部屋に言って入って来た。着地失敗してるし。

「いってぇー。頭打った。」

「反射神経良いはずなのにね。わざとでしょ？」

「イエス。俺がまさか？転ぶなんて？有り得ねぇもんナ！」

「動揺しすぎ。」

幹也くんが僕のベッドに転がった。
「んでーどうだった？」
「しばらく会えないって言われた。」
「ぶっ！雪もマサに会わないらしいぜ。何か図書館で樹に見せつける上に、勉強の邪魔とかで。」
「言っておくけど、僕はマサとは違うからね。大人の駆け引きなの。」
「そのへんがガキだな。つかこの部屋寒っ。冷房つけすぎだろ。」
僕は冷房をきった。文句言ってるけど、幹也くんに話すと気が楽になる。
「幹也くんは華さんと上手くいってんの？」
「俺の部屋でラッブラブだぜ？良いだろ。」
「ベッドの上で泳がないでよ。ラッブラブってことはヤッたんだ？」
幹也くんのバタ足がピタッと止まる。これはまだだな。本命には手を出せないってこの事だね。口元が緩む。僕って絶対サドだね。
「ヤッ…てねぇけど何か？」
「睨まないでよ。あんまり幸せボケしてたら、危ないよ？」

「余計なお世話だ。俺寝よ。オヤスミ。」

いつも僕のベッド独占するんだから。僕は勉強に取りかかった。

今日も図書館に向かう。集中できるから。樹くんがいるけどお互い気にしない。ただ、一番マサが気にしてるの。

「ゆーきー！」

後ろからマサが抱きついてきた。昨日しばらく会わないって言ったのに、昨日の今日だよ？オアズケできないんだから。

「マサ離れて？ここ図書館だよ。」

「オレが邪魔なのは、樹先輩に会いたいからだろ？」

「ンもう。違うよ。」

樹が男子トイレに私を引っ張った。

「な…にしてんの？」カチャカチャと響くベルトの音。

「オレが好きなら態度で見せて？」

「やだよ。こんなのマサじゃない！」

「これがオレなの！仔犬とか、ポチとかじゃないんだよ。」

なんか涙が出そう。分かってた。ちゃんと男の子って。私はマサをギュッと抱きしめた。

「不安にしてごめんね。ちゃんと男の子って分かってるよ？」

「オレ、樹先輩みたいに男らしくねーし、ずっと犬扱いみたいで苦しかった。」

私たちは男子トイレで泣いた。司書さんに怒られたけど、本音が聞けて良かった。

「そう。マサ一発殴らないとね。」

「何で？」

光ちゃんには話した。お兄ちゃんにはとても話せない内容だし。間違いなく、マサがボッコボコにされる。

「雪がこんな話するってことは何かあるんでしょ？」

光ちゃんが冷たいピーチティーを渡してくれた。

「うん。私は心が繋がっていればそれで十分なの。男の子って体も繋がりたいのかな？」

「どうだろうね？僕は理性があるからガマンが効くけど、マサはまだまだイヌだからね。」

「犬…って、光ちゃん今真剣に話してんのに。」

「少なくとも、マサは好きでもない女を抱くほど軽くないだろ。」

「私軽いとは言ってないよ。」

「でも、マサのことまだ僕より知らないだろ？」

「…知ってるもん。」

「それは失礼しました。僕勉強したいんだ。」

光ちゃんの部屋を出た。最近勉強ばかりしている。受験だから当たり前だけど、なんかあったっぽい。僕のことは聞くなオーラを出していたから、聞けなかった。誰にでも言いたくないことはあるからね。光ちゃんは、私みたいに人に話してスッとする人じゃない。

花火したいな。ふと、来週の花火大会を思い出した。マサを誘おうかな。なんて思った。

知らない番号から電話がかかって来た。誰か携帯変えたのかも。

「はい。」

《だーれだー？》

この、のんびり脱力系ボイスはあの人しかいない。

「立川先輩っスか？」

《ぴんぽーん。じゃあ登録よろしくー。》

ぶ・ちっ。とゆっくりきれた。何で立川先輩が俺の携帯知ってんだろ。しかも、今の電話意味あんのか？

これが、立川先輩にもらった最初の電話だった。

オレは、よしっちに電話をかけた。キヨっちに聞いたらあっさり教えてくれた。

「さーてと。何からしようかなー。」

つばきが心配そうにオレの手をなめた。

「久しぶりに遊ぶかー。」

空に呟いた。

ゲームスタート

立川先輩を睨む華。立川先輩は余裕で鼻歌を歌う。

「みきやにはそんな趣味ありません！」

「誰も恋愛感情って言ってないでしょー？コケシちゃーん。」

何でこうなってしまったと言うと、数分前にさかのぼる。

俺は部活が終わり、華と『さあ帰ろう』としていた。

「みっきー。一緒に帰ろうぜ？」

キヨが走って来たところまではいつもと同じだった。

「オレもー。」

「立川先輩！？何でいるんスか？」

「よしっちの事気に入ったんだよねー。」

俺を隠すように華が先輩の前に立ちはだかった。

「それはそのままの意味ですか？」

「んー？誰このコケシ。」

「凛先輩…。コケシじゃないっすよ。舞原チャンは幹也の彼女です。」

「じゃあ、ライバルだなー。」

普通に言いはなった一言に俺たちはフリーズした。

そして、一番先に我に帰った華が冒頭の言葉を言った。

「夏にパーカー来てる人にコケシなんて言われたくないデス。」

「フードにお菓子とか入るから便利なんだよ？コケシちゃーん。」

この奇妙な言い争いは何だ？キヨなんか先に歩いてる。俺とめるべきだよな。ってか、すっげぇ仲良しのカップルっぽく見えて来た。ヤベー。変なヤキモチやいてるよ俺。

「ぜっったい！だーめーでーす！」

「コケシちゃんには言ってないでしょー？よしっち今日1日付き合ってー？」

「パー先輩はみきやの何なんですか！？」

「華。パーは言い過ぎだから。先輩も、華は最近髪切ったばかりなんであんまり言わないで下さいよ。」

「コケシちゃんって言わないかわりに、オレに付き合え。」

この凄まじい迫力！脱力系が迫力系になってる。

「あー。1日くらいいいっすよ。」

「私とのデートは？」

「彼女の事悪く思われたくねぇだろ？」

「みき…や。」

「はいはーい。よしっち行こうか。バイバーイ、コケシちゃん。」

「引っ張らないでくださいよ！しかも最初っからコケシ言ってるし！」

こうして立川先輩に強引に引っ張っていかれた。

電車を乗り継いで、都心に着いた。

「先輩どこまで行くんすか？」

「どこだろうねー？」

高層ビルが並ぶ場所までズンズン進んで行く立川先輩。

一番高いビルの前で止まる。そして入って行った。

「え…マジ？」

俺着いてっていいのかよ。と不安になった。急いで先輩を追った。

「おかえりなさいませ。凛お坊っちゃま。」

受付嬢が頭を下げた。立川先輩が静かに近づく。

「誰が言わせた？お袋か？オレが来てもスルーしろって言ってるだろ！」

「申し訳ありませんでした。」

「今度お坊っちゃまなんてフザケたら、ク・ビだ。」

あの立川先輩が、社長の息子！？いや、最近ドラマとかの見すぎだ。こんな夢みるなんて。

「よしっち行こーか。」

エレベーターに乗る。オッサンたちが頭を下げた。これが縦社会。…実感した。

「驚いたー？これが俺に友達ができない理由。」

「うらやましいですよ！すっげぇ！」

そして凛先輩は屋上に連れて行ってくれた。

「吉井みたいな反応初めてだ。ほとんど怖じけづいて、急に敬語使うヤツもいるんだぜ？」

「あちー！暑くないっすか？俺そういう計算とかしませんから。」

「オレさー。暑さ感じないんだよねー。」

「え？」

隣を見ると涼しげな顔をしていた。

「ウッソー。引っかかったー？」

立川先輩はフェンス越しに町を眺めている。俺は日陰に立っていた。

「この景色を見てどう思うー？」

「全部ちっこいなって思います。」

「ぶっ！ハハッ。オレなら考えない答えだなー。大抵、綺麗か、飛びたいって思うだろー？」

「俺には分かりません。飛びたいって何すか？」

「その瞬間、鳥になるんだよ。」

俺は先輩が空を見上げる姿が、あまりにも絵になって切なくなった。

「よーっし！美味しいレストランあるんだけど行こーか？」

「高くないんすか？」

「今日だけは奢るよ。」

その笑顔が今にも崩れそうで怖かった。

フランスレストランのマナーなんてさっぱりで、恥ずかしかったけど、先輩はゆっくり教えてくれた。

「ダメだよー。女の子連れて来た時恥じかくから教えてあげよう。」

裏庭で昼寝するような人が英才教育を受けてたなんて、人は見かけによらない。

「よしっちなら、信じられる気がする。友達になってよ。」

「先輩は先輩じゃないっすか。」

「まー、今のところはねー。」

正直、先輩がセレブだって事を教えてくれて嬉しいのもある。

でも、なんか嫌な予感がしてたまらない。こういう勘は意外と当たるんだ。立川凛先輩には要注意だ。

「オセロって知ってるー？両側を挟んだら反対の色に変わるゲーム。」

電車で立川先輩が急に言い出した。

「知ってますけど。」

「人も同じでねー。すぐに、正反対に変われるんだよー。君のオレへの疑いもすぐに、変えちゃうから。ねー？」

「立川先輩とまだ付き合いは薄いじゃないっすか。これからですよ。」

「オッケー。ゲームスタートだねー。」

この人は、人との付き合いをゲームとしてしか考えられないんだ。あんなに尊敬していたキヨは、気づいてるはずだ。確か、立川先輩に傷つかないで欲しいってキヨは言っていた。

「ゲームでも何でも受けてたちますよ！」

俺は負けない。先輩に人のつながりの良さを気づいて欲しいから。

そして、立川先輩はうっすらと笑った。

道端でキス

トン…カタンカタンカタン。

「で、幹也くんオセロ全然知らないのに、勝負するんだ？」

「いつの間に白に染まった！」

「幹也くんルール聞いてた？」

実際にはオセロで勝負ってワケじゃないけど、立川先輩のゲームのヒントが分かるかも知れない。けど、何でひっくり返すんだ？

「だからー、僕のこの白を黒で挟むと色が…間にある白が黒に変わるの。」

「ひどいルールだな。」

「ただのゲームなのに、さっきから真剣に考えすぎだよ。しかめっ面してさ、何かあるだろ？」

鋭い。それにしても俺をひっくり返すって、逆立ちにさせる気か？

「なぁ。人をひっくり返すって何だと思う？」

「それは、幹也くんが想像してる逆立ちとかじゃないだろうね。」

「逆立ちなんて考えねぇし。ただのバカじゃん。」

光はカドをとった。ほぼ白に染まった。

「うん。そうだね。どっちかっていうと、僕なら土下座させるかな。」

「意味分かんねぇよ。つーか、光に聞いた俺がバカだったし。」

「今のままじゃ、このゲームには勝てないよ。じっくり教えてあげよう。」

「勉強詰め込みすぎて、おかしくなったか？」

「僕のこつその1…。」

「最初からズルかよ！」

「はぁーあ。正々堂々勝負するバカは、幹也くんくらいだよ。」

確かに、隠し技とかって意味相手にはできないから、ある意味じゃズルかもな。

その日俺たちはオセロで徹夜した。仕事で忙しい光のおばさんが、お菓子とか持って来てくれて、光も嬉しそうだった。おばさんも仕事があって徹夜だったらしかった。

「幹也くん絶対勝ってよ。勝たなかったら罰ゲームね。」

「勝つよ。つか、まだ何するかよく分かんねぇけど。」

「はいー？それじゃあオセロは何だったんだよ。」

「シミュレーション？」

3秒後、光にヘッドロックかけられたのは言うまでもなかった。

ヤベー。寝てた。しかも光んちだし。今何時？

「お兄ちゃん！部屋に華さんと不審な男が待ってるよ。」

「はぁ！？何で不審な男を入れんだよ！」

俺は慌てて俺んちに戻った。バタバタと部屋に行くと…。

「何で立川先輩までいるんですか！？」

「みきや聞いてよ！パー先輩脅してくるんだよ！」

「よしっち遅いー。」

何だこの図は。

「俺の部屋でくっつくな！華ー？何触らせてんのかな？」

「みきや違うの！良く見て！腕で首しめられてるだけだから！」

「そうそう。このチビちゃん目の前で、チョロチョロ目障りだからさー。」

どう見ても、誰が見ても…。

「お似合いカップルだね。」

「光ー。お前がいつ来たかは、この際どうでもいいや。それ言わないでな？」

ここは、先輩だとか関係ねぇ。

「離して下さい。俺の彼女に触るな。」

俺は立川先輩の腕を掴んだ。すると立川先輩はニッコリと笑った。

「どうしようかなー？飽きてきたしーもういいやー。」

「あなた幹也くんの何なんですか？幹也くんをいじっていいのは、この僕だけでいいんです。」

「なんでー？オレ気に入ったんだもーん。君に関係無いよねー。」

つかこの部屋むさ苦しい。華がいるからまだ良いけど、良くないだろ。女の子一人は良くないだろ。

「みきや、さっき嬉しかった。ありがとう。」

「俺につかまっとけ。」

「うん。」

腕にしがみつく華。立川先輩と光の言い争いとかどうでもいいや。俺、今幸せ。

「ちょっと、幹也くんこんな人家に入れないでよ！」

「君の家じゃないよねー？生意気なガーキーが！」

「ガキ？あぁ。あなた自身の事ですね。」

光の目がすわってる。こりゃキレたな。

「はいはい。二人とも、犬猿の仲なのは分かったから。」

「今日は私が優先なんで、パー先輩は帰って下さい！」

俺二股してるみてぇじゃん。華と立川先輩？立川先輩男だろが！

「じゃあ、夜あいてるよねー？」

「夜は僕と予定があります！」

「みきや…光くんと夜何してるの？」

「ゲームだよ。ちょっ、光！変な言い方するな！」

『幹也はある意味男にモテる』というキヨの迷言が頭によぎる。

「俺は華だけだ！行くぞ。」

華の手を引いて部屋を出た。

「手…痛い。」

「ごめっ。」

離そうとすると、キュッと華が手を握った。小さくて柔らかい指が気持ちい。

「ゆっくり歩こう？」

「何かバタバタして悪いな。」

「ううん。何かスリルがあって楽しい！映画みたい！」

髪を切って雰囲気が変わった華は、可愛かった笑顔が綺麗になった気がする。さっき、立川先輩が華を後ろから抱きしめてるように見えてめちゃくちゃやけた。

「わっ！みきやどうしたの？」

「あんま、ヤキモチ妬かせんな。」

俺は、道端で抱きしめた。人が通り過ぎたけど、ガキが冷やかしたけど今は気にならない。少し前まで、人前じゃ無理だとか思ってたけど関係ない。

きゅうっと俺に抱きつく華。

「私も、最近かまってもらえなかったから、寂しかった。」

「ん。キスしてぇなー。」

「もう。ちゃんと聞いてた？」

俺は華の耳たぶにそっとキスした。

「聞いてたよ。」

しばらく華は固まっていて、俺は思わず笑った。

髪が短くても長くても、寂しがりやでも照れ屋でも、そんなキミが好き。好きすぎて、もっと触れていたい。

「よしっち遅いなー。」

「何で僕の家に、地球外生命体がいるの。」

「ふーんふん。」

「ニャン。」

僕は猫が苦手だ。別に引っ掻かれたからとかじゃないよ?まぁ、それは2割だけどね。

「ちょっと近づけないでよ!うーわー!」

「肉きゅうパンチー。」

鼻にふにゅっとした感覚。ナニコレ…気持ち…。うわっ。爪がはえてる。

「どけろ！幹也くんが帰るまで静かにしててよ！」

地球外生命体は、やはり怖かった。

親父のマリオネット

マンションに帰ると、部屋の鍵が空いていた。玄関には赤いハイヒール。

「鈴姉、また合鍵作ったのかよー。こないだ取り上げたばっかなのにー。」

タイトのスーツに身をつつむ姉は、足を組み換え冷たく笑った。

「あの女から貰ったパーカーなんてまだ来てるの？汚らわしいわね。鍵なんていくらでも作れるわ。」

「…自分の母親をあの女って言うなよ。姉さんこそシェリーさんに魂売ったんだな。」

「ビジネスよ。それより、パパから伝言貰ったの。『来週の日曜ロスに行く。学校の手続きはすませた。』だって。時間は１９時らしいわよ。」

「また黙って決めたのか？オレに相談しないなんて、絶対行かないからな！」

「日本に残っても、一人で学費に困るだけよ？まぁ、私は面倒だから伝達しに来ただけ。お小遣いあげるわ。じゃあね。」

姉さんは分厚い封筒を投げた。家族といるより、金を握った方が安心する。

愛ってなんだろう。恋ってどんな気持ち？愛される気持ちが分かんないのに、人を愛せるワケない。すぐに親父に電話しないのも、機械的な声が嫌いで話したくもない。

「おい、凛？何度インターホン押しても出ないと思ったら、具合でも悪いのか？顔色が悪い。」

「…竜ちゃん。オレどうしよー。」

「またおじさんか？」

「ロス行かないと行けない。」

竜ちゃんはオレの肩をガシッと掴んだ。

「また言うこと聞くのか？二の舞になるぞ！このままでは、凛にもおじさんにも良くないだろう？」

「ははっ。竜ちゃんは熱いなー。肩をそんなに揺らさないでよー。心も揺らぐだろー？まじ勘弁して。」

「…すまない。」

竜ちゃんは隣にドサッと座った。逆らうなんて、できない。今までもこれからも、親父は絶対だ。でも今の生活が割と気に入っているんだ。

「椿が好きなんだろ？」

「分かんない。好きなんて感情オレにはない。しかも、自分の彼女が好きとか聞くー？」

「オレには分かる。凛は椿に恋してるんだよ。だから、凛がオレの彼女好きでもいいから、行くなよ。反発しろよ？」

竜ちゃんの目がうるんだ。空手一筋で、生真面目な竜ちゃんがこんなに言うことはきっとこの先もない。

「竜ちゃんありがとー。ロス行きは少し考えさして。分かってるだろー？オレんちの事情。決めたら、竜ちゃんに最初に言うから。」

「凛が久しぶりに泣いたな。良かった。」

「泣いてないだろー？竜ちゃんが泣いてんじゃん。」

思ったより、ずっと一人だと思ってた。でも竜ちゃんはオレをちゃんと見守っててくれたんだ。

「今日お寿司取るよー。」

「特盛りよろしくな。」

「竜ちゃんお寿司には厳しいからねー。あー、つばきに餌やりに行かないと！」

「椿に餌だとー！？いつの間に密会していた！？」

竜ちゃんのカカトオトシが舞い降りた。

「だからー、猫のつばきだからー！」

「嘘だっ！」

ヤキモチ妬きな竜ちゃんが『椿を好きでいていい』って言ったのは、幻に感じた。

「避けるな！男なら受け止めろ！」

「無理だからー！」

竜ちゃんの馬鹿力に付き合ってられない。早く寿司を取ろう。

寿司を見て、落ち着いた俺たちだった。

「鈴さんにまた小遣い貰ったのか？」

「いいでしょー？3割あげようかー？」

「いらない。寿司で十分だ。」

珍しく竜ちゃんはオレの家に泊まった。きっと心配してくれたんだろう。

よしっちとのゲーム楽しみだな。

オレはゲームの勝敗でロス行きを決める事にした。

「ックシューン！」

「オッサンがいる。僕が今、裏技を教えてるでしょ！」

「囲碁は陣地争いで、囲んだら取って？全然分かんねーよ！頭イテー！」

今夜は、光の囲碁教室だ。あれ？漫画のパクリ？違う。たーまたま光が囲碁やってるだけだ。

「幹也くんチェスできる？」

「でっ。」

「で？」

「どーせできませんよ！」

「それじゃあ。頭脳とか心理作戦とかヤバいね。」

やれやれと、わざとらしく肘を曲げ両手をあげる光。

「何だよ！俺はカクゲーが強いからいいんだよ！」

「それって、僕にケンカ売ってるよね？」

「俺は数学得意だから大丈夫だよ。」

「だから、幹也くんは現国とか苦手なんだよ。人の裏をかくとか考えたことないでしょ？」

そりゃあ、簡潔な方が良いしな。面倒くさがりだし。

「今日はここまで。はい！幹也くんは自分ちに帰る！」

その日家に帰ると、『明日からゲーム開始』とメールが来ていた。
もちろん立川凛先輩からだ。

頭の回転の速さには自信ねぇけど、俺にも良いところはあるはず。
なぜかワクワクしながら目を閉じた。

勝負の日

学校の近くの空き地に呼ばれた。今日は雨模様。今にも雨が降りそうだ。

「フェアな方が良いだろーから、コレでどー？」

凛先輩が俺に何かを投げた。

「竹刀？」

「竹刀を落とした方が負け。俺も武術は空手だけだから平等だろー？」

構えが違う。絶対かじってるよ先輩！

「分かりました。ゲームはこれだけですか？」

「まさかー！二つ目はよしっちが決めてー？いっくよー！」

「ちょっ！」

バシッ…バシッと一刀一刀が重い。下手に受けたら払い飛ばされそうだ。かわしてから、様子を見る事にした。

「コテコテー！」

「うわっ！手痛いんすけど！」

俺は一瞬支えの左手を持ち変えた。

「とりゃー！」

「おーっと！やっとやる気になったねー。」

「負けんの嫌いすから！」

雨がポツリと降って、すぐにザーと降りだした。それでも俺たちはやめなかった。空手以外でこんなにワクワクしたの初めてだ。

雨で前が見えない。

「目をつぶったら終わりだよー？」

パシンと俺の竹刀が宙に跳ねた。地面ギリギリでとった。スライディングみたいなもんだから、洋服は泥だらけだ。

「へー。よしっちは何でそんなに必死なのー？」

俺はゆっくり立ち上がる。

「知りたいんすよ！先輩がゲームするホントの理由を！」

「そうだなー。オレに勝たないと教えないよー？それに…。」

雨の音で最後が聞き取れない。

「これで、終わりです！」

手が滑る中、思いきり一刀ふりかざした。先輩は動かない。そのまま先輩の竹刀が地面に落ちた。

「立川先輩？」

「正直に生きれて、良いよなー。オレなんか、一生操り人形だよー。」

立川先輩は膝をついてしゃがみこんだ。雨のせいで、先輩の全身が悲鳴を上げて泣いている様に見えた。

勝負ってこんなもんなのか？どっちかが勝ってスッキリサッパリするもんじゃねぇのか。

「風邪ひきますよ？」

「一人にして。」

俺は近くのコンビニでビニール傘を買った。先輩に立て掛けたけどすぐに、傘は倒れて、傘を自分と重ねてしまう。今の先輩に何を言っても聞いてもらえない自分と、立て掛けても風で倒れる傘。

立川先輩の『一人にして』って言葉が、『見捨てないで』に聞こえたのはどうしてだろう。俺は少し離れた場所で立ちすくんでいた。

契約の握手

君の笑顔が好き。俺の心を明るくしてくれるから。俺の心の雨を晴れにする力があるから。そして、ドキドキと心が温まるから。

おでこに冷たい何かを感じて目を覚ました。白い天井。

「やっと起きたか。お前ら何考えてんだ？肺炎で死ぬぞ！」

「…有野先生。ここ保健室ですか？」

「立川がお前をここまで担いで来たんだ。」

隣には、立川先輩が真っ赤な顔をしてデコにヒエピタを貼って寝ていた。ちょうど、学校に用があった有野先生に助けられたらしい。立川先輩に担いで貰ったなんて、とんだ足手まといになってしまった。

近くにいて少しでも、力になれたらって思ったのに。

「おら、ホットミルク飲んで風邪薬飲め。一時は熱が高くてヤバかったんだぞ。」

「…毒入れてませんよね？」

「オレはこう見えて、病人には手を出さないタチでね。」

体がだるいから、薬を飲んだ。

「立川も大変だな。大企業の跡取り息子だから、ロスに行くらしいしな。」

「ロス？何すかそれ。」

「ロサンゼルスも知らねぇのか？世界的にも有名な企業だから、外国にも行かねぇとなんねぇの。コイツは。」

ぐるぐると頭の中で、先生の言葉がかけ巡る。操り人形って、親に逆らえないってことか？立川先輩は、ビルの屋上でも寂しそうだった。

「お前はもう帰るか？親御さん呼んでるから、そろそろ来るだろ。」

「ロスって、決定してんですか？」

「おい。話し聞いてんのか？親御さんが…。」

「それより！」

「吉井落ち着け。いいか？今は自分の風邪を治せ。ムキになってるのは、熱のせいだよ。」

俺はすぐに割り切れない。ゲームとか言ってる暇じゃねぇよ。先輩は『正直に生きたい』んだ。俺に助けを求めてるんだ。

「チクショー。俺に何ができんだよ！」

「何もするな。人の家の都合には口出しできない。立川の運命がかかってるんだ。お前の気持ちも分からなくはないが、やめとけ。」

俺は頭を横にふっていた。

「それでも、どうにかしたいんです。雨に打たれる姿を見て、俺は何もできなくて歯痒かった。でも、今度は救いたい。」

「お前らしいな。でも、吉井を心配してる人もたくさんいる事だけは忘れるな。」

窓の外の雨は、すっかりやんでいて晴れ間が見えていた。母さんに迎えに来て貰える自分の幸せが、当たり前にあるんじゃないと実感した。

熱がなかなか下がらなくて、華がお見舞いに来てくれた。持って来てくれた林檎が旨い。

「熱が高いと辛いよね。節々が痛いし。もしかして知恵熱もある？」

「まさか！俺が知恵熱なんてあるわけねぇだろ？少しずつは下がってるし。」

林檎を置いた時、華が俺の唇にキスをした。しかも、深く。

「移るからダメだって！まぁ、その、嬉しかったけど。」

「移したら早く治るって言うよね！だから苦しい事は私にも移して？」

「くぁー！すっげぇ可愛い！すっげぇ好き。」

こうして華を抱きしめて元気になった俺だった。

華の知恵熱って言葉にドキッとした。図星だし。どうすれば、立川先輩に協力できるだろうとか考えすぎてる。本人から何も言われてねぇのに、バカみたいだ。

立川先輩は、風邪はすっかり良くなったらしい。『つまんないから早く良くなってねー』なんて、メールが来た。準備で忙しい癖に、やっぱ俺には関係ない事なのかな。

いつからロス行きが決まったんだろう。きっと、従兄弟の東先輩は知ってるかも知れない。こんな事を繰り返し考えて眠れなかった。

「幹也くん。ぶどう買って来たよ。」

「おー、さんきゅ。」

「なーんか元気無いよね。マスカットが良かった？」

「ぶどうもマスカットも一緒だろ？」

「味が違うって！熱のせいじゃないよね。もともとだね。」

先にぶどうを食べる光。旨そうだ。

「また、なんか隠してるでしょ？」

「なっ。別に。」

「言いたく無いんならいいけど、騙されないでよ？みんなが僕みたいに優しいワケじゃないんだからね。」

光が、ぶどうを人差し指と親指で潰した。汁が腕にしたたり落ちる。そして、潰したぶどうを食べる。

「何してんだよ。シーツが汚れただろーが！ったく。」

「甘い話ほど裏があるんだよ。」

「全然甘くねぇし。むしろ、苦いし。」

「苦い話には、何だろうね？さらに苦さがにじみ出るとか？」

「俺に聞くな！」

光は舌打ちをした。

「ここまで言っても、話さないのか。僕ってそんなに力不足かなぁ？」

「舌打ちの後に可愛いこぶるな。しかもムダだからな！」

光は舌を出して部屋を出た。つか、ぶどう半分以上食ってるし！根に持ってるな光のヤツ。話せるほど、確かじゃない。確かでも、誰にも話さないだろう。

「話とは何だ？」

考えた末、東先輩に聞く事にした。微熱があるけど、それより今はこっちが気になる。

「立川先輩の事なんですけど。」

「自分で聞け。」

「まだ何も…。」

「自分で聞けない事ならオレも答えられない。以上だ。」

「ロス行きの話です！」

立ち去ろうとする東先輩が、ピタッと止まった。そして、怖いくらいゆっくりと振り返る。

「オレは反対している。もしも、吉井が止めるならオレも協力しよう。」

「…本当なんですか。俺には止める権利も力もありません。」

「凛はお前を気に入っている。ゲームとやらで、吉井が勝てば何か変わるだろう。」

東先輩は一言一言説得力がある。きっと、立川先輩の事を誰よりも

知っているからだ。

「できる限りは協力する。ただし、無理矢理はやめろ。凛は繊細な部分があるから、無理強いは良くない。」

「分かりました。」

そうして、東先輩と契約の握手をかわした。

セカンドゲームと行き過ぎた恋

いかにも、青春ドラマに出そうな倉庫。東先輩が次のゲームに使って良いと貸してくれた。

「よしっちー。こんなとこで、怪しい取引きでもする気ー？」

「違います。宝探しゲームしましょう。」

ふざけて笑っていた先輩が眉を潜めた。

「宝探しゲーム？」

「この倉庫の中にある紙を隠してます。ただし、小さな箱に入ってますから分かりやすいと思います。」

「やけに敬語が丁寧だな。もう、ゲームはスタートしてるってことねー？」

たくさんの棚に段ボールが重なっている。少し埃っぽいけど、そんな事言っている場合じゃない。先輩は探し始めた。

「こんなところよく借りれたねー？竜ちゃんに借りたんでしょ？」

「秘密です。」

「見ーっけ！簡単じゃん。」

立川先輩は赤い箱を開け、中の黒い紙を開けた。

【私は誰でしょう。人を守りたいと強く思います。】

「まさか、この紙をまだ見つけろって言わないよねー？」

「その通りです。でも、先輩がその人が分かったら先輩の勝ち。最後の一枚を見ても分からないなら、俺の勝ちってゲームです。」

「へー。なかなかの策士だねー？【私】は勇気でしょ。」

「違います。」

先輩はフッと笑って、また段ボールのある棚に戻った。

青い箱の中には、黒い紙に白の文字で。
【私は誰でしょう。あなたと話すのが好きです。】

「違う。」

「何が違うんですか？本当は気づいてるんですよね？最初から。」

黄色の箱には、黒い紙に。

【私は誰でしょう。あなたにいつも勇気を貰えます。】

白い箱の中には。

【私は誰でしょう。気づいてる？凛。私だよ。】

「…椿。」

「最初紙を開いた瞬間、文字で気づいてましたね。」

「【好き】なんて書くなよー。バカなカップルだなー。」

先輩は大事そうに紙をたたんで元に戻した。

「本当は【私】は誰だったと思いますか？」

「あー。そういう事ねー。オレには言えない言葉だねー。」

「負けになりますよ？」

「いいよ。竜ちゃんいるんだろー？」

入り口から東先輩が出て来た。心配して見に来たらしい。

「凛、【私】は【愛】だ。」

「ダメだねー。他の人に協力してもらったらペナルティーだよ？よしっち。」

全ては立川先輩のためだった。

「二人で、オレを笑わせてー？そうだなー。漫才とかー。」

「漫才っすか？」

「悪いが、とても吉井とは…。」

「何で真っ青なんすか！？失礼っすね！」

立川先輩が笑い出した。

「二人はナチュラル漫才だよねー。しかも愛って話せないよー？バカだねー。」

「凛、例えばの話だろう？まぁ、吉井が考えたのだが。」

「えー！？俺のせいっすか？」

セカンドゲームは、俺の反則負けになってしまった。立川先輩が嬉しそうで良かった。って俺、最近立川先輩の事ばっか考えすぎだから！俺は、華に会いに行くことにした。

ちょうど、華の家から樹が出て来た。

「おー、樹じゃねぇか！華はいるか？」

「元お兄さんこんにちは。いたとしても、いないです。」

「それって絶対いるよな。」

樹がじーっと俺の顔を見た。そして、わざとらしいため息をついた。

「何だよ。」

「何でもないでーす。僕は勉強に忙しいんで、（永遠に）さようならー。」

「元気出せよ。ファイト樹！」

ガチャっと玄関から華が出て来た。

「みきや来てくれたんだ！入って入ってー。」

「お、おう。元気だな。」

「もうすぐ花火大会だねー！」

華の部屋には浴衣が立て掛けてあった。深いワイン色で蝶々が舞っている柄だ。

「すげぇ。綺麗だな。」

「お母さんのおさがりなの。ちょっと、大人っぽすぎるかも。」

「最近、綺麗になったから…似合うと思うぜ？」

やべぇ。柄にも無いセリフ言ったから、顔があちー。華の顔見れねぇな。

「ありがと。みきやも甚平着てくれる？」

「甚平あったかなー。まぁ、気が向いたらな。」

「みきや…こっち向いて？」

華が飛び込んできた。ちょっとぐらつく。

「おっと。綺麗になったって言ったばっかなのに、まだまだ子供だな。」

「まだ大人になりたくないよ。でも、みきやとなら…。」

「は…な…。」

そこで、勢い良く襖が開いた。

「忘れ物した！」

「やっぱりお約束なー。」

「樹！勝手に入らないで！部屋は隣でしょ！」

シスコンは健在ってか。俺も人の事言えねぇけどな。花火大会かぁ。花火をバックに…いいねぇ。

「エロオヤジ！にやけんな！」

「こらっ！樹ったら。」

「樹め。言い逃げしやがったな。よし！続きしよっか？」

「姉ちゃん、おやつ。」

「弦ちゃん待っててねー？」

もう一人いたんだった。弟その2。アイツも確信犯だな。結局この日はキスは、オアズケだった。弟くん邪魔しないでくれよー！俺は心の中で叫んだ。

「だっ…めだよ。」

「はぁっ。ちょっと…ナメるだけだから。」

建物と建物の間から怪しげな声が聞こえた。外で何してんだよ。う

わっ。胸まさぐっ。うーわ！

「マサっ！マサのぉ…部屋がぁ…いいっ。」

マサ？まさかな。

「はぁっはぁっ。雪…綺麗だよ。」

「ちょーっと待った！人の妹に外で何しとんじゃー！！」

俺はマサの頭を一発殴った。慌てて雪がシャツを直す。

「すっ。すいませんでしたぁ！」

ひとまず、俺の部屋に入れた。二人は正座。

「私悪くないもーん。マサの事好きだしー。お兄ちゃん全然最近かまってくれないし。」

「雪…あやまって。」

「よく分かった。お前なんてもう妹じゃねぇから。何処へでも行けよ。早く出てけ！」

「っ！お兄ちゃんなんて、だいっきらい！」

「ちょっと言い過ぎじゃないっすか？雪！待てよ！」

二人が出て行った部屋はシンとしていた。雪があんなことするなんて。絶対雪から誘惑したはずだ。わざとあんなミニスカはかれたら誰でも、ヤリたいと思うはず。

「…どうすりゃいいんだよ。」

マサは、思ったより男らしいみたいだ。追いかけるって意外とできない。雪の口から、俺が相手してくれないなんて初めて聞いた。嫌われてるもんだとばかり思ってたんだ。

どんどん成長する妹に戸惑う俺がいる。感覚は華はまだ幼稚園児のままみたいなのに。まるで、親の心境だな。なんだか笑えた。

「雪！」

オレは雪の腕を掴んだ。このまま、どこかへ行ってしまいそうで怖かった。

「私本当は、わざと誘ってたの。」

「オレ、エロい雪も好きだ。」

真っ直ぐ見つめたら、雪はオレに抱きついた。

「どうしよう。お兄ちゃんあんなに…怒らせちゃっ…ふぇっ。」

「大丈夫だよ。幹也さんは、雪を本気でっ…心配して…くれたんだ。」

「ぐすっ。何でっ…マサまでっ…泣くのー？」

「雪がっ…泣いたらっ、オレもっ…悲しいー。ぶぇー！」

オレ達は泣いてばかりだ。それでも、一緒にいるのは悲しみをわけあってるからだと思う。それに泣いた後はラブラブだしな。

「お互いに鼻水ついちゃったね。」

「家まで送るよ。」

幹也さんは家の前で心配そうに立ってた。頭をかきながら「ゴメン」なんて言っていた。雪が抱きついたの見てちょっと妬けたけど、何も言わずに立ち去る事にした。さすがに、一緒に泣かないようにしないとな。オレは密かに決意した。

スクリーム

今日も未来は縄で緩くオレを結ぶ。痕がつかない程度まで絞めるんだ。

「今日は何がしたい？」

オレの体を未来の細くて綺麗な指がはう。

「気持ち良いこと？それとも…。」

ブチッ。オレは縄を自力でひきちぎった。

「なぁ。もう限界だよ。最初に浮気したオレが悪かったけど、今はしねぇだろ？」

「また女のところに行くのね？だから、私が邪魔なんでしょう？」

「未来ちゃんと聞いて？オレは、未来だけだよ。でも、恋人を縛るなんておかしいだろ。」

未来も俺もかすかに震えていた。

「よっしーを好きだった私を無理矢理抱いたのはキヨの方じゃない！別れるなんて許さない！！」

「うるせぇ。オレをバカにしたお前が悪い。だからこうやって責任取ったじゃねぇか！」

どんどん崩れていく。楽しかった思い出も、未来の綺麗すぎる笑顔も。最初からオレ達は、終わっていた。

「キヨごめんね。私…私。」

「オレが全部悪いんだよ。別れるなんて言って…悪かった。」

「じゃあ今日は私の全身にキスして？」

「ん。分かった。」

また縄で縛られる。まるで囚人。オレは未来の道具。

土砂降りの雨の中、キヨが家に来た。母さんが慌ててタオルを貸し

た。キヨはいつもの調子がなくて、無表情に『今夜泊めて』と言った。

「キヨ。その手首の痕どうした？」

「おっかしいなぁ。いつもは退いていい頃なんだぜ？」

「縛るとかってマジだったんだな。悪いけど、俺かなりショック。まさかお前らが。」

キヨは壁にもたれてそのままズルズルと座った。

「みきや知ってた？未来の本気で好きだったヤツ。」

「あー。さすがにあんだけアピられたら、俺でも分かってたよ。」

「しかも、両想いだったよな。幹也は、あん時はまだ恋に臆病だったけど。」

昔の話をしても意味ない。俺は、今が重要だと思う。

「もう前の話するなよ。今肝心なのはその手首の痕の話だろ？」

「俺、未来の初めてを無理矢理奪ったんだよ。未来を振り向かせたくて、気がつけば、全てがぐちゃぐちゃだった。」

「付き合ったばっかの時すぐに、キヨの誕生日が来ただろ？あん時さー、桜のヤツ必死に色んなヤツに、キヨの好み聞いてたんだぜ。」

「ウ…ソだ。」

「あのネックレス、お揃いって知ってたか？」

今も肩身離さずキヨはしている。シンプルなシルバーネックレス。だんだんと未来は、キヨが好きになりかけていた。キヨは、タイミングが少しずれただけだ。世間ではホニャ…イプと言うが…。

「オレ自暴自棄になってたんだよ。自分が嫌で、浮気しちまった。」

「うっ。耳が痛い話だ。で、何で縛られるんだよ。」

「怖いんじゃねーのかな。オレがまた乱暴になるんじゃねーか…って。オレの自業自得だけど。」

怖い…か。俺の場合真逆で、華に安心されすぎてる気がする。ってか今、キヨがクスっと笑わなかったか？

「今はガマンできるんだろ？」

「オレは幹也と違って、まだまだ真っ盛りだから。」

「どーゆー意味だ！」

「そのままだよん。」

「って、時と場合によっては、ガマンしないといけねぇだろ！」

キヨが床に寝転んだ。

「さてはて、それはどうかな？」

「はぁ？」

「男は強引にいかねーと。」

キヨの言いたい事も分からなくはない。いわゆる肉食系ってやつだろ。うーん。ワイルドな男ってうらやましい。

「なぁ。修学旅行みてーだな。」

「ぷっ。キヨどうしたんだよ？そんなに好きなのか？」

「あー！未来が好きだー！」

「ここ山じゃねぇし。」

無表情のキヨがいつものお気楽キャラに戻った。キヨが前もって何も言わずに泊まりに来たのはこれで2度目だ。

「花火大会誘えよ。俺は華と行くんだー。良いだろ？」

「花火大会か。オレこう見えて、人ごみ苦手なんだよな。」

「ちょっと違う場所で見れば良いだろ？」

「穴場ってヤツ？穴場って意外と集まるんだよな。」

「だーっ！もう知らねーよ。」

「オレは打ち上げ花火より、二人きりで風鈴の下で線香花火したい派。」

線香花火って寂しくねぇか？せめて、バァーって明るいヤツがいい。

「キヨの柄に合わねぇな。」

「静かな花火も情緒があっていとをかし。」

「古典苦手なんだよ。しみじみと趣き深いだったっけな？」

「そ。たまには、幹也もムードを大切にしたら？舞原ちゃん惚れなおすぜ。」

俺はふと、外の雨を眺めた。

「人の受け売りは受け付けねぇよ。」

キヨと俺は顔を見合わせて笑った。男ならポリシーを持っていたい。人に流されるのは簡単だけど、自分を持つのは大切な事だと思うん

だ。

最後のゲームは明日だ。まだ、最後って事しか聞かされてない。勝って、立川先輩の本音が聞きたい。そう思った。

目が覚めるとキヨはいなかった。

【今度は俺んち泊まりに来いよ】

メモ帳に筆圧の高い字で書いていた。

文字まで苦しんでる様に見えた。俺、何もできねぇじゃん。玄関で無表情なキヨを見た時、思わず後退りしてしまった。４年の付き合いなのに、キヨは意地っ張りなところがあるから、弱みなんてなかなか見せない。

本当は気づいてた。俺を敵視したり、利用してる事も。桜と付き合うって聞いた時、正直、殴りたくなった。俺が失恋したばっかだったから、両想いでも踏み出せないって知ってて、キヨは…。

ちょうど、華からメールが来た。

【今日逢える？】

ラストゲームは今夜。俺は華にイエスのメールを打った。

『幹也くんは自分を犠牲にして、他の人の事ばっかり考えるよね。』
といつか、光に言われた。そん時は、他のヤツの事ばかりなんて考えるワケないと思った。

でも今は、立川先輩やキヨや、雪の事を馬鹿みたいに心配している。余裕のある人は周りが見えるなんて嘘だ。自分に精一杯な俺が、こんなに気づけるんだから、みんな見てみぬふりをしているだけだと思った。

俺にとってのハッピーエンドが、他の誰かをバッドエンドにするかも知れない。
誰かの助けが、ただのホラーな叫びに聞こえる場合もある。

「お兄ちゃーん！光ちゃんが大変！」

頼む。これ以上問題を増やさないくれ。

ムズガユイ。

オレは、今、急いで凛のマンションに向かっている。3度目の暗証番号を打って、ようやく凛の部屋に辿りついた。

「はーいはい。竜ちゃんそんなに汗かいちゃってどったのー？」

「どったのではない！おじさん今日ロスに行くって聞いたぞ！」

「んー。正確にはまだ決まってないらしいけどねー。仕事次第らしいよ。それがどうしたのー？」

呑気にドーナツをかじる凛。俺にも一個くれた。飲み物がほしいんだが、これは分かっててわざとだな。

「説得しないのか？」

「あ、その事で竜ちゃんにお願いがあるんだよねー。」

凛は、カフェオレをすすりながら、怪しげに微笑んだ。寒気がしたのは、凛の企みを予感してしまったからだ。

雪が、大変とか叫ぶから何かと思ったら。

「…ギャグ？」

雨靴が抜けないらしい。光が雨靴で悪戦苦闘しているから、ミスマッチすぎる。一年前の雨靴をたまたま、悪魔でもたまたま見つけて、はいてみたところ、抜けなくなったらしい。

「くぅっ。僕とあろう者が、雪引っ張りすぎ！」

「光ちゃんが力入れすぎなんだよ。」

「マジで抜けねぇの？雨靴切るか？」

カッと光が目を見開いた。

「この雨靴は幸せを呼ぶ雨靴なんだよ！切るなんてしたら、幹也くんに不幸がふりかかるよ。」

「何だよ。そこまで言うんなら、雪帰るぞ。光は一人で大丈夫らしいからな。」

「あ。マサが待ってる。ごめーん。光ちゃん頑張ってね。」

雪は軽やかな足取りで水田家を後にした。俺の妹ながら、薄情だ。

「僕はこのまま、雨靴と生きていくよ。よろしくね、アマグッちゃん。うんよろしくね光くん。」

雨靴で腹話術する人初めて見た。相当キテるなこりゃ。

「油を差して滑りやすくすれば？なぁ、アマグッちゃん。」

「そうね。って、それじゃあ、僕の美脚が荒れるよ！」

そんなやり取りをしていると、救世主が来た。

「お兄ちゃんマサがコツを知ってるって！」

「光先輩、大丈夫すか？どうっすか、痛くないっすか？」

「痛くはないよ。」

マサが雨靴の上から、足首を両手でゆっくり捻っていくうちに、嘘の様に雨靴がとれた。

「さようならアマグッちゃん。さようなら光くん。こうして二人は別々に生きる事になりました。メデタシメデタシ。」

「おいおい。最初に、マサにお礼言えよ。」

「いいんすよ。相手に見返りを求めないって光先輩の教訓があるんす。」

教訓って、光何を教えてたんだよ。あ、マサが雪とくっつきすぎ。

「こほん。僕は、実は演技だったんだよ。みんながどれだけ僕を心配してくれるかを見たかったんだ。」

「そんだけ右足を赤くしといて、よく言えるな。」

「じゃあ、マサが一番心配してくれたね。」

「雪やめろって、照れるから。」

むずがゆい！マサを見てると、全身がむずがゆい！見えない何かが移りそうだ。

「お兄ちゃん鳥肌たってるよ。寒いの？また風邪？」

「オレ、いつも風邪薬とか持ってるっすよ。」

何そのポーチ。ちょっとキャンディー柄とか…。

「むずがゆい！」

「光にも分かるか。このむずがゆさ。」

「マサって、青春少年だよな。もうちょっと男らしくなれ！」

「光先輩の言いつけ守ってますよオレ。」

クーンと耳が垂れた仔犬の様だ。なんだろうな。この前まで仔犬止まりだったのに、むずがゆいのは…そうだ、色気が出たせいだ。

「お兄ちゃんに光ちゃん！私の彼をいじめないでよね。」

俺の可愛い妹の雪がマサを抱きしめた。俺の可愛い妹ってとこ重要。俺の中の試験によく出るトコロ。

「雪…！早く二人になろう。」

「いーや！その雰囲気で二人になるなよ？」

「幹也くん、割り込んでも、雪はもう大人だよ？」

「はぁ？まだまだ子供だからな！」

この中で、一番子供なのは俺だ。年齢とかじゃねぇんだよな。そろそろ華と会う時間だ。俺も髪ほんの数ミリ短くしようかなと考えたりした。

ファンシーな俺の彼女の部屋。柑橘系の甘酸っぱい香りがする。

「雨靴がハマっちゃったんだ。光くんって面白いんだね。」

「演技だったとか言うんだぜ？それより、そんなことより、今日の夜大事な事があるんだ。」

「みきや？」

誰にも話さないと思っていた立川先輩とのゲームを話した。華には知ってほしいと思ったのもあるし、この話を聞いて何ていうか気になった。

「今夜は行かない方がいいよ。」

「え？」

「立川先輩はみきやとのゲームで、気を紛らわしてると思う。」

隣に座る華の横顔が、切なげに見えた。華はパー先輩っていつも呼ぶのに、さすがに立川先輩と言っていた。そして、華はまるで自分の事を言うようだった。セレブは違うんだと遠く感じてしまった。

「今夜はラストゲーム。これが最後だから逃げねぇよ。」

「ん。みきやならそう言うと思った。もう、あんまり見ないでよ。」

「まつ毛なげぇな。」

くすぐったそうに笑う華の頬にそっと触れた。そして、彼女は目を閉じた。プクッと美味しそうなピンク色の唇に、自らの唇を重ねた。角度を変えながら、薄目で華を盗み見たりして、手が勝手に…。

「姉貴！」

「きゃっ！樹どうしたの？」

「樹、覗き趣味ヤメロよ。」

いつも絶妙なタイミングだからな。あ、まだ胸触ってた。

「僕は姉貴に用があるんだ。」

「今度勝手に部屋に入ったら、樹と口聞かないんだからね！」

樹の頭に岩が落ちた様に見えた。それだけショックを受けていた。華の家に婿にいったら、大変そうだとしみじみと思った。

【今夜7時に駅の南口にて】
メール短かっ。しかも、【にて】何？絶対に続きあるだろ。俺はチャリで駅に向かった。
駅は不良の溜まり場だ。
「おい！スカしてをじゃねーよ。」
「人を待っているんだ。」
「ナンだと？」
俺はチャリを置いて近づいた。やっぱり、東竜先輩だ。絡まれてる。しかも挑発してるし。
「せーんぱい。待たせてすいません。」
「んだオラ！ってお前マウスじゃねぇか！」
「…俺忙しいんだよな。」

ヤンキー2人は、逃げていった。前に気絶させた中にいたような？

「今日は、凛は来ない。変わりに俺が来た。」

「ええ？何すかそれ！」

「凛は自分の父親に、会いに行った。ロス行きについて意見するらしい。」

「良かった。これで…。」

「いや、凛は何を考えているか分からない。自分からロスに行く可能性も少なくも有らず。」

会うだけでもいいんじゃねぇか。立川先輩は、父親に電話もかけたくないって言ってた。って、俺とのゲームはどうなった？

「凛が、自ら負けを認めていた。オレは、それを伝える為ここに来たと言う訳だ。」

「先輩は『自分で伝えろ！』って立川先輩には言わないんすね。」

「凛が、自分から父親に立ち向かうのは初めてだ。邪魔をしたくない。」

しっくり来ねぇな。

「朝練遅刻するなよ。」

「なんすか？いきなり。」

「じゃあな。」

すぐ俺に後ろ姿を見せた東先輩は、右手をふって、そのまま駅に入って行った。武道家なら、そんな無防備に後ろ姿を見せないだろ。俺は、何だか腹が立って、石ころを東先輩めがけて投げた。

パシッ。

「なるほど。今からオレと勝負したいらしいな。」

俺は全力で逃げた。まいたと思い壁に手をついていると、後ろからトンっと肩を叩かれた。

「なんだ…っ！？」

「今から家来るか？」

東先輩の家は道場と聞いた事がある。その晩の出来事は、吉井家に代々受け継がれるだろう。

「瓦割り十本！！」

「すみませんでしたぁ！！石なんて金輪際投げません！！」

「あぁ。その分を忘れていたな。」

東先輩は、鬼でなくとてつもない程のスペシャルサドだった。俺は、気絶していたらしい。

浴衣の中とフードの影

他の誰かが目の前で話していても、耳に残るのは貴方の暖かい唇のぬくもりと、少し低めの声だけ。

だから、私を許して。

『お見合いではなく、話をするだけ』なんてお父さんは言ったけど、ただ話をするだけで真夏なのにわざわざ着物は着ない。

目の前の男の人は、５つ離れた大学生。いかにも真面目そうで、黒渕眼鏡をしている。

「ねぇ。華ちゃんさ、彼氏いるでしょ？」

二人きりになったとたん言葉遣いが軽くなった。きっと、この人は、見た目をわざと真面目っぽくしている。

「はい。刹那さんもいそうですね？」

「ざっと片手で数えきれないくらいかな。」

お父さんが決めたお坊っちゃまが、とんだ外れだ。でも、これなら一度ですみそう。

「今、安心したね？おれ、華ちゃん好きかも。おれを前にして、他の男を見てる瞳とか…燃えるんだよね。」

「私、もう会えません。一度くらい父の言う事聞かないとと思っただけですから。それに、」

「それに彼氏以外考えられません。とか？じゃあさ、表面だけ付き合おうよ。おれ達が付き合うって聞いたら、お父様も喜ぶかもよ。それに、こうやって他の男と会わなくてすむじゃん。」

罠に決まってる。こんな男信用できない。

「今すぐにとは言わないよ。おれはかなり心広いからね。」

そうして、宝来刹那と初めての食事を終えた。

「華？」

「あっ。何？」

今日は、華の楽しみにしていた花火大会なのに華は、ぼーっと上の空だ。出店もスルーして歩いてる。

「熱でもあるんじゃねぇ？ベンチにすわるか。」

「そんなんじゃないよ。ほら、熱も無いでしょ？」

俺の手を握って、華のおでこに持って行った。

「んー。熱くはねぇけど、まさか！違う男の事考えてたか？」

「…っ！な、無いから！」

冗談で言ったのに、そんなに動揺されたら怪しいよな。また、ぼーっとしてる。俺は、華の肩を掴んだ。あれ、ブラのヒモが無いってことは、ノーブラ！？

「みきや、どうしたの？顔スッゴい赤いよ？」

「まさか、これは！下着つけてねぇの？」

「…当たり前だよ。着物の時もつけないし。」

って、喜んでる場合じゃねぇ。話ずれたぜ。えーとのーがー、そうだ。

「まさか、下も…？」

「みきやのえっち。」

「もう一度そのセリフプリーズ！」

「ちょっと…。やだ、どこ触ってんの？」

「腰っす！腰の流れっす！」

バカな俺はすっかり忘れ去っていた。頭の中は、華の蝶々が舞うワイン色の浴衣の中身の想像でいっぱいで。いつも隠してあるうなじとか、少し濃いめの化粧とかクラクラした。

ヒュードン！パラパラパラ。

「わぁ！みきや見て！」

「え？うなじを？」

「違うよ。花火キレー！」

花火よりも、華を見つめていた俺だった。やっぱ、浴衣最高！！

俺は幸せを噛み締めながら、華を家まで送り届けた。深くキスしたらそのまま浴衣を脱がしたくなりそうで、別れ際に軽いキスだけした。

「おかえりー。」

「あー！立川先輩！」

「さて、オレはロスに行くでしょうか？」

俺の家の前にしゃがんでいた立川凛先輩。表情が読み取れない。

「行かない。であって欲しいっす。家入りますか？」

「結果報告だけだからいいやー。ロス行かないよー。でも、オレが行かないなら、親子の縁を切るんだって。」

フードをかぶった先輩が少し頭を傾けたから、どんな顔してるか分からない。ただ、声がかすかに震えていた。

「…そんな。」

「親父にはオレもうんざりしてたんだー。だからいいんだよ。バイバーイ。」

「行って下さい！ロス行った方が…！」

ドッとギリギリ頭の横に立川先輩の拳がとんできた。

「竜ちゃんにも言われたー。オレってただの人形なの。これで実感した。」

「先輩…目殴られたんですか？」

近くで見たら、フードで隠していた意味が分かった。左瞼がはれていた。

「機械的で感情が無い親父と思ってたら一発ガツンと『甘えるな。目を覚ませ。』だってさー。何かオレー。カッコ悪いよな。」

「先輩…愛されてるじゃないっすか。」

「ははっ。虐待で訴えよーかなー。オレも一発きめたんだぜー？急所は避けられたけど。もう、頭グリングリンだよ。」

「先輩の決意固まってますね。いつでも、ゲームの続き乗りますから。」

「よしっちは初めての合格者だよ。お前は、金意外で信じられる力を持ってるから。」

立川先輩はニッと笑った。吹っ切れた様な、俺から見てもすっきりする笑顔だった。

数日後、立川先輩はロスに行った。俺は、見送りとかいかなかった。先輩は、そういうの好きじゃないと思うし。

《アド変えんなよ。》

とだけ、メールが来ていた。変えても東先輩あたりから、バレると思う。

子猫は東先輩が飼っているらしい。あんなに引っ掻かれてたのに、大丈夫なのかよ。

「で、何故オレんトコロに来てんだ？」

「有野先生のおかげで、ロス行きの話も知った訳だし。報告しに。」

「汗臭いんだよ。シャワーあんだろ、シャワー。」

「青春の汗っすよ。先生は好きな人いねぇの？」

「舞原華。」

日本語なのに、違う言葉かの様に聞こえた。つまり、聞きたくない、いや、聞こえたくなかった。

「…マジ？」

「こんくらいで動揺してどうすんだよ。余裕を見せろ、余裕を。」

こんくらいって、もっと試練があるってことか？

「早く帰って宿題でもしろ。夏休みもあと少しだろ？くれぐれも大どんでん返しがない様にな。」

有野は、意味有り気な顔をして、シッシと手を振った。

「余裕か。」

無意識に呟いた。

星の降る夜

今日の雪は、可愛くて綺麗で、正直誰にも見せたくなくなった。

「マサー！早く行こうよ。花火始まっちゃうよ。」

「いつもの場所で見たらダメ？」

「せっかく浴衣着てるのに、やっぱり変かな？」

変な訳ない。

「うん。変。雪に浴衣なんか似合わねー。」

「ひどい！そんな風に思ってたんだ。マサの為に頑張ってオシャレしたのに！もう知らないっ。」

雪は暗い夜道の中走って行った。オレは慌てて追いかけた。手首を掴んだけど、案の定振り払われた。

「触らないで！」

「あんまりかわいくて、他のヤツに雪の浴衣姿見せたくないんだ。ちっちゃい男でごめん。」

「ほんとう？」

素直になれない。光先輩に男らしくなる為の秘訣を教わったけど、雪を目の前にしたらそんな余裕なくなるんだ。

「マサのばか。じゃあ、いつもの星がよく見えるトコロに行こうか。」

雪はオレの手に自分の指を絡めた。早くちゅうしたい。

「ひゃっ。もう、歩いてる時に、ちゅうしないの！」

「やだ。ほら星スッゲェ綺麗！」

「今日のマサかっこいいよ。」

ギュッとオレは手を握り返した。甚平着てきて良かった。兄貴のオススメっつーのがかなり嫌だけど。

「ほんとここは、誰もいないねー。」

「オレが見つけたからなー。ちゅうしよ！」

「マサってば。さっきしたでしょー？」

そこで花火が打ち上がった。

「たーまやー。」

「あはっ。きれいだね。」

「雪！来年も再来年もずっと、一緒にここで花火を見てくれますか？」

雪はオレのほっぺにちゅうした。

「よろしくね。」

花火はまるで星が降ってるみたいだった。

「花火始まっちゃったね。」

「未来は行かなくていいのか？」

「うん。線香花火しようか。」

未来の家の庭からは、打ち上げ花火が見えた。その下で、オレ達は線香花火をしている。

「キヨって派手そうなのに、実はシンプルが好きだよねー。」

パチパチと線香花火の音と、ドンっと打ち上げ花火の音が心地よい。

「まさかー、オレっち派手な未来ちゃん大好きよー？」

「あー、それって逆に地味な娘が好きって言いたいんでしょ？」

ボトッと線香花火が落ちる。

「星が綺麗だなー。打ち上げ花火って星が降るみたいだなー。」

「今話そらしたでしょー？星が降るなんて、相変わらずロマンチストなんだから。」

「未来が現実的すぎんだろ？」

未来の方を見た瞬間、唇に柔らかい感触を感じた。すぐに、オレの方からリードした。

「私の部屋行こっか？」

「んー。今日は縛るのナシで。」

いくら、体を重ねても名前を呼び合っても、埋まらない気持ちがあった。

星の降る夜。オレ達は心まで繋がった気がする。

窓から見る打ち上げ花火は、ガラス越しというだけで、幻想的じゃない様に感じた。今年は、花火大会に行く気になれなかった。

「光。人んち押し掛けといて、さっきから何ため息ついてんだよ。」

「いやぁ。やっぱり日本庭園は違うねー。花火が似合うよ。」

「立花とかに誘われてなかった？」

立花とは、クラスの女子。それ以上でもそれ以下でもない。

「樹だって、誘われてたじゃん。」

「ダルいし。光も同じ理由だろ？」

「まぁね。本当の理由は樹と同じかな？」

いわゆる失恋。もう会わないって言われてから、花音さんから連絡はない。自分からなんて、変なプライドの高い僕が出来る訳ない。

「たーまーやー。」

「まるでフヌケだな。光はまだ完璧にフラれてねーじゃん。」

「オヤスミ。」

「せめて布団しけや。って、寝るのはやっ。」

星の降る夜に、僕は、樹と過ごした。一人じゃ、マイナスばかりが浮かんでいたと思う。

高級レストランで、最高の女とワインを飲む。これがオレ。

「有野さん？そういえば今日、花火大会があるそうですね。」

「あぁ。ここは一番花火が見えるレストランだよ。」

赤いルージュが似合う彼女。オレにはこんな女が良いんだ。

「わぁ！綺麗ですね。」

ちょうど花火が上がった。冷めた目で見る自分がいる。華は、今頃吉井と…。

「ありがとうございます。こんな素敵な場所に連れて来てくれて、嬉しい。」

「貴方となら何処へでも行けますよ。」

今なら、君の瞳に乾杯って言えそうだ。

「今度は、好きな人を連れて行って下さいね。」

だから、女はなかなか騙せない。この女に興味を持った星の降る夜。

衝撃のキスシーン

二度目に、宝来刹那と会った場所は、みきやの嫌いなイチャイチャ公園だった。

「何で公園なんですか？」

「そんなキョロキョロして、みっともないよ。それより返事聞かせてくれない？」

「父を騙すなんてできません。だから、や…。」

唇に一瞬何かを感じた。私は夢中で唇をゴシゴシ擦った。

「これが同意のキスでいい？少林寺憲法してるのに、避けられないはずないよね。」

私は手をふりかざした。けどすぐに、手首をつかまれる。

「おれが、華ちゃんに構う理由知りたく…いってぇー！」

私は思いきり足を踏みつけた。素早く手首を振りほどいた。

「私、そんなに簡単な女じゃないですから！もう二度と会いません。さようなら。」

刹那さんの表情も見ないで、私は公園を出た。早くみきやに会いたい。全力で走ってみきやの家に向かった。

オレはいつもの公園で、未来を待っていた。きっと化粧で時間かかってんだろう。暇で、公園を見渡すと舞原と、真面目そうな眼鏡くんがベンチに座っていた。

「へー。お堅い舞原チャンがねぇ。みきやにチクッちゃろーかな。」

次の瞬間キスしていた。ちょっとオレも、ショック受けてた。自分ながらショックを受けた自分自身に驚いた。思わず、セットに時間をかけてるハネハネの前髪を、ペシャンコに戻してしまった。

「キーヨ！遅れてごめんね。下着迷ってて。キヨ？」

「未来。いい店見つけたから、公園はやめようぜ。」

「あれ？前髪がおりてるよ。」

「雷が落ちたんだよ。」

「変なキヨ。行こっかー。」

何でフォローしちゃってんだろ。口が軽いのが売りなオレが、キスシーンの目撃ごときでショックうけるなんて、あり得ない。

「キヨ？何ブツブツ言ってるの？」

「手ぇ繋ごうぜ。」

「繋いでるよ。大丈夫？」

幹也は今頃何してんだろう。

ドスドス、ドスドスと俺の部屋で受験生二人が、ゲームをしている。

「おりゃー！ミラクルショーット！」

「させないよ！クルクルアタータック！」

ってか、外で本物やれ。身振り手振りが激しい。これはもしかしなくても、宿題に悪戦苦闘してる俺への嫌がらせだ。

ピンポーン。

「お兄ちゃん今手ぇ離せないかーらっ！」

「幹也くん出てー！」

一発ずつ拳骨をおみまいした。結局俺が出るんだけどな。

「はー」

「みきや！」

「い」まで言う前に、華が飛び込んで来た。少し震えている。

「何かあった？変質者に会ったか？」

「ごめんなさい。私、キスしちゃった。」

俺は、華を突き飛ばしていた。

「…何だよ。そんなことわざわざ言いに来たわけ？」

「み…きや？」

拳が震える。しばらく何も言わなかった。

「本当は、みきやに相談すれば良かったの。」

「本当はって？話が分からねぇんだけど。」

ガンっと壁を殴りつけてしまう。

「…何よ。みきやなら分かってくれると思ったのに。」

玄関から出て行く華を追いかけなかった。何を望んで『他の男とキスした』なんて言うんだ？俺には分かんねぇよ。

私は、走って走って…気付いたら、学校についた。でも、もう、先生には相談できない。

「よう。華何してんの？」

「…はる兄。」

「こら、有野先生だろ？一回くらいは相談乗ろうか？」

いつも最後に行き着くのは、はる兄なんだ。みきやは甘えても、気付いてくれない。

「それは、華が悪い。」

準備室で、ミルクティーを入れてくれた。このイスは久しぶりな気がする。あんまり、日がたってないのにね。

「私悪いからって、あやまったんだよ？」

「はぁ？いきなりキスしたなんて言われてみ？華なら一発叩くだろ。」

「あ…。自分の事しか考えてなかったかも。」

ミルクティーを飲むと心が落ち着いた。

「華、偉いな。泣かなかったんだろ？」

「ちょっと、それ言われたらっ…。もー！」

「泣いたー。ガーキ。」

くしゃくしゃと頭を撫でられる。大きな手があったかい。

「真っ直ぐなのは良いけど、もうちょいしなやかにな。」

「んー。頑張るー。」

有野先生は、私を泣かす名人だ。でも気分が軽くなるのは、はる兄の魔法かもね。

俺は受験生二人に説教を受けていた。

「華さんかわいそう！」

「幹也くんは、受け止める包容力が足りないんだよ。」

「はぁ？被害者は俺なの。キスだぜ！はっ！」

勉強用のイスをクルクル回しながら、ふて腐れる俺。

「いーい？ここはお兄ちゃんから仲直りの電話しなきゃダメだよ。」

「幹也くんの携帯…と。舞原華さんは…あった。プーッシュ。」

「勝手に触んな！」

「じゃあ、私達は退散しますからー。」

「優しい言葉でね！」

バタンとドアがしまる。

《みきや！》

「んー。ちょっと言い過ぎた。」

《私もちゃんと話したいから、会いたい。》

「明日、華んちに行く。オヤスミ。」

《うん。オヤスミ。》

やっべぇ。俺怒ってるかも。

「カァーット！ダメだよお兄ちゃん！」

「もっと優しく。軽やかな感じで。」

「てめぇら！また盗み聞きしやがってぇ！」

追いかけっこは朝まで続いた。

翌日。華は家の前に待っていた。

「来てくれたんだ。」

「俺、嘘はつかねぇだろ？」

あ、ちょっと目の下にクマが出来てる。やっぱあの電話は、そっけなさすぎたか。

「んーと、あれだ。昨日はガキすぎた。」

「私も、いっぱいいっぱいで、早くみきやに会いたかったの。」

「で、相手殴っていいか？」

やっと、目が合って良い感じになった瞬間。

「華ちゃん。お父様に挨拶に来たよ。」

いかにも育ちの良さそうな、黒渕眼鏡が俺達の間に割り込んだ。

「華…こいつ？」

「うん。」

俺の拳は、そいつの顔には当たらなかった。軽々と避けられた。

「面白い歓迎だね。吉井幹也くん。」

「あれ…。宝来？」

「え！知り合いなの？」

キヨがグレてた時、相手チームのボスだった。黒髪に染めやがって。

確か、オレンジ色の髪だった。カラコンもグレーで、ヒノトリとかあだ名があったはず。

「ふーん。勝てるね。マウスちゃん。」

こいつ、お坊っちゃまだったのかよ。強くて性格も潔くて、男として憧れてた。でも。

「華は渡さねぇよ。」

憧れの男が目の前にいる。これは、負けられねぇだろ。

「私…みきやだけだよ。」

華は俺の後ろに隠れていた。

目覚めたウワサ

ツンツン。

「ーであるからにしてー、この方式をー。」

夏休みも終わり、久しぶりの授業だというのに、後ろから邪魔するヤツがいる。

「なんだよ。」

結局、先生の様子を見ながら振り返る俺。

「ほい。ラブレターあげる。」

ノートの切れはしを渡してきた。前を向き、開いた。

【舞原チャンの浮気現場目撃したよん。ちゅうまでしてた。（ウインクバッチン）】

あー。キヨに見られたんかよ。また噂流すかな。

「まだ誰にも言ってねぇよ。」

休み時間便所で、キヨがいきなり言いだした。

「おいおい。まだって事は言おうと思ってんな？」

「やはっ！バレちったー？ってか、幹也知ってたっぽいな。つまんねぇの。」

やはっ！て笑い初めて聞いた。

「んー。華は正直だからな。自分から言い出したんだぜ？」

「舞原チャンらしいっちゃらしいな。幹也キレただろ。」

「よしっ。そろそろ戻るか。」

「話さないと、ばらすかも？」

「ったく。キヨは知りたがりだな。」

その頃の教室。

「華。次自習らしいよー。」

「未来ちゃん。二人とも遅いね。今頃は席に着いてるのに。」

隣の席に座る未来ちゃん。確か隣は、サボってばかりのナントカ君。いや、さん？

「キヨたち自習なのに、サボる気だろうね。それより、有野が自習にしたのには、噂があるんだよ！」

ズイッと、未来ちゃんがよって来た。ちょっと近い。

「ウワサ？」

「そ。何か結構前から生徒とウワサになってたらしいよ。んで、転勤になるとか。」

『もうオレのトコロに来るな』というはる兄の言葉が、頭によぎる。
まさかあの時から、私とウワサになってたの？

「あくまでも噂だよ。」

私は、先生に助けられてきたのに、何もできないのかな。

裏庭で、キヨと俺は寝転がっていた。

「ヒノトリが、華チャンの婚約者か。」

「婚約はしてねぇから！」

「アイツ死んだってウワサあったんだぜ。ボスが言ってた。」

俺はそういう集まりとか、出たことなかったからキヨのグループのボスを知らない。

「なんでか、宝来にはよく鉢合わせたんだよな俺。」

「世の中は必然だぜ？お前引き抜かれかけてたじゃん。めっさ幹也の事気に入ってたらしいぜヒノトリ。」

「からかわれてただけだし。キヨはかなり嫌ってたよな。」

いきなりキヨが起き上がり座った。

「ったりめぇじゃん。敵だぜ？今でも敵だからな。」

その瞳は真っ直ぐ前を見ていた。揺るがない心の現れだ。俺はキヨの助っ人しかしてない。しかも、キヨといて絡まれた時だけの話。有名私立に入ったのも、校内だけでも争いを避けたかったからだ。

「勝てよ。」

「もう勝ってる。なんて、やっぱ迫力が違うんだよ。」

「んなの、最初から分かってんじゃん。幹也は、幹也なんだからな。」

「ぶっ！真面目なキヨって変。」

「コノヤロ！」

しばらくくすぐられた。宝来の事をキヨがボスに伝えたら…。華にまで被害が及ぶかも知れねぇ。それを、防ぐのが俺の役目か。

「悪い幹也。」

「俺も何で話すんだろうな。」

昨日の仲間は今日の敵。

そして、キヨはまだ集まりに行っていた事も知らなかった。

行っちゃダメなのに、準備室に行く。

「はる兄！」

「うぉっ！急に入んな。」

段ボールが目に入った。

「やだ。行っちゃうの？」

「…は？」

「転勤するんでしょ？」

よく見ると、段ボールにはティーセットが。

「あいにく。オレは何処にも行かねぇよ。結婚式には行って来たけどな。」

「ウワサは？」

「ウワサ？あー。演劇部の内容だろ。ごっちゃになったんじゃね？」

私…ただの恥ずかしい人じゃん。

「華がそんなんだと、本当に噂になるかもな。まぁ、茶でも飲めよ。」

「はる兄のバカ！もう来ないから。」

来るなと言われたら生きたくなる。きっと、はる兄の思惑通りなんだよね。

華が準備室を出てから、奥からヤツが出てくる。

「危機一髪。」

「ったく。刹那は、ストーカーか？」

「おれ、レモンティー。」

「誰が入れるか。大学戻れ。」

たまに、来てる宝来刹那。ダテ眼鏡なんてかけるのは、荒れてた時のカモフラージュとか。でも、こいつの瞳の強さはそのままだ。

「そーんな見つめたら穴があいちゃうよ。春ヤン。」

「うっせ。眼鏡も黒髪も似合わねんだよ。」

「春ヤンは教師が似合わねんだよ。」

何だかんだでお茶を出すオレは甘いと思う。

「華ちゃんにあんな甘えさせるなんて、妬けちゃうな。」

「話聞いてると、お前ただの不審者じゃん。」

「知らねぇの？第一印象は悪い方が、後からじわじわと印象が良くなるんだってこと。」

こいつほど、瞳で人をコントロールするヤツを見たことは無い。

「は？華は、用心深いって知んねぇの。ってか、吉井の事かなり気に入ってるらしいよな。」

「吉井幹也？アイツ良いよな。一回本気で勝負したい。」

「おい。刹那が本気になったらやべぇだろ。」

刹那はウインクした。

「おれ、かなりのサドなの。そろそろ授業行かないと。」

窓から出た。ここは3階。ヤツは、木をつたう。

「窓開けててねー。」

無事に着地したようだ。問題児ばっか。オレは、頭を抱えた。

夜の静かな倉庫。

「やっと見つけた。ヒノトリ。」

「何でおれ、ヒノトリなんだっけ？伝説じゃねぇのにな。しかもすれ違ってて、気付いてねぇのはそっちじゃん。」

そろそろ卒業したい。こんなやり取り…返り血がベタベタするだけ。あと、絶望的すぎる虚無感。

「キヨいや、クリーンだっけ。ソイツがチクッた？」

「相変わらずお気に入りしか覚えてねぇな。」

そのあとは地獄絵図。拳に生臭い血。自分か相手か分からないくらいの血の量。

次の日。

キヨの全てがボコボコだった。桜が駆け寄っても、シカトしてた。

あぁ。戻ってきた。

一番荒れてた頃のキヨが。

トウダイモトクラシ

「また戻って来てくれるって信じてた。」

オレは報告係。報告しに来ただけなんて、甘っちょろいワケはなかった。ボスに手をさしのべられたら、すがってしまう。初めて会った日の様に。

中1は最悪な年だった。幹也と出会ったけど、他の奴らと同格で1クラスメート。ダチなんて必要無い。オレは冷めていた。ある日、トイレに入ろうとした時。

「キヨって調子乗りすぎだよな。」

「面白くねぇよな。」

「やめろって。お前ら言い過ぎ。」

悪口なんて言われ慣れてたし。自分も言いまくってた。でも、幹也は違っていた。フォローされたのにすっげぇ腹が立った。　心のどっかで、かっこいいと思ったけど、良い奴ぶってムカついた。周りの奴らも『あちゃー、言い過ぎたなー』みたいな雰囲気にさせる幹也が、羨ましかったんだと思う。

「ちょっと来いよ。」

「どうしたんだよ！」

授業が始まるのに、幹也を裏庭に引っ張った。

「いつも、いい奴ぶってんじゃねーよ！」

「やっと本音言ったな。キヨはいつも嘘っぽいんだよ。」

「うるせー！」

オレは殴ってんのか、平手打ちか、蹴ってんだか、頭突きだかめちゃくちゃだった。幹也は冷静に、避けなかった。

「なんでっ、避けねぇんだよ！」

「おもしれー。壊れたオモチャみてぇ。」

「ふざけんな！」

ストレートが顔面にきまった。

「いってー！おい手加減しろよ！」

「オレ、初めて人に対して怒った。」

オレは腰を抜かしたようにへなへなとしゃがんだ。

「最初っからダチだろ！ほら！」

さしのべられた幹也の手は、すっげぇ熱かった。きっと幹也は痛みを手を握りしめる事によって耐えてたんだ。かっこつけだ。

オレは今でもダチはお前だけ。

回想終了。今の思い出の中にボスが現れなかったな。しかも最悪の1年が幹也によってまとまってしまった。

オレが不良チームに入ったのは、入ったのは…。

「あんれー？こんな時間に中坊が何してんの？」

家にいるのが嫌な時期だった。ゲーセンで時間を潰してたら、たむろってる高校生に目をつけられた。

「そこ通るんで、退いてもらえますか？」

「どうします。ボス。」

「お前さ、いつも退屈そうだよな。どう？オレらのグループ入んねぇか？」

ボスと呼ばれた男は、今まで会った男とは、雰囲気が違う気がした。

「キヨって言います。よろしくお願いします。」

オレは頭を下げていた。絡まれたヤツらの仲間になるなんてバカげてるけど、オレの居場所をくれた人がボスなんだ。

今さら裏切れねぇよ。

キヨが1番荒れてた時に戻った。一匹狼で授業はサボってばかり。誰が話しかけてもシカト。傷痕を見れば分かる。わざと人を遠ざけてる。特に桜に冷たい。

「よっしー。キヨは、またボスに会ってるみたいだね。」

「キヨをそこまでさせるボスってどんな男？」

「太っ腹で、一匹狼なところがあって、本当は優しい人。今は、何もできないけど、もしもの時はキヨを助けるよ。」

「キヨはいい彼女持ったな。」

ニッコリ笑う桜が、今は痛々しかった。

数日後の夜に、光の家に、マサと3人で集まった。

「僕が二つのグループの歴史を教えてあげよう。」

「光先輩知ってるんすか！？」

「ったく。どこルートだよ。」

丸テーブルの上に何やら紙を出した。

「これがまとめた紙だよ。二つのグループは実は一つだったんだ。」

「だから？今は乗り込むか乗り込まないかを話してんだ！」

テーブルをダンッと叩いた。キヨは、家にも帰ってない、学校にも来ない。お気楽な両親だからいいものの。俺んちなら捜索願い出してるぜ。

「幹也さんすいません。バカ兄貴の為に。」

「僕が意味もないのに、調べると思う？」

「…分かったよ。早くしろ。」

ある町に、不良にとって、先輩から代々伝えられてきた憧れのグループがあった。それが『シャインレイン』。晴れの日も雨の日も共に…という意味らしい。

「前フリなげぇよ。」
肘をつく俺。
「物語もプロローグが肝心だろ。」
「一つだったなんて、あの二人のボスも同じグループだったんすかね。」
「あぁ。なんせ二人のボスの代から『シャイン』と『レイン』に分かれたんだからね。」
光のイラスト見る限り、ボスたちの顔知ってるな。ふ〜ん。レインのボスこんな顔してんのか。このイラストどっかで見たような。
「気付いた？レインのボスは、前近所に住んで麗兄だよ。」
「マジかよ！」
「幹也くんと僕の言い分なら聞いてくれる。……と思うよ。」

「その間だと、あんまり希望ないんすね。」

「ぶっちゃけ、光とイタズラしまくってた。泥団子投げたり、水まいたり…とにかく。ヤバい兄ちゃんだったんだな。」

血がサーっと引く。キヨを返せ。なんて言えねぇな。まず、『イタズラしてすいませんでした！』からだよな。

「ほらイタズラしたら、仕返しされてたし！もう大丈夫だよ。」

「さっきから何の心配してるんすか？」

「溜まり場とか調べたよな？」

光がペラっと紙を見せた。住所が書いてある。

「行きましょう！」

「マサにはまだ分かんねぇんだよ。あの世界の怖さをな。」

「キヨ先輩に守られてたからね。て訳だから、マサは邪魔。」

まぁ。これはマサを試す為に言ってるだけだ。

「オレ足手まといになりませんから！」

満月の夜、俺達はキヨを檻から救いに向かった。

住所を頼りに、着いた場所は昔小学校があった場所。そのまま校舎が残っていた。いかにもデソウ。

「誰もいないんじゃないすか？」

「マサつかまるな。自分で歩け。」

「音楽室の電気ついてるよ。」

先頭を歩く光が振り向いて言った。

「せーので入るぜ！」
「いっ。」

「せーの。」

「で。」で突入した。一人の男が窓際に座っていた。

「久しぶり。近所のワルガキ。」

他には誰もいなかった。麗兄は相変わらず、さらさらの色素の薄い茶髪を風にそよがせていた。女の人みたいな綺麗さがある。

「麗兄。キヨは？」

「おい。幹也くん順序があるでしょ！」

「キヨ？あぁ。クリーンの事ね。オレは声をかけただけ。戻ったのはキヨの自由。」

「兄貴を返せ！」

「マサまで落ち着けって。」

麗兄はゆっくり立った。そして、マサに近づく。

「昔のクリーンにそっくり。弟がいたんだ。面白いね。」

「麗兄。キヨは？」

「知らない。他の奴らと遊んでんじゃない？あと、いきなり来ないでほしいな。ここは、オレ達だけの場所なんだ。」

それだけ言うと、また窓際に座った。　その後は何を言ってもシカトされ、俺たちは一旦帰る事にした。

「明日は、遊びそうなトコロにまわろう。」

「さっきの人、怖かった。オレ、一人にしか会ってないのに情けねぇよ。」

「あー。麗兄は別格だから大丈夫だよ。僕たちもついてるしね。」

マサは黙りこんだ。せめて学校来いよキヨ。不安で仕方ない。何かが引っかかる。俺はなかなか眠れなかった。

別れと始まり

家を出たら、キヨが待ってくれてた。

「キヨ！」

「未来。しばらく会えないから会いに来た。」

「待って！もうボスとはケリをつけたって、言ってたじゃない！」

キヨのシャツの裾を掴んだ。このまま離したら、もう戻ってくれない気がする。

「知ってた？オレ思った以上に欲張りなんだ。」

後ろ姿だから、顔が見えない。でも、はっきりした男らしい言い方だった。

「未来、愛してる。」

キヨは振り返ってゆっくり、キスをした。スローモーションみたいで、久しぶりのキスは、切ない別れの味がした。

「ばーか。泣くなよ。プロポーズはしに来るからさ。」

「っ…バカはっ…キヨでしょっ…？他のっ…良い男と…結婚するんだからっ！」

「くっそー。あんま可愛い事言うなよな。」

私が最後に見たキヨの笑顔は、大好きな彼らしい、はにかんだ笑みだった。

『レイン』と『シャイン』は、この町から消えた。俺とマサと光は、毎晩歩いて聞き込み調査をした。

「実は、兄貴は隣町の高校に編入するんです。」

「はぁ。何で黙ってたの？僕たちムダ足じゃん。」

「あんま、ふざけた事言うな。早く探そうぜ。」

冗談なんかじゃねぇって分かってた。昨日、キヨが会いに来たから。夢だと思った。夢なら良かった。

夕べなんとなく眠れなかった。いきなり、キヨから電話で公園に呼び出された。

「よ。久しぶり。」

いつものキヨで、拍子抜けした。

「よ。じゃねぇよ！みんなにどんだけ心配かけてるか知ってんのか？…元気そうで良かった。」

「オレ、しばらくここ離れるから。唯一のダチには、知らせねぇとと思ってさ。」

「あんなに受験頑張ったのに、離れて高校どうすんだよ。」

「隣町に行く。編入試験ちょろかったんだぜ。受験頑張って良かっ

た。」

いきなりキヨが拳を突き出してきた。

「いつこっちに戻れるか分かんねぇけど、ダチでいてくれるか？」

コツン。と俺も拳をあてる。

「俺はもう、一番のダチのつもりだぜ。」

「まーた、かっこつけやがって。」

その後は、バカ話で盛り上がった。会いに行こうと思えば簡単に会えると思ってたんだ。

人との出会いは、別れる為にある。なんて、誰かが言ってた。立川先輩とは、短い付き合いだったけど別れる時は、切なくなった。キヨとは、隣町だし電車ですぐ会える。だから、別れなんて言わねぇんだ。

「みきや、荒城ほんとに転校したんだね。」

「隣町だし。近いだろ。」

「だといいけど。チャイムなっちゃった。席に着かなきゃ。」

華は、自分の席に戻った。華までどこかに行ったらどうする？絶対連れ戻すに決まってる。現実は、ドラマチックにはいかないよな。

後ろから、シャーペンでつつくヤツはもういない。自然とため息が出る。

「吉井ー。先生の授業そんなにつまらないか？黒板の問題解け。」

「げー。はい。」

ヤバ。古典だ。華が小声で答えを教えてくれた。

「正解。次は自分の力で解けな。」

キヨに助けられてた部分結構あったんだ。

昔使われてた小学校の音楽室。

「いいか。ここからは無理強いはしない。まぁ、いつもしてるつもりは無いが。」

どっと笑いが起きる。

「ヒノトリとオレの争いにお前らを巻き込むのは、これで最後にしよう。これからは、『シャインレイン』それがオレ達のチーム名になるんだ。」

『おー！』と男たちの雄叫びが校舎に響き渡った。

キヨは一人、窓の外を眺めていた。ここでの最後の夜を噛み締めるかの様に。

とある建物の地下室では、真面目そうな男達が会議をしていた。

「もう、真面目なフリは疲れただろ。もう一度あの頃みたいに暴れ

てやろう！『シャインレイン』の名はオレ達がとる！」

男たちは雄叫びの変わりにダデ眼鏡を投げた。

まさか、さわやかサッカー少年が、この中にいるなんて誰も想像してなかっただろう。

膝枕の誘惑

キヨと会った次の日。有野に準備室に呼ばれていた。

「おう。お前にお客さんだ。オレは忙しいから。」

俺が入るなり、有野は部屋を出て行った。

「吉井幹也くん。」

「宝来が現れたからキヨは転校するハメになったんだ。」

その時の俺は、八つ当たりする場所が無かった。俺がキヨに話さなければ良かっただけの話って分かってるのに。

「あれ？おかしいなぁ。オレの思う吉井幹也は、もっと冷静な判断力のある男なはず。」

「…からかいに来たのか？警備員呼ぶぞ。」

「怖い怖い。オレの仲間になれよ。まぁ、華ちゃんは貰いたいけど、それとこれは別だしね。それに、お前がいたら早く決着がつく気がするんだ。」

シャインのボスの仲間になって？キヨと敵になる？バカばかしい。昨日やっと誓ったんだ親友だって。

「荒城キヨの特技知ってる？『裏切り』って。アイツ、口が軽いし。すぐ裏切るし。だから、チームの奴らに目をつけられてんだぜ。」

「うるせぇよ。悪口言うんじゃねぇ。」

「悪口じゃねぇ。オレが言いたい事分かるだろ？」

一度やめたって事だけでも、良く思われないはずだ。宝来は、『シャインに入って、キヨを助け出せ』って言ってる。

「考えさせてほしい。」

「そう？たまに、ここにいるから。答えは出来るだけ早めにね。」

それだけ言うと、窓から出た。よく、見つかんねぇよな。

ガラっと、ドアがあく。

「とっくに授業始まってるぞ。」

「げ。次移動教室だし。」

「いいか。不良グループに入ったら、周りにも迷惑がかかる。それだけは覚えておけ。」

「あー！立ち聞きしてましたね！」

「見張ってたんだ。早く授業行けよ。」

頭が痛くなってきた。しかも、気絶とかさせまくってた奴らと、仲間になれとか、ややこしいだろ。キヨは転校してまで、周りを守ろうとした。俺にはそんな度胸も勇気もねぇよ。

ぼうっとしてたら、昼休みが来た。

「みーきや！今日天気良いから中庭で食べよ！」

「おう。」

華に手を引かれ、中庭で弁当を食べた。華が一生懸命しゃべってくれてるのが分かるけど、ただ頷いていた。

「ね。膝枕してあげよっか？」

「おう。…って膝枕ぁ？」

「嬉しくない？みきやが元気が出るように！」

照れたように笑う華は最高にかわいくて、綺麗だ。

「お、おじゃまします。」

「どうぞ。」

初膝枕！誰か写メとってくれ！ヤバい。とろけそうだ。感触が知りたい？それは俺だけの秘密だろー。うわぁ。顔がにやける。

「楽しそうだな。」

「杉岡か。邪魔すんな！」

「みきや、そろそろ…ね？」

しぶしぶ起き上がった。今度は俺の部屋で耳かきなんて！

「あれ？杉岡は？」

「分かんない。すぐ行っちゃった。」

「なぁ。今日放課後どうすか？」

「大丈夫だよ。何で敬語ー？」

そりゃ。下心満々ですから。

うお。今日誰もいねーよ。

「みきや？家に入れないの？」

「鍵持ってるから！」

ルンルン気分で鍵を開ける俺。隣の華は少し、もぞもぞしてる。

「やっぱり私、帰るね。」

「大丈夫。俺紳士だから！」

「鼻の下が伸びてるよ。」

「え！マジ！？」

鼻の下を確認中です。

「あ、華さんこんにちは。隣の晩御飯を貰いにきました光です。」

「まだ時間早いだろ。絶対窓から見えただろ。」

「良かった。光くんがいるなら大丈夫。」

「俺ってそんなに信用無いのかよ！」

光が華を俺んちに上げた。俺の家だっつうの。

自然に俺の部屋に入る光。俺は耳かきしてほしいのに！

「そういえば、おばさんは大学時代の友達と会いに行くって。雪は、マサとラブラブデートらしいよ。」

「俺より詳しいな。」

「あはっ。いいなぁ。光くんみたいな幼なじみいたら楽そう。」

「幹也くんは抜けてるトコロがありますからね。」

「へいへい。俺は茶持ってくる。」

トントンと階段を下りた。華の笑い声が響く。

適当に菓子を持って部屋に戻った。

ガッシャーンと落としたい心境。

「華さんの膝枕は気持ち良いですね。」

「弟にもよくしてあげてるの。」

「光このやろう！離れろ！」

ニヤリッと笑いゆっくり起き上がる光。

「弟によくするらしいよ。膝枕。」

「悪かったな！」

「みきや何で怒ってるの？」

俺はオレンジジュースを一気に飲んだ。華はクエスチョンマークが頭の上に浮かんでいる。光はべーっと舌を出した。

「あれだ。ただのカルシウム不足！」

「毎朝牛乳飲んでるよね。僕を追い越すためとかでね。」

「えっ？えっ？えー！？」

混乱中の華。膝枕誰にでもするなよー。俺落ち込むわ。

「あ。幹也くんが拗ねた。」

「みきや？どうしたの？」

寝転がる俺を揺する華。

「どうせ俺は弟みたいなもんですよっ。」

「華さん。膝枕は誰にでもしたらダメですよ。僕以外なら危なかったです。」

「そうなんだ？分かった。幹也おいでー。」

「華！」

結局、膝枕をして貰い、ご機嫌になっていた俺だった。

さすがに光は帰り、二人きりになった。ちなみに、まだ膝枕は続いてる。華は俺の前髪を触った。

「弟扱いすんなよ。」

目が合うと、華の顔が近づいてきて、キスをした。

「弟にはこんな事しないよ?」

「華…もう一回。」

「みきや?」

「俺ちゃんと彼氏だったんだな。」

「もう!当たり前でしょ?」

二回目のキスは、俺からリードした。膝枕からのキスってかなりイ

イかも。と思った俺だった。

華を途中まで送ってから、宝来の言葉を思い出した。いきなり現実に引き戻される。

「不良か。俺に合わねぇよな。」

気が付けば声に出てた。

「お兄ちゃん！」

「近所迷惑だ。うるさい。」

「だってお兄ちゃんがフラフラしてたから、溝に落ちそうだったんだもん！」

「うわ。マジだ。危なかった。さんきゅ。」

「さんきゅ。とか怪しい。何か隠してるでしょ？」

女の勘は怖い。

「早く帰るぞ。今日オムレツだったぜ。」

「あー！話しそらした。オムレツかぁ。やったぁ！」

単純な妹で良かった。まぁ、よく考える事にしよう。

甘い言葉の罠

さっきから携帯画面とにらめっこしてる。

【黒崎】

真ん中のボタンを押せば、彼につながる。

「未来ー！ご飯よ！」

ピッ。思わず通話ボタン押しちゃった。

《嬉しいな。レースから電話くれるなんて。》

ワンコールで出た。

「ボス。レースってやめてよ。」

《レースが似合うからしょうがない。またキヨの居場所か？あいつも人気者になったもんだな。》

「もう未来だよ。どうせ教えてくれないんでしょ？切るね。」

《サンシアノヤカタ》

「…っ！」

《待ってる。そこでなら教える…かも。》

ブチッと私からきった。ボスはいつも仲間だけの変な暗号とかつける。サンシア…三アシ…三脚の舘。三脚で建ってるみたいな建物はあそこしかない。

それより、よっしーはボスと会ったんだ。

「未来！ご飯冷めちゃうわよー！」

「はーい！今行く！」

階段を下りながら、キヨの顔とボスの顔が思い浮んだ。ボスの事だから何か企んでるに違いない。

まだ5日しかたってないのに、キヨと会いたい。

甘い言葉の誘惑が私を誘う。約束したのに、もう挫けそう。

昨日。キヨの転校した学校に行ってみた。荒れてるって聞いてたけど、校舎もボロボロで近づけ無かった。男子の割合が多いらしく、校門にいるだけで絡まれた。

別にそれが怖かったわけじゃない。ウチの学校と環境が違いすぎてそれ以上近づけ無かった。キヨがこの中にいるって思うだけでなんだか、違う気がした。キヨが変わってしまう気がした。

結局来てしまった。

蝉がせわしく鳴く。私の心臓のうるささと同じだ。

建物は、美術館だった跡地らしく、変わった形をしている。いつも二階の窓際にボスは座っている。

「あっれー？ヒラヒラじゃん。おひさー。」

「今日の見張りカラーなんだ。これあげるー。」

「さんきゅー。コーラとか気いきくじゃん！」

ごくごくと飲むカラー。

「それボスに持って来たの。」

「ぶーーー！」

「ごめーん！うそ。じゃ、通るよ。」

あいつには、ヒラヒラ、ヒラヒラいじられたんだよね。やっと、仕返し出来た。後ろから空き缶が飛んで来たけど、しゃがんで避けた。あんなヤツで見張りになるのかな。やたら蛍光色な服着てて、目立ちすぎだっつの。あの髪何？頭からトゲ出てるし。なんかカメレオンっぽい。

ボスの部屋の前に誰かいる。ややこしいヤツが出た。

「何しに来た？」

「副長、今日はボスに呼ばれたの。」

「お前は既に辞めたはず。」

日本刀を懐から出す。中学生の時はなんとも思わなかったけど、普通日本刀持ち歩いちゃダメだよね。男の人と思えない綺麗な長い茶髪。凛々しい瞳。今は睨まれてますがね。

「ボスに確認してよ。私だってやる時はやる…かもよ！」

実際は何もやれない。

「フトマユー。うるさい。」

ガチャっとボスが眠たそうに出て来た。寝てたんかい！私が悩んでやっと来たっていうのに…寝てたんかい！

「この女が。」

「フリル…違った。レース入れ。」

「フリルって何！？私フリルだったかも知れないの！？」

バタン。ドアを閉める直前のフトマユ副長の切なげな顔を見てしま

った。

「副長いいの？」

「なにが？」

相変わらず綺麗な顔。彫刻みたい。無表情が威厳がある。

「…何でもなかったです。」

「ふわぁーあ。レースからの電話夢かと思った。」

「夢って！私めちゃくちゃ悩んだんだよ！」

「まぁ座ったら？久しぶりの仲間はどう？」

ボスの目の前のホコリっぽいソファーに座った。

「そうやってキヨも、また仲間にしたんだね。」

「そうだっけ。覚えがないなぁ。」

「笑わないで！キヨの居場所を教えてよ。何でボスと一緒にいないの？」

「クリーンの学校に行けば分かるはず。可愛い顔なのに八つ当たりしないで。」

パァン。

「触んないで。」

ボスの手をはたいた。私の顔を触ろうとしたから嫌だった。それでもボスは、微笑んでいた。まるで、私に対して小さい子供を見るような優しい目を向ける。

「気が強いところ、全然変わってないな。前から、触らしてくれなかったからな。まるで野生の猫みたいだ。」

「何とでもどうぞ。私には、キヨしか触れないよ。」

「キヨも、本当は人を信じないところがあるだろ？だから、今旅に行かせた。可愛い子には旅をさせろって言うだろ？」

「た…び？どういうつもり？」

ふっとボスは、窓の外を見た。

「もちろん、そのままの意味じゃない。後は、自分で考えな。」

そしてボスは、何も言わない。用が無くなれば、いつも無関心になって反応を示さない。

謎なぞが好きなボスだけど、謎なぞと思えなかった。

いくら考えても分からない。『可愛い子には旅をさせろ』って、まさか、訓練とかさせてたらどうしよう。

私は、キヨがいたからレインに入った。顔見知りもたくさんいたし、みんな優しくしてくれた。表面ではの話。慣れてくるにつれて、だんだんと見えない部分が見えた。

あんなに楽しくツルんでたのに、慣れは怖い。シャインとレインに分かれたのも分かる気がした。世の中、綺麗事だけじゃない。私とキヨは高校生になると同時にレインを卒業した。

卒業なんて簡単に言うけど、抜けるのにはそれなりの罰があった。

キヨは私を庇ってくれて、私にはこの人しかいないって思えた。

だから、今度は私の番なの。

今はキヨの高校にも、入れないけど必ず会いに行くから。

プロポーズしに来るなんて言ってくれたけど、私はやっぱり待てるほど大人じゃないよ。あの時のキスの感触が今でも唇に残る。

だから、誰にも触らせたく無かった。

キヨは、今何を考えてるの？携帯も繋がらない。キヨのイタズラな笑顔が見たい。声が聞きたい。

ただ、キヨのそばにいたい。

チュッと鳴るキス

部活に華が顔を出さなかった。いつも欠かさず見に来てくれてたのに、心配だ。

教室に戻ると、華は俺の席で眠っていた。

「ったく。無防備なお姫様だ。」

前の席にまたがり、華の様子を見た。気持ち良さそうに眠っちゃって、俺を待っててくれたのか？わー。めちゃくちゃ可愛いい。

「んっ…。ひゃっ！みきや？」

「何で俺の席で寝ちゃってんだ？」

まだ寝ぼけてる華にデコピンした。目をぱちくりさせている。

「今日、先生に呼び出されて空手部に行く暇が無かったの。みきやの席に座ったらうとうとしちゃって、そのまま寝ちゃってたみたい。」

「『寝ちゃってたみたい。』じゃねぇだろ。襲われたりしたらどうすんだよ。」

「何その裏声！似てないもん。…襲う物好きなんてみきやだけだよ。ばか。」

「あー華が照れてる。しかもほっぺ痕ついて赤くなってる。」

華の右頬に触れた。

「えっ！どうしよう。恥ずかしい。」

「華…大好き。」

チュッ。とわざと音をさせて唇にキスした。

「やだ。みきや…いなくなっちゃうの？」

潤んだ瞳で見る華。

「こら、まだ寝ぼけてんのか？どこも行かねぇよ。」

「ほんとに？約束してくれる？」

「…あぁ。こんなに大好きなんだぜ？離れる理由なんてねぇだろ。ほら、帰るぞ。」

最後らへん目をそらしてしまった。嘘なんてついてねぇのに。

「私…聞いちゃったの。刹那さんが自分から言ってきたんだけど、私…邪魔するなって言われた。」

「…宝来の言葉なんて信じたのか？デタラメに決まってんだろ。」

「嘘つき。」

心臓がとまるかと思った。まるでナイフで刺されたみたいに胸が痛い。

「いつまでもそうやって拗ねとけよ。俺帰るわ。」

俺は走って教室を出た。これ以上、華と一緒にいたら八つ当たりしそうで、優柔不断な今の俺自身に腹が立ってるのに華まで巻き込み

たくない。

「幹也くん。路上でつっ立たれると迷惑なんだけど。」

考え事ばっかしてたら、足が動かなくなってたみたいだ。

「…たまたまだよ。光に言われたくねぇし。」

「いったん、僕の家で頭冷やそうか。」

「いつも悪いな。」

「うわっ！気持ち悪いからあやまんないでよ。うげぇ。」

うげぇ。とまでは行かねぇだろ。と笑いながら、そのまま水田サンちに行った。

「はい。」

「冷やす。で氷水ってそのままかよ。あ、でも気持ち良い。」

「リラックスしなきゃね。今は聞かないであげるけど、だいたいは何絡みか想像つくよ。」

俺は光んちのリビングのソファーに寝転がった。氷水をあてると、不思議と気分が落ち着いてくる。

「最近寝不足なんでしょ？ちょっとは寝たら？」

「…ん。さん…きゅ。」

バサッとタオルケットをかけられた。それから、すぐに眠りについた。

「みきや、行かないで！」

これは夢だって分かってる。今の俺にはキツイ。そんな泣くなって。…華の洋服が薄くなっていく。

「だぁっ！」

俺は、目を冷ましたと同時にガバっと起き上がった。

「幹也くんエロい夢でも見た？」

アイスをなめながら、冷たい目で俺を見る光。

「まだ、エロくはねぇよ！阻止したし。ちっ。最後まで見れば良かったぜ。」

「すっきりした顔してるから良かったよ。こっちまで被害が及ぶところだったよ。全く。」

「えー！？自分に被害が来ない様にだったのかよ。さすが光。」

フッと余裕の有る笑みをされた。早く言えば、鼻で笑われた。

さすがに明日には、宝来刹那に返事しないといけない。俺の心は決まっていた。

「お兄ちゃん。ハンバーグもらっていい？」

「良いワケねぇだろ。あ！光！食べやがったな！」

「もぐもぐ。さっきのリラックス料だよ。」

母さんも父さんもただ笑って見ていた。

この暮らしを変えようなんて思わない。

とある大学。俺は学校をサボってまでここに来た。さすがに学ランはヤバいから、公園で私服に着替えた。

「吉井幹也。ほんとに来たんだな。」

入り口付近をウロチョロしてたら、宝来刹那に見つかった。いや、見つかって良かった。

「返事をしに来ました。」

「今日の昼休みも、そっちの学校行こうと思ってたのに。」

「よくも華に余計な事言いましたね。」

俺が睨みつけても、クスッと余裕の笑みを見せる。いかにも的なダテ眼鏡が腹立つ。

「華ちゃん、体当たりして来そうじゃん？華ちゃんに言われたら、挫けそうだもんオレ。」

「…返事はノーです。仲間にはならないし、あなたのチームには入りません。」

「一人で解決します。って言いたいんだろ？甘い。君はハチミツだ。」

ハチミツ？ボスは変わりもんが多いらしい。

「そんな目で見るなって。ハチミツはもちろん例え話。知ってるとは思うけど、向こうの連中は日本刀を持ち歩くクレイジーなヤツらもいる。」

「宝来の仲間にも、ナイフとか持つ奴らはいんだろ。」

「目には目を歯には歯を。って言葉知らねぇの？ってことで仲間になってくれるんだな？」

「それで、よく死人出ねぇな。話聞けよ。仲間にはなりませんから。」

俺は大学を出ようとした。

ヒュッ。

すぐには、帰してくれないようだ。宝来の武器は、透明な紐。今日は天気が良いから、透明な紐が反射してどうにか避けた。

「オレの目に狂いは無かった。」

「何でそんなキラキラした目で見るんすか？だから、仲間にはなんねぇよ！！」

俺はしばらく追いかけられた。男に追いかけられても全く嬉しくない。

「だから、不良グループなんて俺には無理！」

足を引っ掛けられ、転ぶ。端から見れば何もないところで転ぶマヌケな男だ。

「つーかまーえた！」

「ぎゃー！」

俺は軽々と担がれ連行された。

どうなる俺！

キヨ過ぎる青空

忍者か。ってくらいに俺を抱えたまま、宝来は木を越え山越え。

今俺の手元には、契約書？らしき紙がある。

「ここにサインして。」

宝来刹那がめっさニコニコしてます。

「ボスー！また無理矢理勧誘したんか？」

何でいきなり忍者テイスト入ってんだよ。今、男が天井から降りて来た。黒髪だ。俺も黒髪だけどな。

「ちっ。ツルギに見つかったか。」

「いい加減、連れ去る癖なくさないとヤバいとよ。よく捕まらんよな。」

「ここどこっすか？」

「オレんち。」

この忍者屋敷が家…。

「いいっすね！」

「だろ？ってことでサイン。」

「いかんよ！簡単にサインしたらいかんとよ。兄ちゃんが連れて帰ってあげるからな。」

…すいません。アナタの方が怪しいです。

「ツルギは一様、オレの右肩だから。」

「右腕やないんかい！？」

「何か楽しそうっすね。レインとの争奪戦いつなんすか？」

きっとそこにキヨは来るはず。

「あー。それだけは企業秘密。教えるとしたら、サインしてシャインに入ってからだね。」

「明後日。この近くの河原で。帰る道を案内するからおいで。簡単に変なおじさんについて来たらいかんよ。」

「ツルギ！おまっ。何勝手に言っちゃってんだよー。いいとこだったのに。ブーブー。」

あからさまにブーイングする人初めて見た。手も親指下の向けてた。こんな人がボスでいいんだか。まぁ、関係ねぇけど。

「今のうちに行くと。」

「イクト？」

次の瞬間、おんぶされた。だから、俺そんなに軽くねぇし！

「マジはーなーせー！」

「つかまらんと、首なくなるとよ。」

「ぎぃやぁぁあ！！」

「ツルギ待てー！」

待て待て待てー。俺…姫的ポジションじゃないよな。…しばらく想像中…。

「ちょっと頭伏せてなー。」

ドゴッ。

「アッハハ。遅かったか。」

このナマリ男ぜってぇわざとだ。木の枝に顔面直撃した。痛すぎて声も出ない。

「失明したらどうすんだよ!」

「よーし。着いたとよ。」

「シカトすんな!」

いきなり頭の髪をガシッと掴まれた。

「あー見えて、ボスは勧誘率１００％なんやよ。覚悟しいや。」

「いっでぇ！！髪が抜ける！」

「お前のどこがええんか分からんけど、ボスが仲間に入れたいんなら…。」

予告無しに手を離され、思わずこけかけた。その間にいなくなっていた。そしてここは、決戦のある河原。

「アイツ案内しやがった。」

流れる川は、青空を写してまるで海みたいな青だ。

あのナマリ男何考えてんだろ。宝来とかアイツみたいに、キヨをさらえたら良いのに。

「…幹也？」

まだ数日しかたってないのに、もう１０年以上会ってない気がした。声が懐かしすぎる。

「キヨ…。」

困ったようにキヨは笑っていた。

「幹也に見つかるなんて、オレもまだまだだな。」

「怪我だらけじゃねぇか！」

「ははっ。男の勲章だよ。」

寂しそうに笑うキヨ。河原はゴツゴツしていたけど、キヨは俺の隣に座った。

「空がスゲー綺麗だな。」

「寝るなよ。汚ねぇな。」

「まぁな。頭に石が当たっていてぇし。」

俺も寝転がった。青い空が目ぇいっぱいに広がる。

「学校サボってんじゃねぇよ。」

「じゃあ何で幹也はここいるんだ…よっ。」

肘で脇腹をつつかれた。なぜか目頭が熱い。ゴツゴツと石が当たるからだ。

「いってぇな。俺は真面目くんだから、ごほうびだよ。」

「んー！オレも青の一部になりてぇー！雲になって漂うのも良いかな。」

キヨが体を起こして気持ち良さそうに背伸びした。キヨを見つけたら聞きたい事たくさんあったのに、何もなかったかのように隣にいる。

「ツルギに連れて来られてたな。シャインに入ったのか？」

俺は寝転がってるから、キヨの背中しか見えない。急に現実に戻された。

「キヨの言うスカウトだよ。アイツら忍者だったのか？」

俺も座った。隣を見ると、キヨは泣きそうな顔をしていた。きっと本人は気づいてない。

「キヨ？」

「何かオレの顔おかしいや。いっつも幹也には振り回されるんだよな。オレが振り回そうと頑張るのに、天然の小悪魔だろお前。」

「…何の話だ？」

ガッ。と頭突きが来た。さすがにくらっとした。俺空手部だぜ？今日…反射神経死んでるよ。

「…った。石頭！」

「幹也！明後日には決まるよ。じゃあな。」

クラクラしてる隙に、キヨは帰って行った。キヨは、明後日ここに来る。キヨを見たら、邪魔しちゃならない気がした。

あんな緊迫したキヨ初めて見た。

「…だからここどこだよ。」

家に着いたのは、三時間後だった。服はボロボロの私服のまま帰ろうとして、光に呼び止められたのは言うまでもない。

光に強制的に、風呂に入らされた。

「何があったか分かんないけど、家族心配させたらダメでしょ。」

「ん。今日キヨと会った。」

ガッチャーン。俺の水…。光が俺に渡そうとした水を落とした。

「何ですぐ言わないの！マサにも電話しないと！」

珍しくあたふたする光。

「マサには言わないでくれ。」

「は！？」

携帯を片手にすげぇ睨まれた。俺はかくかくしかじかと説明した。
割れた破片をかたずけながら、ため息をつく水田光くん。

「だからこんな時間に私服だったんだね。華さんとかにも言ってないでしょ。」

「まさか、連れ去られるなんて思わねぇだろ！」

「…。」

「おい。目ぇ据わってるぞ。」

本日二度目の盛大なため息来た。

「もう僕は知らないよ。マサに言わないのは納得いかないけど、マサも決戦に行くって言いそう…いや、言うよね。僕は行かないけどね。」

「あぁ。光ならそう言うと思ってたぜ。」

ソファーでふて寝する光。

「じゃ、夕飯ちゃんと来いよ。」

「分かってるよ。おかず頂戴ね。」

こうして、水田サンちを出た。光は本当は、行きたいんだよな。俺のフォローとかしたいと思う。…場所言わなくて良かった。

夕飯で唐揚げを半分以上取られたのは痛かった。

空っぽの教室

今日は、みきやが無断欠席だ。

「…ら、舞原華！」

「は、はい！」

「教科書の続きを読め！」

今、歴史の時間なのにまだ、化学の教科書開いてた。

《２１４ページの５行目からだよ。》

席替えで隣になった杉岡が小声で教えてくれてる。

「しかし、秀吉は…」

せめてメールくらい欲しいのにな。

さっきから隣からの視線が痛い。絶対見たくない。

《さっきのお礼さ…》

私、シカトしてます。でも杉岡は挫けないで、私に話しかけて来る。

チャイムが鳴った。

でも、チャイムが鳴ってからは他の友達のところに行った。

私は携帯を見た。みきやからは来てない。未来ちゃんも遅刻みたい。

何か疎外感が沸々と出て来る。

「刹那さんなら知ってるかな。」

昼休みに、現国準備室に行った。

コンコンコン。ノックしても返事がないから開けちゃった。

「はーる…。」

寝て…る。眼鏡がずれてるよ。はる兄まで相手してくれないなんて、退屈だなー。

顔に落書きしちゃお。

そーっと、油性マジックを近づけたら、腕を掴まれた。

「こら。何してんだ？ふぁー。よく寝たー。」

はる兄が思いきり伸びをした。

「はる兄って呼ぶなって何回言えば…。何ちゅー顔してんだよ。」

「ごめんなさい。私が言いつけ守れない娘だから、みきやも嫌になっちゃったのかなぁ。」

「昼飯食ってねぇんだろ？ただ、そのせえじゃねぇの。パンやるから。ほら。」

駅前のクリームパンをくれた。

「それ好きだろ。たまたま買っただけだからな。勘違いすんなよ。」

「ぷっ。まだ何も言ってないのに。ありがと。」

クリームパンは甘くて、はる兄の優しさが伝わって来た。私に甘いからね。

「刹那さん今日来ないの？」

「分かんねぇけど、今いないから来ないと思うぜ。」

はる兄はピザパンを食べてる。美味しそう。

「やらねぇよ。分かったら教室戻れ。」

「やだ。みきやのいない教室なんて意味ないもん。」

「はぁ。次オレの授業なんだけど、ここで堂々とサボる気か？」

「ここでサボる…よ？」

私はしゃがみ込んだ。はる兄もしゃがんで私の顔を覗き込んだ。

「泣き虫華。」

「泣かないよ。泣いてもないもんねーだ。」

「華がサボるなら、オレもサボろっかな。」

私は目を見開いた。はる兄はニヤッと笑っている。

「あー！嘘ついた！」

「ほら、立て。行くぞ。」

腕を引っ張られて、準備室を出て、はる兄は鍵をかけた。

「オレの授業だけは、出ろ。」

頭をコツンと小突かれた。

窓の外を見上げると、青過ぎる綺麗な空だった。みきやも見上げてるかも知れない。

私は空を写メった。

「しょうがないから、準備出ようかな。」

はる兄の怒りの鉄拳は受けたくないし。しぶしぶ教室に戻った。

みきやのいない教室は、いつもの笑い声も何もかも私の心では空っぽに感じとってしまった。まるで、クリームパンなのに、クリームのないただの空洞のあるパン状態。

なら、メールすれば？

返事が来ないような予感がして嫌だよ。

早く電話したら？

『華の声聞きたいと思った』なんてもう、言ってくれない気がして怖い。

みきやはきっと、荒城の事で精一杯のはず。なんか、ただの勘だけど分かる気がする。

明日は、学校来るよね。ただただ、自問自答ばかりをくり返した。

次の日。門を出るとみきやがいた。

「はよー。華。」

私を抱きしめるみきやは、いつもより力強かった。

「おはよ。」

今はまだ聞かない方がいい。みきやの全身から、気持ちが伝わる。

「また四人で、遊ぶんだ。」

「うん。」

ただ、みきやの言葉に頷いていた。ぎゅうっと抱きしめて、私を確かめるようにキスをするみきや。

建物の影に入って、私は壁に腕を押しつけられた。心も腕も苦しい。

「ごめっ…。痛かった？」

「お願い続けて？」

ゴクンとみきやの喉が上下した。みきやの視線が集まる場所が熱くなる。

「はぁー。誘っちゃダメだろ。」

いきなり背中を見せた。私は後ろから抱きついた。

「やだ。私と繋がらないと、離れちゃうでしょ？」

みきやはピタリと動かない。私の手をみきやの手が包んだ。

「電車ごっこ。ガタンゴトンガタンゴトン。」

「もう！ふざけないでよ！」

私の手をみきやの口元に持っていく。私は少し背伸びした。

「俺さ、体が繋がんのは、すっげぇ嬉しいよ。でも、今も華のこと好きすぎて、ほら、心臓スゲーだろ。」

心臓に持っていかれた手に伝わってくる速い音。心地よく私の胸にも響く。

みきやが、ガバっと私に向き直った。

「あんま誘うと、次は最後までヤるかんな！」

「ねぇ。手繋いで学校行こう。」

「しょうがねぇな。」

恋人繋ぎ大好き。違うよね。みきやと繋ぐから好きなんだね。

「華さー。その指の絡め方どこで覚えた？」

「へ？あーこれ。知りたい？」

「…やっぱいい。」

「何よそれー！」

みきやが、もしも刹那さんのグループに入っても、この手は離さない。

私はこの時自分に誓った。

アイツの秘密

もう夏が過ぎる。雲の流れが速い。
俺はキヨと会ってから、足を突っ込まない事に決めた。

気持ちと裏腹なのどかな天気だ。俺は教室にいた。授業が耳に入って来るワケがなく、教科書に隠れて外を見た。足が無意識に貧乏ゆすりしている。

席替えして一番後ろの席だから、あんま目立たない。

チャイムが鳴って、先生に呼ばれた。

職員室。独特な雰囲気が嫌いだ。

「昨日の無断欠席何かあったのか？」

担任がめんどくさそうに聞いて来た。

「すいません。これからは連絡します。」

「まぁ。吉井は真面目だからな。悩みでもあるならいつでも言えよ。」

流す様に言った。俺は「ハイ」と言って職員室を後にした。

「みーきや。」

「わっ。びびったぁ。華どうしたんだ？」

「学校抜けよう！」

有無も言わさず、華に引っ張られて俺達は学校を飛び出した。

「早く乗れ。」

なぜかサングラスをかけた有野先生が車を出した。

「先生場所知ってるんすか？」

「言いたく無かったけど、オレ元ボスだから。決闘の場所はだいたい分かる。」

ずっと、華は俺の手を握っていた。

「いいか。時間的には間に合わねぇからな。」

「はい。」

「2時間はかかるんだよな。ってワケで電車で行ってくれるか？」

おいおい。正確な場所は分かってねぇだろ。俺と華は駅前でおろされた。駅前に杉岡がいた。

「来ると思ってた。ってか、ツルギさんに頼まれたんだけどな。」

俺は華の手を強く握った。

「オレ近道知ってるから。舞原は危ないかもよ。」

「私、着いて行きたい。」

華が背中を押してくれたんだ。

「一緒に行こう。杉岡案内よろしく。」

「オレが姫抱きしてあげようか？」

「やっ。みきや助けて。」

「こっちおいで。冗談はいいから、早く行けよ。」

「へいへーい。あんまいちゃつくと、谷底に落ちるかもな。」

ってか、電車乗らないのかよ。俺か華か分からない汗が手に滲む。

「みきや…手離さないでね。」

「当たり前だろ。ほら。恋人繋ぎなら大丈夫。」

華が安心したように、にっこり微笑んでくれた。

「ここ越えたら、すぐだ。」

コンクリートの壁がそびえていた。ヒョイと杉岡が飛んで登った。

「お前らの愛の壁乗り越えてみろよ。」

塀の上で見下ろす杉岡。俺は膝をついてしゃがんだ。

「つかまれ。」

「おんぶ？」

「ぐぇっ！首…っ苦し！」

華が、俺の首に巻き付ける腕の力を緩めた。

「ちゃんとつかまれよ。ダメだちゃんと足巻き付けろ。いくぞ。」

俺はそばにある木に登った。さすがにあの塀を一飛びで飛べねぇ。

「あと少しだ。」

木の枝に華を登らす。

「そこから、塀に飛べ。」

「ひゃ。怖い。」

「じゃあ俺から行くから、来いよ？」

俺は塀にジャンプした。足が滑りかけたけど、なんとか着地できた。

「華！来い！」

俺は両手を広げた。俺の胸に華が飛び込んで、バランスを崩した。

バチャン！

「川に繋がってたのか。良かった。」

「恐かったよー。」

しがみつく華を連れ、泳いで岸辺についた。

岸辺には、爽やかにスポーツをする少年たちがいた。

「…は？」

華も呆然とその様子を眺めている。

「お！吉井幹也！水浴びか？オレ達合併することになったんだ。」

「ん。ヒノトリと俺がタイマンで殴り合いをした末、仲直りしたんだよ。」

ボロボロで傷だらけのボス二人。

ってキヨは！？

「みっきーに舞原チャンじゃん。バドミントンしよ！」

「キヨ！このばかやろ！俺がどんだけ悩んでここまで来たと思ってんだよ！」

俺はキヨの胸ぐらを掴んだ。キヨは動じずに笑った。

「ちゅーは舞原チャンとしましょうね。」

「っバカ！」

「ちなみにオレ、交換学生だから。今色んな高校から生徒来てんだろ？」

さりげなく、俺の手を離した。

「未来までオレをどっかにやろうとしちゃってさー。マジで、寂しかったし。って事で、明日からまたよろしくな。」

「みんな転校って言ってたよ！」

「最初冗談だったんだけど、そんなに広がってたのかよ。幹也もオーバーだと思ったんだよな。うおっ！」

俺はキヨに抱きついた。

「なんだよ。くそー！もう離さねぇからな！」

「幹也…オレそんな趣味ねぇし。バカはお前だよ。早とちりしやが

って。つかオレまで濡れるっつーの！」

弟のマサまでも…本気で騙されてたんだな。ってか、あの家族の事だから軽い冗談か。

青春は短いって言うけど、俺達はまだまだ走り出したばかりだ。

友情も恋も同じくらい大事だけど、その時のタイミングとかで判断すればいいと思う。

アイツの秘密は、誤解が誤解を呼んだ、甘ずっぱい青春ストーリーだった。

『大好き』って君に伝えよう。きっと心が温まるから。

アイツの秘密（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました。色んな人物を書けて楽しかったです。サイドストーリーをまた、書けたらなぁなんて思ってます。秘密って魅力的ですよね。なんでか分からないのに泣きそうになりながら、書いた場面も有りました。心に残ってもらえると嬉しいです。またお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0642k/

アイツの秘密

2010年12月9日14時58分発行